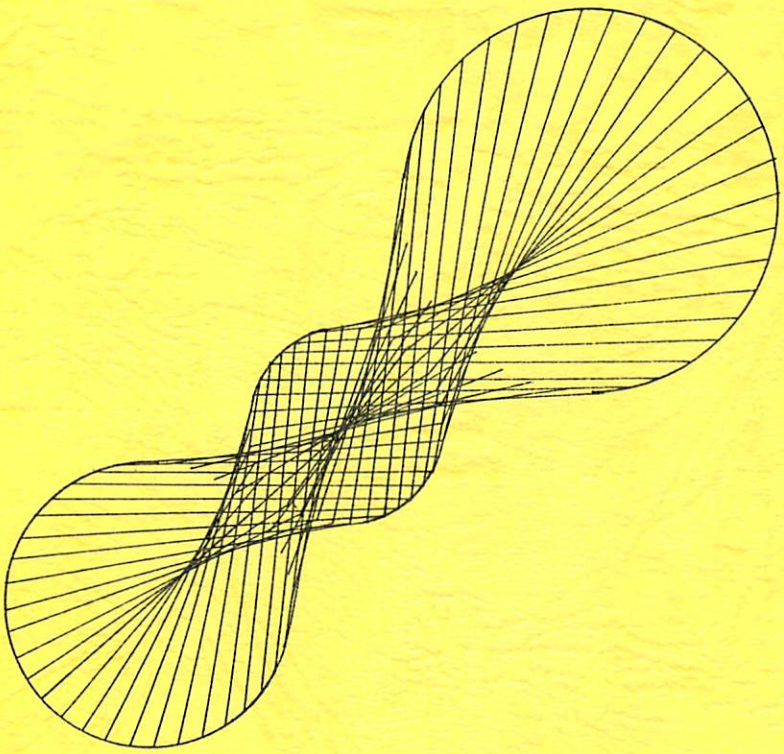
教育研究紀要　平成10年３月

教育はいま

第５号



仙台市教育センター

は　じ　め　に

戦後教育の見直しと，未来社会に生きる児童生徒の有り様を巡って，教育改革の真っ只中にある今日，学校・家庭・地域社会の果たすべき役割は何なのか，今真剣に問われているときであります。

平成９年11月に教育課程審議会の「中間のまとめ」が発表になり，具体的な方法論へと議論は展開しているときでありますが，どのような方向づけがなされようとも，それにかかわる指導者は絶えず自己研鑽を積み，自らの資質の向上に努めていかなければならない責務があります。

これらに対応すべく，仙台市教育センターでは様々な事業を展開する中，研修の分野につきましては教員一人一人のライフステージに合わせ，それに応え得るよう企画に工夫を凝らしながら鋭意努力をしているところであります。また，今日的課題の中から特に緊急性を要するものやこれからの動向とも絡めて提言できるものなどを模索しながら研究を続けてきておりますことはご承知のことかと思います。

さて，平成９年度５年目を迎えた教育センターの研究は，各教科に係る研究は一巡したことを以て，教科外の事柄に目を向け研究に取り組んでまいりました。さらに研究体制の見直しを図り，学識経験者並びに学校現場からの研究協力員の先生方はもとより，担当者だけでなく全指導主事が研究同人としてかかわるようにいたしました。その成果を「教育は　いま」として刊行の運びとなり，報告できますことを喜びとするところであります。

内容は，「校内研修調査研究委員会」，「進路指導調査研究委員会」，「道徳調査研究委員会」，「学校週５日制調査研究委員会」と四つの委員会を設け，研究を進めたものであります。研究は一年間でまとめあげることを基本に取り組みましたが，校内研修調査研究委員会は二年継続研究のまとめとして，また，学校週５日制調査研究委員会の研究につきましては，二年継続研究の一年目の報告であることをご承知おきいただきたいと思います。

それぞれの研究は，市立各学校にアンケート等に回答をいただくなど，ご協力をお願いし，調査結果をベースに考察を加えながら研究をまとめたものや，実践授業を通して教材の有効性等を検証したものであります。したがって，研究内容は学校現場と密着したものとなっており，市立学校の共通する悩みやそれへの解決になんらかの手がかりとなるものではないかと自負するものであります。

とは言え，研究はどの研究に限らず研究者側の独断となっている部分も多くあるものであり，必ずしも読者に納得のいくものばかりではないことも承知しております。読後，様々なご批正を賜れば幸いに存じます。

最後に，調査研究を進めるに当たり研究協力委員の先生方始め，ご協力いただきました関係者の皆様に心から御礼申しあげます。

平成10年３月

仙台市教育センター
所長　庄司嘉明

総　目　次

■豊かな心をもち，たくましく生きる子供を育てる道徳の授業の在り方 …… 5

―― 心をゆさぶる資料の選択と指導過程及び学習活動の工夫を通して ――

■自らの生き方を見つめさせ，主体的進路選択能力を育成する …… 29
学級活動における進路指導計画はどうあればよいか

―― 仙台市立中学校の進路指導実態調査を通して ――

■学校教育目標の具現化を目指す校内研修の在り方の探究（第二年次） …… 53

―― 校内研修推進のリーダーに対する意識調査と実践事例を通して ――

■豊かな学校週５日制の実現のために（第一年次） …… 77

―― 仙台市の子供と保護者への調査を通して ――

豊かな心をもち，たくましく生きる子供を育てる道徳の授業の在り方

――心をゆさぶる資料の選択と指導過程及び学習活動の工夫を通して――

■要　約

この研究は，今求められている道徳の授業の在り方について，その手掛かりを探ろうとしたものである。まず，課題を明確にするために，教師と子供たちの意識調査を行い，その結果を踏まえて，授業実践を積み重ねて行った。

その結果，発達段階に応じた適切，かつ様々な形態の資料の選択と，それらを生かす多様な学習形態の工夫により，子供たちの豊かな心をはぐくむ道徳の授業が展開できるという確信を得ることができた。

■キーワード

□豊かな心　□心をゆさぶる　□資料の選択　□資料の活用

□授業の工夫　□発達段階

目　　次

Ⅰ　主題設定の理由 …… 7
　1　求められる道徳教育の充実 …… 7
　2　指導上の課題 …… 7
　3　道徳の授業づくり …… 7

Ⅱ　研究の基本的な考え方 …… 7
　1　「豊かな心」「たくましく生きる」 …… 7
　2　心をゆさぶる資料 …… 7
　3　資料選択の視点 …… 8
　4　指導過程及び学習活動の工夫 …… 8

Ⅲ　研究の目標 …… 8

Ⅳ　研究の仮説 …… 8

Ⅴ　研究の概要 …… 9
　1　研究の方法 …… 9
　2　研究の内容 …… 9
　　(1) 実態調査 …… 9
　　(2) 授業実践Ⅰ …… 12
　　(3) 授業実践Ⅱ …… 15
　　(4) 授業実践Ⅲ …… 19
　　(5) 授業実践Ⅳ …… 22

Ⅵ　研究のまとめ …… 26

Ⅶ　研究の反省と今後の課題 …… 27

Ⅰ　主題設定の理由

■1　求められる道徳教育の充実

子供たちの心の教育にかかわる課題は，いじめや登校拒否の問題をはじめ，倫理観の欠如や基本的な生活習慣が身についていないなど山積している。第15期中央教育審議会の第一次答申では，その現状を踏まえ，自分の生き方，在り方を主体的に考える態度を育成し，「自らを律しつつ，他人とともに協調し，他人を思いやる心や感動する心など，豊かな人間性」をはぐくむことが今後の教育においても重要であると提言している。このことからも，学校教育での道徳教育の充実が一層求められていることは明らかである。

■2　指導上の課題

各学校では，道徳教育の学校で担うべき役割とその必要性については認識し，努力している。しかし，実際にはなかなか思うような成果があがっていない。その大きな要因は，平成6年度に文部省が実施した「道徳教育推進状況調査」の結果等からも推察できるように，道徳教育の核ともなるべき道徳の授業が十分に機能していないことにあると考えられる。

多くの教師は道徳の授業を大切にし，熱心に取り組んでいるのだが，「よい資料がみつからない」「道徳の授業の進め方が分からない」「子供たちが自分の考えを発表したがらない」など，授業を進める上での課題をかかえている。それらの諸課題は道徳の授業に真剣に取り組もうとする教師の意欲を低下させ，結果として子供たちの道徳性の育成を阻む一因にもなっていると考えられる。

■3　道徳の授業づくり

そこで，道徳の授業を形式的で難しいものにせず，教師が取り組みやすく，子供たちが自分の生き方や在り方を語り合い，考え合えるように工夫したいと考えた。その方策として，子供たちの心をゆさぶるような資料の選択とそれを活用した道徳の授業づくりに焦点を絞り，豊かな心をもち，たくましく生きる子供を育てることを目指したいと考え，本研究主題を設定した。

Ⅱ　研究の基本的な考え方

■1　「豊かな心」「たくましく生きる」

【豊かな心】

① 温かい人間愛の精神をもって，他の人々と交流し，他の人々を思いやる心

② 自他の生命や自然を大切にし，美しいものや崇高なものに素直に感動する心

③ 感謝する心をもち，進んで公共のために尽くそうとする心

【たくましく生きる】

より高い目標を目指し，希望と勇気をもって，どのような状況にあってもくじけずに，自らを律しつつ生き抜くこと。

■2　心をゆさぶる資料

【資料のもつ意味】

資料は異なった体験や考え，感じ方をもつ児童生徒が集まっている学級で，児童生徒が自分の価値観を問い直し，より高い価値観を求めて，みんなで話し合い，考え合う“共通の土俵”になる。

【心をゆさぶる資料】

子供たちが登場人物等の生き方や行動に共感し感動したり感銘を受けたりできるような内容で，道徳性を養うための教材として道徳の授業の中で活用できるもの。

【資料の種類】

① 読み物資料

文学作品，民話，寓話，児童作文，日記，詩

② 新聞記事，絵本，まんが，写真，データ，絵

☆提示の工夫例…録音，写真，切り絵，影絵，紙芝居，ペープサート，語り聞かせなど

☆視聴覚教材の活用例…ビデオ，スライド，ＯＨＰ，パソコンソフトの活用など

■3　資料選択の視点

【資料の備えるべき条件】

・ねらいを達成するのにふさわしい資料
・道徳的価値が適切にあらわれている資料
・きれいごとに終わらない資料
・人間の真実の姿が表れ，心の糧となる資料
・児童生徒の興味や発達段階に応じた資料
・多様な考えや感じ方を引き出せる資料
・中正な資料
・難解すぎず，時間内で取り扱える資料
・児童生徒が受け入れやすく，親近感をもつ資料

■4　指導過程及び学習活動の工夫

【新しい学力観に立った道徳の授業】

・児童生徒自身に道徳の時間は何をするのかを理解させる。
・授業の指導過程を柔軟にする。
・児童生徒の心を動かす授業の組み立てをする。
・よさを認め，励ます道徳の授業にする。
・事前，事後指導を考慮した授業を工夫する。

【指導過程の基本型】

・導　　入…ねらいとする価値への方向づけ
↓
・展開前段…ねらいとする価値の追求・把握
↓
・展開後段…ねらいとする価値の内面的自覚
↓
・終　　末…ねらいとする価値の整理

☆「指導過程の基本型」は，特に決った型はないが，本研究では上記の基本型を活用する。

☆授業のマンネリ化を防ぐため，基本型にとらわれない指導形態を取り入れる必要がある。例えばコールバーグの道徳教育論に基づいたモラルジレンマ資料を活用した授業，「価値の明確化」に立った授業などが考えられる。本研究でも，上記の基本型にとらわれない授業を試みていく。

【多様な学習活動】

①　役割演技

・場面状況の把握，登場人物への共感，多様な価値観を引き出す手だてとして有効である。
・種類…再現法，即興法，対話形式，構成法等

②　書く活動

・児童生徒の考えを深めたり，道徳性を高める手だてとして効果的である。また，教師は児童生徒が書いたものから個々の児童生徒を理解し，道徳性の育成に役立てることも可能である。
・種類…吹き出し，4～5行の作文，感想文等

③　話合い活動

・児童生徒が，ねらいとする価値について，資料を基に互いに自分の考えや感じ方を出し合い，話し合うことによって，より高い価値観を把握していく活動であり，道徳の時間では不可欠である。

（話し合いを深めるための配慮事項）

・発問を精選し，考える時間をあたえる。
・話し合いのルールを決めておく。
・本音が言える，温かい雰囲気に満ちた学級づくりに心掛ける。

④　聴き合い活動

・児童生徒が互いに意見を述べ合い，耳を傾けて聴き，受容し合う活動である。相手を尊重しながら，自分の価値観を明らかにしていく手だてとして有効である。

（聴き合いをするための配慮事項）

・聴き合いの手順やルールを決めておく。
・互いの意見を共感的に聴き合わせるようにする。

Ⅲ　研究の目標

豊かな心をもち，たくましく生きる子供を育てる道徳の授業の在り方を心をゆさぶる資料の選択とそれを活用した授業実践を通して探る。

Ⅳ　研究の仮説

道徳の授業において，子供たちの心をゆさぶる

資料を選択し，多様な学習活動を取り入れた指導過程の中で活用すれば，子供たちは自分の生き方や在り方を考え，豊かな心をもち，たくましく生きようとする心情や意欲，態度が育つだろう。

V 研究の概要

■1　研究の方法

(1) 実態調査（平成９年９月実施）

①　ねらい

道徳の時間について，教師と児童生徒の意識調査を行い，指導上の課題や効果的な手だてを明らかにし，豊かな心をもちたくましく生きる力をはぐくむ道徳指導の在り方を探る。

②　内容

道徳に関する意識調査（教師，児童生徒）

③　調査対象

委嘱研究員６名（小学校３名，中学校３名）の所属校の職員及び児童生徒

調査(1) 各学年代表１学級全員（計491名）

調査(2) 学級担任全員（計103名）

(2) 授業実践（平成９年10月～11月）

①　ねらい

「心をゆさぶる資料」の活用と学習展開の工夫により，道徳の授業の改善を試みる。

②　内容　＜授業実践Ⅰ＞

・役割演技や疑似体験活動などを取り入れた子供たちの心に響く，楽しい授業

仙台市立加茂小学校　第４学年

指導者　今野　克則　教諭

＜授業実践Ⅱ＞

・４コマまんがを中心資料とした授業

仙台市立南吉成小学校　第６学年

指導者　及川　　俊　教諭

＜授業実践Ⅲ＞

・基本型にのっとった語り聞かせによる授業

仙台市立東華中学校　第１学年

指導者　菱沼　雅子　教諭

＜授業実践Ⅳ＞

・聴き合い活動を通じて自他の個性を尊重し合う授業

仙台市立桜丘中学校　第３学年

指導者　本木　一昭　教諭

■2　研究の内容

(1) 実態調査

①　児童生徒対象

質問１　あなたは道徳の時間が好きですか。

グラフを見て分かるように，学年が上がるにつれて，「好き」を選択する児童生徒が減っていくことが分かる。特に，中学生ではその傾向が顕著である。

発達段階の，自分の内面を表に出さなくなる時期と一致しているが，生き方を考えさせるためには，他人とのかかわりも大いに深めさせていく必要がある。そのための時間として，道徳は重要な位置を占めているので，教師の創意工夫をこらした授業づくりが必要になってくる。

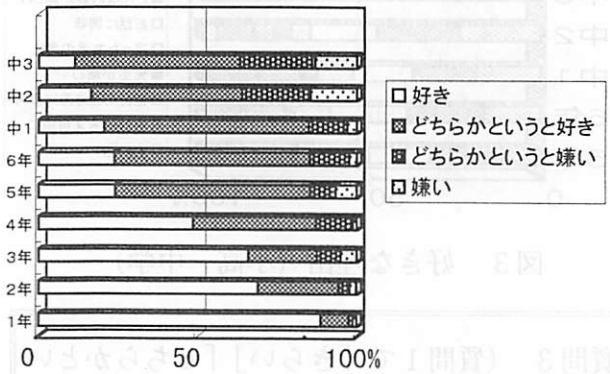


図１　道徳の時間の好き嫌い

質問２　（質問１で「好き」「どちらかというと好き」と答えた人のみ）好きな理由を選んでください。三つまで）

「好き」な理由として，全学年を通して選択されているのが，「資料のおもしろさ」である。特

に，小学校低学年では，半数以上の児童が選択している。道徳の授業にとって，資料が重要であることを示しているといえる。

また，「どんな内容をするかわからないので楽しみだから」を選択している児童生徒も多い。一時間一価値内容が指導の展開の基本であるため授業に変化をつけやすいからであろう。「成績に関係ないので，気楽であるから」は，中学生が多く選択している。消極的な選択とも思われるが，教科の授業にはない道徳の授業の特性としてその意味を考えてみたいものである。

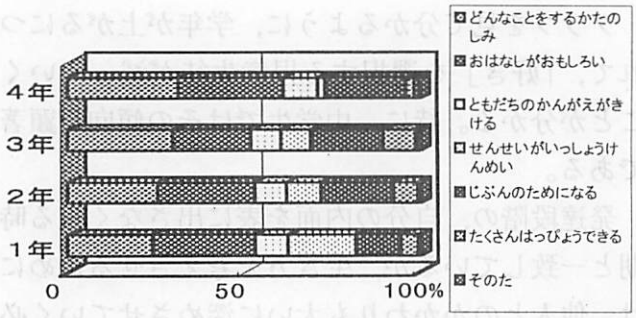


図２　好きな理由（小低・中）

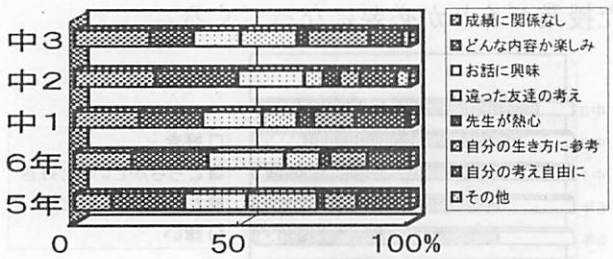


図３　好きな理由（小高・中学）

質問３　（質問１で「きらい」「どちらかといえばきらい」と答えた人のみ）きらいな理由を選んでください。（三つまで）

授業のやり方にマンネリ化を感じている児童生徒の多いことが分かる。また，中学校では，資料に魅力を感じないという項目を選択した生徒が多い。建前と本音の違いが分かってきた生徒に対して，教師が取り上げた資料が，思ったほど効果を上げていないことのあらわれと考えられる。

「好き」「きらい」どちらにもいえることは，資料と指導過程に対して，児童生徒が注目しているということである。道徳の授業を改善していく時この２点を重視することが大切であるといえよう。

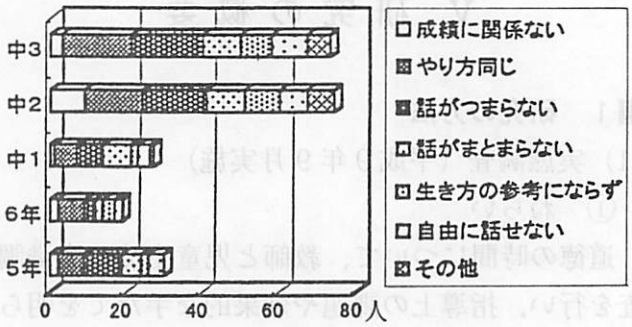


図４　嫌いな理由

質問４　あなたが道徳の時間にやりたいことはなんですか。（三つまで）

発達段階によって違いが見られる。小学校低学年では，「いろいろなお話を読みたい」と考えている。探求心の旺盛な時期の，率直な願いといえよう。

一方，小学校高学年や中学生になると「いろいろな生き方や考えを知りたい」と思っている。人生や，生きる意味を考えはじめる時期であるため，その参考となる時間として，道徳の時間をとらえているといえよう。

なお，「先生が同じ問題をどう考えているかということを知りたい」という項目も比較的多く選ばれている。教師の人間性に興味を持つということで，授業を行ううえで配慮すべき項目といえよう。

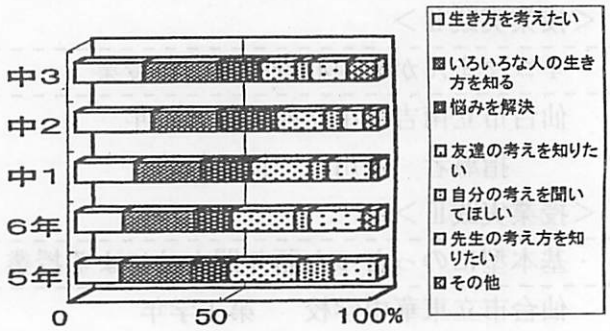


図５　道徳の時間にやりたいこと

② 学級担任対象

質問１　子どもの心をゆさぶる資料とは，どのようなものだと思いますか。(二つまで)

どの項目もまんべんなく選択されていたのは，「心をゆさぶる」ということのとらえ方が，多様であることのあらわれといえよう。

その中でも，「生活体験との関連」や「葛藤場面のある」を選択した割合が多い。このことは，資料を準備する上で参考にする必要がある。

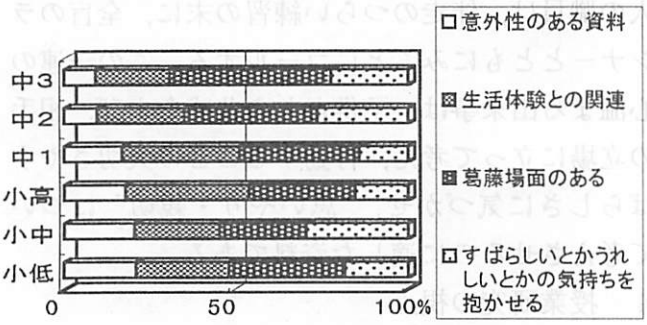


図６　心をゆさぶる資料

質問３　道徳の授業をするうえで困っていることや悩んでいることについて，あてはまるものを選んでください。(五つまで)

小中学校とも同様の傾向が見られる。最も多かったのは，「魅力的な資料が準備できない」である。副読本の採用によって，資料の数は準備できても，内容的には必ずしも満足していないことがうかがえる。次に多かったのは，「指導過程がパターン化している」ことである。授業のマンネリ化への懸念を強く意識しているといえよう。

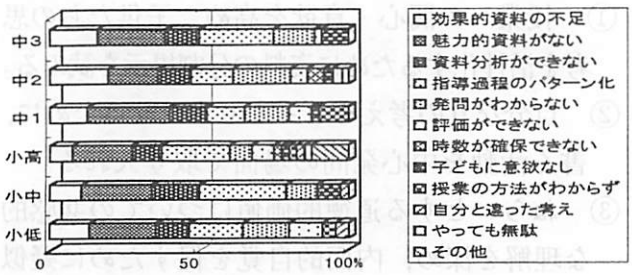


図７　困っていること

質問４　道徳の時間をよりよいものにしていくための手段として，効果がありそうだと思うものを選んでください。(三つまで)

小中学校間で差異が見られた。「各教科・特別活動との連携を積極的に図るべき」と考える教師は小学校ではかなりの数にのぼるが，中学校では極めて少ない。これは，小学校が学級担任制で，教科の指導も担任が行っているという実態からくるものであろう。中学校では組織的連携を強化する必要があると考えられる。

一方，小中学校に共通の傾向としては，「副読本以外の資料の活用」である。資料の選択に，指導者の考えを反映させることによって，授業が活性化すると考えているのではないか。また，「新しい学習形態を取り入れる」ことも効果があると考えている。このようなことからも，指導者も授業改善の必要性を認識していることがうかがえる。

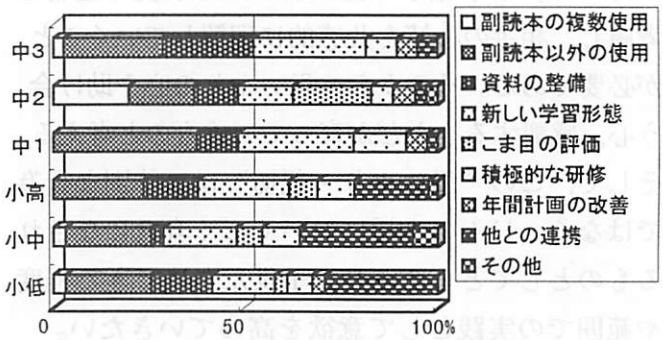


図８　授業改善の手だて

アンケート全体を通してみると，子供たちの心を引き付けるような魅力的な資料を選択し，資料のよさを十分に生かすことのできる指導過程と学習活動の工夫をしていくことが，道徳の授業の改善につながるのではないかと考えられる。そこで，心をゆさぶる資料とは何かを明らかにし，幅広い視野から選択した資料を活用した道徳の授業づくりに焦点をあて，四つの授業実践を通してその有効性を明らかにすることにした。

(2) 授業実践

授業実践Ⅰ（小学校　第４学年）

役割演技や疑似体験活動などを取り入れた子供たちの心に響く，楽しい授業

仙台市立加茂小学校

1　主題「思いやる心」２－(2) 思いやり・親切

2　主題について

(1) 価値について

第３学年及び第４学年における内容項目２－(2)は，「相手のことを思いやり，親切にする」ことをねらいとし，相手に対する思いやりや親切な心をもち，実践できる子供を育てようとするものである。子供たちがよりよく生きるためには，学校や家庭，地域社会の中で互いに助け合い，支え合う温かい人間関係を築いていくことが大切である。

この“思いやり・親切”は，他の人に接するときの基本的姿勢にかかわるものであり，だれもが大切であると考えているが，具体的な行為に表すとなるとなかなか大変なことである。

そこで，まず相手の置かれている状況や立場を考慮し，相手の心情を共感的に理解していくことが必要である。そこから，思いやりの心や助け合う心，感謝する心などが育っていくものと考える。そして，この“思いやり・親切”は，特別な行為ではなく，日々の生活においてごく身近になされるものとしてとらえさせ，子供たちにできる程度や範囲での実践として意欲を高めていきたい。

(2) 児童の実態

道徳の時間に関する事前調査によれば，「きらい」「どちらかというときらい」と答えた子供たちは，37名中８名でその主な理由として，「授業に出てくる話がつまらない」「授業のやり方がいつも同じ」ということをあげている。

また，本時の価値項目である“思いやり・親切”に関する事前調査では，ほとんどの子供が親切にされたり，親切にしたりという経験が強く印象に残っているものの，８名の子供がともに「ない」と答えている。

3　資料について

資料名　「１本の電話」「５人のランナー」

（出典：「ニューモラル №299」1995年6月・広池学園出版部）

本資料は，1992年島根県出雲市で開催された第11回くにびきマラソン大会への全盲のランナーの参加に当たって，市長や職員が奔走したという事実をもとに作成され，前述の雑誌に「支え合う社会」と題して紹介されたものである。

当初，市長は，伴走者が見つからず困り果てるが，「２kmずつ交替で伴走させてほしい」という５人の職員の思いと知恵に救われ，感謝する。５人の職員は，伴走のつらい練習の末に，全盲のランナーとともにみごとにゴールする。この一連の心温まる出来事は，子供たちの共感をよび，相手の立場に立って考え，行動することの大切さやすばらしさに気づかせ，“思いやり・親切”について考えさせるのに適した資料である。

4　授業研究の視点

(1) 心をゆさぶる資料の選択

① 人々の生活にみられる具体的事実をもとにした実話資料を提示することによって，子供たちの価値についての考えをより深め，人間理解にもつながるものと考える。

② 資料の内容をより分かりやすくするために原文を平易な文章に直したり，実際の場面や人物の写真，イラストなどを提示したりする。

《実際の伴走風景》

（出雲市教育委員会スポーツ振興課より提供）

(2) 指導過程及び学習活動の工夫

① 授業への関心・意欲を高め，子供たちの思考を活性化するために資料の分割提示を試みる。

② 自分なりの考えをしっかりもたせるために，書く活動を中心発問の場面で取り入れる。

③ ねらいとする道徳的価値についての共感的な理解を深め，内面的自覚を促すために疑似体験や役割演技の活動を取り入れる。

5　授業実践

(1) ねらい

相手のことを思いやり，親切にしようとする心情や意欲を育てる。

(2) 準備物

読み物資料 ①「1本の電話」,②「5人のランナー」, 各種拡大写真(くにびきマラソン大会,市長岩國哲人氏,伴走風景), ゴール後のイラスト,疑似体験用小道具(伴走用ロープ,アイマスク),役割演技用小道具(役割の名札,インタビューマイク),ふき出し記入プリント,補助資料「ぼくが乾かしてあげるよ」(小さな親切運動本部編『涙が出るほどいい話第二集』より),日本地図(掛図),文字カード,感想記入用紙(授業後記入)

(3) 授業の流れ（主な教師の働きかけと子供たちの反応）

「くにびきマラソン大会の写真」を提示し，島根県出雲市の位置を地図で確認させることで本時の学習への興味・関心をもたせる。【導入】

↓

資料①「1本の電話」を読み聞かせる。

↓

発問1　どうして市長さんは，困ってしまったでしょうか。

C_1 目が見えない人が参加しようとしたから。

C_2 参加してコースが分からなくなるかもしれないから。

↓

…（岩國市長の写真を提示し，）…

発問2　市長さんはどうしたらいいでしょうか

C_3 参加させた方がよい。

C_4 目の見えない人だけのマラソン大会をつくる。

C_5 手伝いをつけて参加させた方がよい。

C_6 点字コースを作ればいい。

C_7 両脇から目の見えない人を支えてあげる。

C_8 絶対できないわけではないので参加させる。

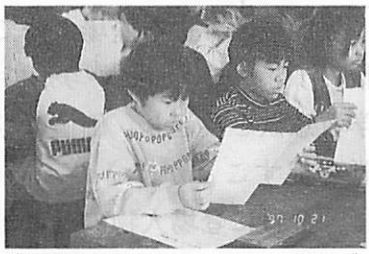
C_9 目が見えないということで参加できないというのはかわいそうだから参加させたい。

↓

資料②「5人のランナー」を読み聞かせる。

↓

伴走の写真提示



《資料の続きを真剣に読む》

↓

疑似体験活動

（2名ずつ2組実施）

↓

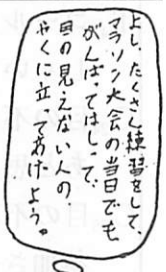
発問3　実際にやってみてどうでしたか。

C_{10} 走者役：とてもこわかった。《疑似体験活動》

C_{11} 伴走役：転ばさないように気をつけた。思ったより難しかった。

↓

発問4　このように寒い冬の夜，毎晩，仕事を終えた疲れた体で（文字カードを示しながら），5人の職員は練習を続けました。その時どんなことを考えながら練習を続けたのでしょうか。　【書く活動】



C_{12} 参加する人もがんばるのだからこっちもがんばろう。

C_{13} 大変かもしれないが，参加させられるようにがんばろう。

C_{14} もっともっと練習しよう。

C_{15} 事故にあわせないように慎重に走らなくちゃ。

C_{16} 転ばさないようにがんばって走ろう。

C_{17} 心に残るマラソンにしてあげよう。

C_{18} 苦労してもいいから思う存分走らせたい。

《ふき出しプリント》

C_{19} 困っている人に力をかしてあげよう。

C_{20} 10kmを走り終えて，無事ゴールインできたらいいな。

…（ゴール後のイラストを提示し，）…

発問5　ゴールの瞬間，目の不自由なランナーや一緒に走った5人の職員，そして出場を許可した市長さんは，それぞれどんなことを考えていたのでしょうか。【役割演技】

【目の不自由なランナー】

T_1 今のお気持ちをお聞かせください。

C_{21} うれしいです。一緒に走ってくれた伴走者のおかげです。ありがとう。

【伴走者】

T_2 どんなことに気を付けて走りましたか。

C_{22}道路の小石に気を付けて走りました。走り終えてうれしいです。

T_3どんなことを考えながら一緒に走りましたか。《役割演技》

C_{23}目の見えない人にもくにびきマラソンに参加してほしいと思って，…

【市長】

T_4ゴールの瞬間，どんなことを考えていらっしゃいましたか。

C_{24}目の不自由な人もがんばればできるんだなあと思いました。伴走者もよくがんばった

C_{25}目の不自由な人も参加させて本当によかったです。

補助資料「ぼくが乾かしてあげるよ」を読み聞かせる。　【終末】

《補助資料の読み聞かせを聞く》

6　実践を振り返って

(1) 資料について

①　子供たちの心に強く残り，価値の共感的理解が得られた。また，心温まる内容により子供たちに明るい気持ちや希望をもたせ，実践意欲をはぐくむことができた。

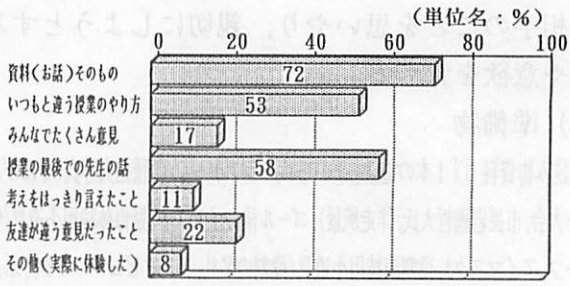
②　市長が悩む場面とその後とに資料を分割して提示したり，写真やイラストなどを活用したりしたことによって子供たちの興味・関心が高まり，思考が活性化し，意欲的な学習となった。

③　一つの立場からだけでなく，他の異なる立場からも価値について考えさせることができた。

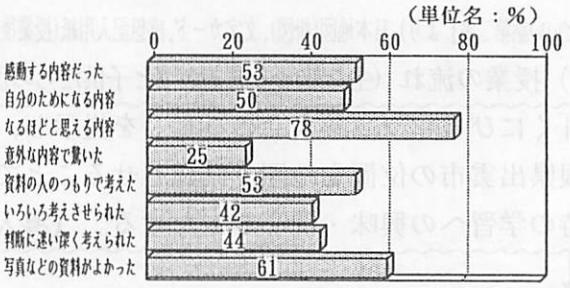
④　５．６年生でも本資料で授業した結果，４年生以上の学年で活用できる資料であることが分かった。なお，本資料における発問を工夫していけば子供たちの考えをさらに深めていけるだろうと思われた。

【授業後の子供たちの感想　Ⅰ】4年3組：36名／1997.10.21

①　授業で心に残ったこと［３つまで選択］



②　資料について［自由選択］



(2) 指導過程及び学習活動の工夫について

書く活動

自分なりに考えながら書くことによって，自分の考えをはっきりともつことができ，発表や意見交換のための準備にもなった。授業のどの場面でどんなことを書かせるのかを吟味し，有効に活用したいものである。

疑似体験活動

本時では，資料の内容とかかわって目隠しをして歩く，その人を誘導するという疑似体験活動を取り入れた。そのことによって少しだけであるがその大変さを体得させることができた。

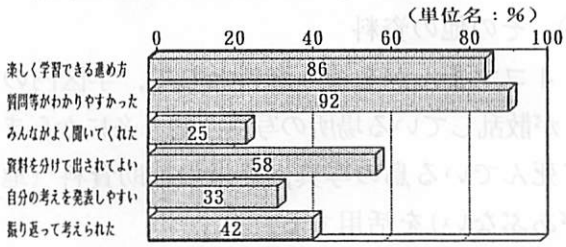
体験した子供たちの話から全体に広げたが，やはり全員に体験させたい活動である。学級活動等との関連を図りながら，総合的に進めることも考えられる。

役割演技

展開後段で主な登場人物である三者にゴール後のインタビューという形で役割演技を行った。学習意欲を喚起し，価値についての内面的な自覚を促すことができた。その後，他の学級では，全員に登場人物の三者から一者を選択させて行ったところ，さらに充実したものとなった。

【授業後の子供たちの感想Ⅱ】

① 授業の進め方について［自由選択］



② 今日の授業で考えたこと［自由記述］【抜粋】

・今日の道徳の授業では，自分が目の不自由な人や伴走者になったみたいだった。
・こんな話があったなんて，少し感動しました。いろいろ考えさせられた話でした。
・伴走者の優しさや目の不自由な人の勇気が感じられるいい話だった。
・はじめはいやだと思っても人のことを考えていろいろやってあげると，後でやってよかったと思えることがあると分かった。伴走者はいろいろ苦労して走ったと思う。

(3) 子供たちの変容（授業中の様子から）

興味・関心をもって意欲的に考えたり，活動したりして楽しく学習していた。それは，基本型にこだわらない弾力的な指導過程や体験的な活動を取り入れたためと思われる。また，本時は，書く活動や下記のポイントを押さえた役割演技を取り入れたが，その結果，子供たちは資料の人物に共感しながら価値について深く考えることができた。

『役割演技』効果的活用のための５つのポイント

① 演技の仕方や内容，場の設定などを工夫し全員に演技させるようにする。
② 小道具などを有効に活用し，場の雰囲気づくりに努める。
③ 設定する場面や内容を吟味して提示する。
④ 演技ための指示や説明を明確にする。
⑤ 演技に対する共感や励ましを忘れない。

授業実践Ⅱ（小学校　第６学年）
４コマまんがを中心資料とした授業
仙台市立南吉成小学校

1　主題　「進んで環境を守ろう」
　　３－(1)動植物・自然愛護，環境保全

2　主題について

(1) 価値について

３－(1)は「自然の偉大さを知り，自然環境を大切にする」ことをねらいとした内容項目である。

高学年では，自然の偉大さを理解し，自然に学ぶ態度を身に付ける必要がある。そして，自然や動植物を愛護する心を育て，自分のできる範囲で自然環境を守ることができるようにしていくことが大切である。

環境問題は，一人一人が身近なところから環境を大切にしていく実践を通して，主体的に環境を守ろうとする態度を育てることが重要である。また，動植物を愛護し，生命に対する畏敬の念を高めるとともに，物を大切にし，約束を守るなど環境の保全や環境問題の解決に対して責任を自覚し，主体的にかかわることのできる心情と実践的な行動力を養うことが必要である。

自然や動植物を愛護し，自然環境を大切にしようとする態度は，地球全体の環境悪化が懸念される現在，是非身に付けなければならない道徳的価値である。

(2) 児童の実態について

環境問題については，ゴミの増加，地球温暖化，海洋汚染，酸性雨，砂漠化など，ある程度の知識は有しているものの，身近な環境問題としてはなかなかとらえられていない。

そこで，環境問題をより身近な問題としてとらえさせるため，道徳の時間を核とした総合単元的な取り組みを考えた。これまで朝や帰りの会，学級活動の時間等を使って環境問題について触れ，興味関心を高めてきている。

3　資料について

資料名「ペエスケ」（日本標準6年）

本資料は，次のような内容と構成になっている。

・釣り糸がひっかかってしまった釣り人に，ペエスケが後始末をするようにお願いする。

・ペエスケは鳥が釣り糸を飲み込んだり，鳥にからまったりすることを釣り人に一生懸命説明する。しかし，釣り人はそのことをなかなか信じない。

・実際に目の前で釣り糸にからまっている犬を見て，自然や動植物を大切にするということを納得する内容である。

4　授業研究の視点

(1) 心をゆさぶる資料の選択

① 中心資料（ペエスケ）

・4コマまんがなので，子供たちが親しみやすく，興味関心を持って取り組むことができる。

・身近な環境問題を深く考え，より高い価値観に気付かせるのに適した資料である。

② その他の資料

・4コマまんがを補う資料として，学区内のゴミが散乱している場所の写真，釣り糸にからまって死んでいる鳥の写真，終末の補助資料（地球があぶない）を活用する。

(2) 指導過程及び学習活動の工夫について

① 資料を1コマずつ提示することで，一つ一つの場面をじっくりと，深く考えさせることができる。

② 場面の状況や登場人物の心情をとらえやすくするため，補助発問の工夫をする。

③ 場面の状況をより的確に捉えさせるため，教師の実演や釣り竿，釣り糸などの具体物の提示をする。

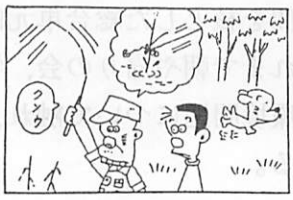
④ 3コマ目を伏せて，吹き出しに書かせる。そうすることで，子供たちにより深く考えさせ，高い価値観に気付かせることができる。

5　授業実践

(1) ねらい

自然や動植物を愛護し，進んで環境を守ろうとする心情を養う。

(2) 授業の流れ

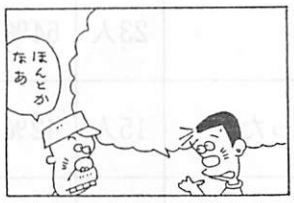
資　料	主な発問（補助発問や教師の実演）	児童の反応
 学区内でゴミが散乱している場所	・学区内の写真だけど，どこの写真か分かるかな。	・どこの写真だろう。 ・ずいぶんと汚いなあ。 ・結構ゴミが落ちてるなあ。 （どこの場所か真剣に考えながらじっと見ている。）
 （1コマ目）	・釣り糸がひっかかっている場面を教師が実演する。 発問1 釣り糸がひっかかった釣り人はなぜ「クソッ。」と言っているのでしょうか。	 （子供たちが教師の実演を熱心に見つめている。） ・とてもいらいらしている。 ・釣り糸が絡んでとれなくていら立っている。

（２コマ目）

・２コマ目を提示し，場面を説明する。
・引っかかった釣り糸を教師が実際に切ってみせる。

・あっあ，あー。
（教師が釣り糸を切ったので子供たちは驚きの声をあげている。）
・みんなゴミを捨てているのになぜ自分だけが後始末をしなければいけないのか。
・切って解決しようとしているのに，どうしていけないの。

発問２
「釣り糸のあとしまつお願いしますよ。」と言われた釣り人はどんな気持ちから「どうして。」と答えたのでしょうか。



（３コマ目の吹き出し）

発問３
ペエスケが「釣り糸のあとしまつお願いしますよ。」と言ったのは，どんな気持ちからでしょうか。吹き出しに書いてみてください。

・魚が釣り糸にからまってしまう。
・鳥や魚が餌などと勘違いして飲み込んでしまうから。
・人間も引っかかって危険だから困る。
（熱心に吹き出しに書いている。）

・実際に釣り糸を見せる。
・鳥が飲み込んだり，鳥にからまったりすることを説明しながら，吹き出しに３コマ目の絵を貼ってみせる。

（３コマ目）

発問４
釣り人はペエスケの説明を聞いて「ほんとかなあ。」と言ったのは，どんな気持ちからでしょう。

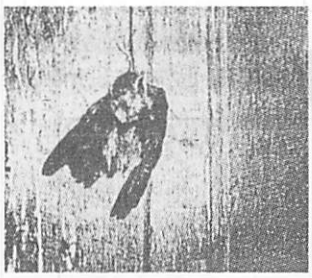
・実際に見たことがないので分からない。
・みんなもしているから関係ないと思っている。
・自分の切った釣り糸がどんな結果になるのか分からない。どうせ一羽や二羽の鳥くらい…いいじゃないか。
・最初の犬だ。

（４コマ目）

・４コマ目を提示する。

発問５
このことはまんがの世界の話ではなく，新聞にも載った実際にあった本当のことです。この写真を見てどう思いますか。

・僕たちも気をつけなければいけない。
・落ちている釣り糸を見たら拾って引っかからないようにする。
・そのままにしている人を見たら注意すべき。


釣り糸に絡まった鳥

アンケート用紙

発問６
自分の身の回りで環境に関してどんな問題があるでしょうか。

・水の，無駄遣い。
・ゴミの問題。
・生活排水による川や海の汚れ。

補助資料
「地球があぶない」

・環境保全を願い，心を込めて範読する。

・静かに聞き入っている。

6　実践を振り返って

(1) 資料について

① 4コマまんがは子供たちが親しみやすく興味関心を持てる資料であり，ねらいとする価値について深く考えさせるのに適していた。

② 4コマまんが以外の資料として，導入でのゴミの写真，つり糸にからまって死んでいる鳥の写真，終末の補助資料（地球があぶない）を取り入れた。その結果，子供たちはまんがの世界の話だけではなく，より身近なこととして環境問題を捉えることができたようであった。

【授業後のアンケート調査から(36人実施)】

① 授業で心に残ったこと（3つまで選択）

授業に出てきた資料そのもの	18人	50%
いつもと違う授業のやり方	29人	81%

② 資料について（自由選択）

なるほどと思える内容だった	14人	39%
資料の人になって考えられた	11人	31%
考えさせられる内容だった	11人	31%
まんがなどの資料がよかった	22人	61%

(2) 指導過程及び学習活動について

① 4コマまんがを1コマずつ分割提示することにより，価値について子供たちにじっくり考えさせることができた。また，3コマ目を空欄にして吹き出しを考えさせることにより，釣り糸が環境に与える問題を十分理解させることができた。

② 場面の状況や登場人物の心情を把握させるために，補助発問，具体物の提示，教師の実演等を工夫すると効果的であることが分かった。

③ 指導過程の基本型に即した授業を展開することで，子供たちが身近な環境問題を理解し，価値の内面的自覚を図ることができた。

【授業後のアンケート調査から(36人実施)】

○ 授業の進め方について

楽しく学習できた	23人	64%
質問等が分かりやすかった	15人	42%
生活上の問題を考えられた	13人	36%

上記のアンケート調査結果から，4コマまんがは，子供たちにとっては親しみやすく，分かりやすい資料であることがうかがえる。しかし活用にあたっては，下記の点に留意しなければ4コマまんがのもつ資料として特徴が十分に発揮されないことも授業実践から分かった。

4コマまんが活用のポイント

選択の条件

・児童の実態に即し，興味関心を示すもの
・今日的課題を含んでいるもの
・ねらいに即したもの

↓

言葉の少ない4コマまんがなので，場面の状況や登場人物の心情を把握しにくい。そこで次のような工夫が必要になってくる。

↓

補助発問
具体物の提示
教師の実演など

授業実践Ⅲ（中学校　第１学年）
基本型にのっとった
語り聞かせによる授業
仙台市立東華中学校

1　主題　「本当のやさしさ」
2－(2) 人間愛・感謝と思いやり

2　主題について

(1) 価値について

発達段階からみると中学生の時期は自立に向かい，より思慮深く考え発言したり行動したりできるようになる。その反面，利己的，自己中心的になりやすく，周囲を省りみない言動がみられる。そのため，周囲の人間とのかかわり方は自分の気分や利益によって左右されてはならないし，自分を支えてくれている人々の愛情があって成立していることに気付かせることが大切である。そしてそのことに感謝すると同時にやさしさを相手に求めるばかりではなく，自ら実践していこうとする態度を育てることが必要である。

(2) 生徒の実態

道徳の時間の事前調査によれば，自分をやさしい人間だと感じている生徒は半数おり，やさしくないと感じている生徒もちょうど半数いる。

「やさしさ」を自分の欲求を満たしてくれるような表面的に心地よい行動ととらえている。人の嫌がることをしないことが「やさしさ」であるとしている生徒は33%である。

級友はやさしいと感じている生徒が多い。しかし一方で仲の良い友達にはやさしいが，嫌いな人やよく知らない相手にはわざと嫌な言葉や態度で応じたりする場面も見られる。このことが学級内での人間関係が固定化する一因とも考えられる。

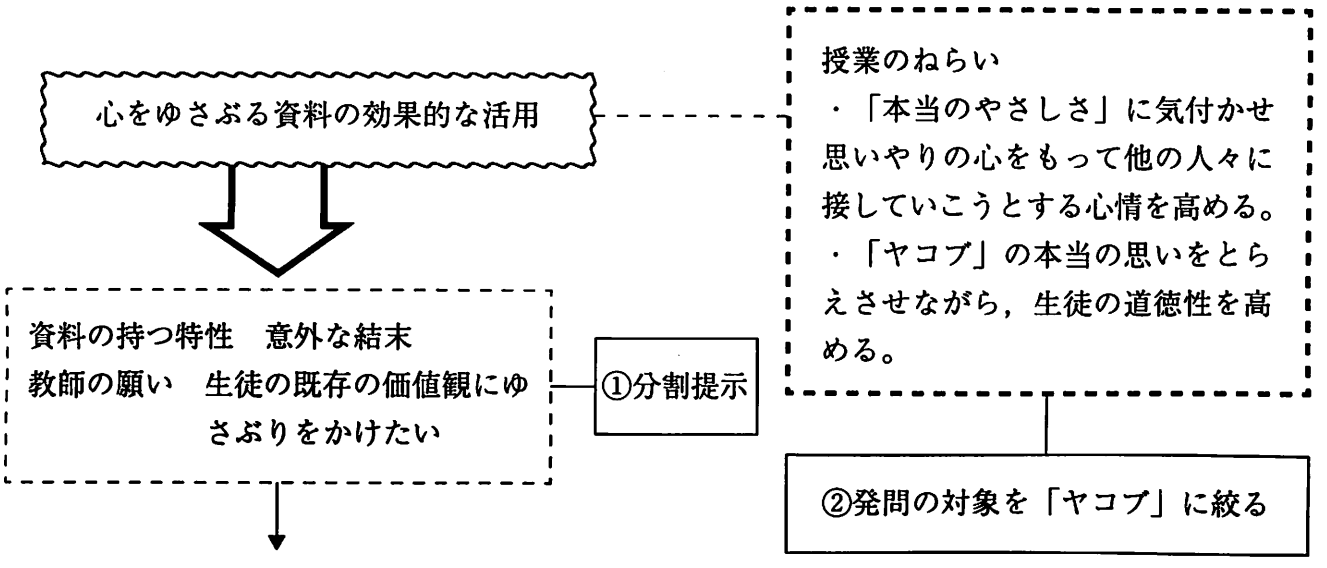
これらのことから，他人を思いやる心を育てていくことが学級の成長のための課題だと考える。

3　資料について

資料名「カーテンの向こう」
（出典：「私たちの道２」教育出版）

本資料は，治る見込みのない重症患者だけが入っている病院の一室で起こった人間模様を描いたものである。自分の利益を最優先させる主人公の目を通して，人間の弱さや醜さがよく描かれている。それと同時に主人公が憎む相手の老人が，実は深い思いやりの心をもって同室の入院患者に接していたことが，老人の死によって初めて主人公に知らされるという内容である。そのことを知ったときの驚きは主人公はもとより，生徒の共感を呼び，より深い人間愛の精神に向かって自分を高ていくのに適切な資料であると考える。

4　授業研究の視点



資料の活用にあたっての課題
長い文章の読み物資料である
登場人物がおかれている背景等の理解

④地図
イスラエルの位置が分かるもの

③語り聞かせ

・病院の絵
閉ざされた状況および「ヤコブ」と窓，「わたし」の位置関係が分かるもの
・壁の絵
物語のクライマックスシーンであるので生徒が「わたし」の驚きを視覚的にも疑似体験できるもの

語り聞かせをより効果的に → ⑤場面絵

語り聞かせ活用のためのポイント
①物語の背景・筋は完全に頭に入れる（数回のリハーサルは必要）
②物語にふさわしい声で語る
トーン・強弱に気を付ける
③声や間の取り方で臨場感を出す
④せりふの部分は演ずるように語る
⑤視線や表情に留意する
⑥照れたり，恥ずかしがったりしない
教師は役者になりきろう

⑥ＢＧＭ

臨場感をかもし出す音響効果の期待できるもの　「アランフェスⅡ」

生徒　教師の人間性に興味をもっている
教師　価値を内面的に自覚させたい

指導過程および学習活動の工夫 → 教師の説話で締めくくる

5　授業実践

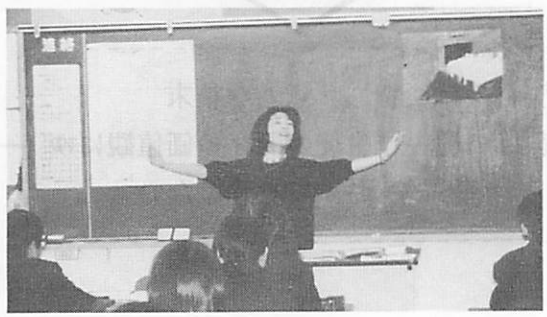
(1) ねらい

ヤコブの行動を通して，本当のやさしさに気づき，思いやりの心をもって他の人々に接していこうとする心情を深める。

(2) 授業の流れ

導入
「病院の絵」を見せ生徒の興味をひきつける

物語の前半を語り聞かせる。



発問1
ヤコブはどんな人だと思うか。

・軽く扱う。
物語の後半を朗読する。最後のクライマックスシーンでは「壁の絵」を見せる。

発問2
冷たい壁という事実を知った私はどんなことを思い，何を考えただろうか。

S_1　ヤコブは本当はいい人だったんだ。
S_2　自分が恥ずかしくなった。

発問3
ヤコブはどのような思いから嘘をつき通してまでこの行為を続けたのだろうか。

S_3　こころの痛みを取り除いてやるため。
S_4　他の病人たちの希望の火を消さないために。絶望させてはいけないから。
S_5　ヤコブの前にもヤコブがいて，やさしさのリレーがあるのだろう。

発問4
自分が「私」の立場だったら，仲間の病人にどう話すだろうか。

ワークシートに記入させる。

生徒の考えから

・本当のことを言ってしまったら，同室の人達の希望もなくなって温かさのないボーッとする毎日になってしまうので，ヤコブのように嘘を言ってでも外の景色を伝えて，皆に希望をもってもらい，そのことで自分もがんばると思う。（M子）
・たぶんヤコブも前に「私」とおなじ考えを持って，前にカーテンのところにいた人を憎んでいたのではないかと思った。ヤコブもカーテンの向こうがレンガの壁だったことはショックだったと思う。だけどみんなに話をして希望を与え続けた。だから代わりに今度は自分が仲間に希望を与える番だから。（J男）
・ヤコブと同じように嘘をついて，ありもしない外の様子を話す。自分が窓際になりたいからって，ヤコブが早く死ねばいいと思っていた自分がゆるせないから，せめて，ヤコブのしていたことは自分もまねしたい。（A男）

終末
教師の説話を聞く。

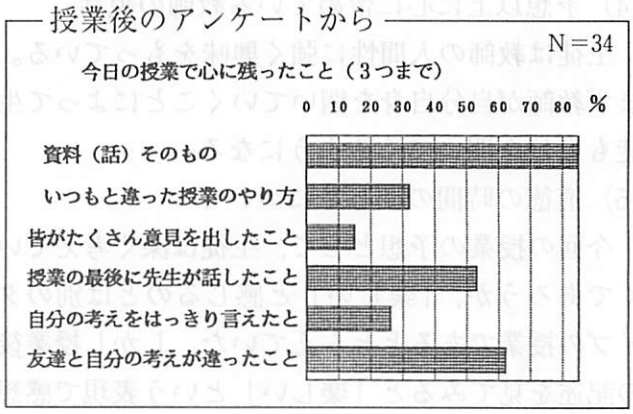
・教師の中学校時代の体験談を語って聞かせる。

今日の授業で最も心に残ったこと

・やっぱり言いたくても言ってはいけないことがたくさんあるんだなと実感しました。憎んでいた人の気持ちがやっと分かった時は，きっとその人を憎んでいた以上に自分を責めることになるんじゃないかなと思いました。もっと，相手の気持ちを分かろうとする努力をしなくてはいけないと思いました。（S子）
・自分がどんなにつらくても，人を幸せにしたいと思えるような人はとても素晴らしいと思う。自分の事より，人の事を考えるということはとても大変なことだと思う。だけどそれは，「人のことを大切にすることで，自分自身が幸せになれる」ということだと思う。そういう人になりたいと思った。（N子）
・私は，自分だけで生きているのではなくて，親や兄弟，友達など色々な人がいる場所で生きているのだから，自分勝手な行動をとるという事はおかしいのではないかなと今日の授業で強く感じた。私も自分だけがよければいいと思ったりする時もあるが，これからはもっと大人になって，みんなの事もいっぱい考えていきたい。（K子）
・うらみをかってでも，他の病人に嘘をつきとおすヤコブの人一倍のやさしさがとても分かった。（Y男）

6　実践を振り返って

授業後のアンケートから



(1) 魅力のある資料

資料の前半で「当たり前」としてとらえていた事柄（この場合はヤコブの人間性に対する否定的な見方）が，考えてもみなかった事実（実はカーテンの向こうは冷たい壁だった）によって驚きとともにそれの見直し，とらえ直しを迫られる。

資料を分割提示したことによって，「そうだっ

たのか…」という心の動きをはっきりと意識させ，自らの価値観を見つめ直すきっかけを与えた。

自分の生き方の参考になったと答えた生徒もいた。よりよい生き方を求めているこの時期の生徒にとって，この資料は心をゆさぶるものである。

(2) 効果的である語り聞かせと場面絵・ＢＧＭ

教師の語り聞かせは驚く程生徒を引き付けた。文字を与えないことに対する不安が教師側にあったが，実際は生徒がより集中して話を聴いた。場面絵は話を理解するうえでの助けになったと74％の生徒が評価した。ＢＧＭについても情感を漂わせ，悲哀を帯びた人間の心模様をかもし出し，生徒がすっと物語に入っていくことができた。これらの相乗効果によって，物語の状況や内容が分かり易かったため話の内容そのものがより生徒の心に染みていった。

(3) 発問の対象をヤコブに絞った効果

「わたし」に目を向けさせれば，人間の弱さや醜さが浮き彫りにされる。「ヤコブ」に焦点を絞って考えさせることによって，「本当のやさしさ」について深く考え，より高い価値観を目指そうとする心情を高めることができた。

(4) 予想以上に心に留めている教師の説話

生徒は教師の人間性に強く興味をもっている。まず教師が自分自身を開いていくことによって生徒も自分を開いてくるようになる。

(5) 道徳の時間の楽しさについて

今回の授業の予想として，生徒は深く考えていくであろうが，「楽しい」と感じるのとは別のタイプの授業であるととらえていた。しかし授業後の記述を見てみると「楽しい」という表現で感想をまとめたものが多く意外であった。自分とは違う見方をする友達の考え方にふれた時，生徒は道徳の時間の楽しさを感じる。一見，活発な意見交換がなされているようには見えなくても，ワークシートに記入した時点で，意見を発表したのと同じ効果を生む。自分自身の中で価値が深まったと感じることが「楽しさ」につながるのである。

授業実践Ⅳ（中学校　第３学年）

聴き合い活動を通じて
自他の個性を尊重し合う授業

仙台市立桜丘中学校

1　主題　「しあわせってなに？」
　　２－⑤個性の尊重

2　主題について

(1) 価値について

中学３年のこの時期は，自我が次第に確立していく中で，それぞれが互いに他の人とは違う自分らしさを身に付けていく。また，進路選択についての意識が高まり，自分なりの生き方についても深く考えるようになる。人間としてよりよく生きたいという願いをもっているが，自分自身の至らなさに悩むこともある。

しかし，自己の欠点や短所を認識することだけでは，よりよく生きることにはならない。人それぞれが持つよさや個性を自覚し，自分とは違う個性の持ち主との出会いを通してそれをさらに伸ばしていくようにすることが大切である。そのために，自己受容・自己理解を深める機会を設定するとともに，いろいろなものの見方や考え方があることに気付き，他者を理解し受容する信頼関係を基盤として，互いに高め合う人間関係を作っていくことが重要になってくる。

(2) 生徒の実態

「道徳の時間に関するアンケート」の結果をみると，本学級の生徒は道徳の時間において，友達がどんな考えを持っているのか，自分の考えとはどう違うのかを知りたいという思いが強いことが分かる。そして，そのことを通して自分の生き方の参考になることを考えたいと思っている。したがって，指導に当たっては生徒の多様な価値観を引き出す工夫をしたい。

3　資料について

資料名　「しあわせ」
レイフ・クリスチャンソン
にもんじ　まさあき　訳　（岩崎書店）

しあわせってなに
夏の太陽
それとも　ふりつづいた
雨のあとの太陽だろうか

しあわせってなに
勝つこと
それとも
ベストをつくすことだろうか

しあわせってなに
つぎつぎと成功をおさめること
それとも
できないと　あきらめていたことを
やりとげることだろうか

しあわせってなに
ほしいものを　すべて手にいれること
それとも
ほしいものをさがし求めることだろうか

しあわせってなに
思いのままにできることだろうか

それとも
たいせつだと思ったら
勇気をだして
やってみることだろうか

しあわせってなに
人気者になること
それとも
ひとりぼっちで寂しいときに
だれかが気づいて
心配してくれることだろうか

しあわせってなに
なにかを　やりとげること
それとも
なにかに取り組みはじめることだろうか

しあわせってなに
自信をもつこと
自分をたいせつにすること
そして
自分とおなじくらい
ほかの人も　たいせつにすること
※

本資料は23ページから成る絵本である。本資料が問いかけているのは，我々は一体どのような生き方をしたときに「しあわせ」を感じるのだろうか，ということであり，その内容は一般的な読み物資料に勝るとも劣らない深まりを持っている。また本資料は抽象的な表現を多く持っているが，そのことがかえって生徒の多様な考えを引き出すのに役立つものと考える。中学３年生として，間もなく訪れる進路選択のことも念頭において「しあわせ」とはなにかについて深く考えるのに適した資料である。

4　授業研究の視点

(1) 資料の提示とオープンエンド

資料の提示に当たっては初めから全文を提示せず，最後の部分（上記資料の※部分）は終末の段階で読み聞かせることによって，余韻を残して授業を終えたいと考える。

(2) 書く活動

授業ではまず自分の考える「しあわせ」と最も合うものと最も離れているものを，資料中の14の「しあわせ」の中から選び，その理由を道徳ノートに書かせる。自分の考える「しあわせ」が14の事柄の中にないときは自分なりに「しあわせ」と思うことを書かせる。書くことによって生徒自身の考えを明確にするとともに，次の聴き合い活動をスムーズに行うための準備とする。

(3) 聴き合い活動（小グループ→全体）

小グループ（4~5人）で行う 聴き合い活動のポイント
①「カウンセリング・マインド」を意識しお互いの意見を受容的に聴き合う姿勢を大切にする。
②グループの中で一つの結論を出すための話合いではないことを明らかにしておく。
③聴き合いの初めにお互いに握手を交わすなどして，和やかな雰囲気を作る。
④一人の意見発表が終わったらグループ内で小さな拍手をして認め合う雰囲気を作る。
⑤言いっぱなし，聴きっぱなしにせず，必ず友達の意見に対する感想や質問を出し合いながら聴き合いを進めるようにする。

この後の，全体の場での振り返りでは少数意見を中心に取り上げ，話合いの幅を広げる。

(4) 他の教育活動との関連

本授業は１時間１主題の道徳の授業としてではなく，学級活動（進路指導）との関連を図りながら総合的な学習の一環として行う。

総合主題	互いに認め合い高め合いながら，自分自身の進路について考える	
第　1　時	私のしたい10のこと	学活
第　2　時	しあわせってなに？<本時>	道徳
第　3　時	進路を考える ~私が高校に行く理由~	学活

※学活は構成的グループエンカウンターの手法を用いて行う。

5　授業実践

(1) ねらい

「しあわせ」とは何かについて自分の考えを話したり，他の人の考えを聴いたりすることを通して，自分の持っている価値観の特徴に気づくとともに，自他の個性を尊重しながら充実した生き方を求めようとする意欲と態度を育てる。

(2) 授業の流れ

みんなはどんな時に「しあわせだな」と感じますか。【導入】

S_1　寝てるとき。
S_2　楽しいとき。
S_3　行事などで成功したとき。

今日はみんなの生き方に関係するような形で「しあわせ」について考えてみたいと思います。実は，今日使う資料は絵本です。（絵本を提示し，めくりながら）【資料範読】

絵本に書かれている14の事柄の中から自分の考える「しあわせ」と最も合うものと，最も離れているものを選んでその理由も書こう。【書く活動】

※生徒の思考を支援するために14の事柄を黒板に張り出した。

1　あなたの考える「しあわせ」と最も合う「しあわせ」はどんなことですか。（詩の中から選んでみよう）

しあわせってなに？	その理由
ひとりぼっちで悲しいときにだれかが気づいて心配してくれることだろうか。	詩からも人気のある人になることも簡単なことではないけれど，自分が1人の時にパッと心配してくれる思いやりのある友達をつくることはそう簡単にはできないことだしそんな友達がいたら幸せだと思うから。

※自分の考える「しあわせ」が詩の中にないときは，自由に書いてかまいません。

2　あなたの考える「しあわせ」と最も離れている「しあわせ」はどんなことですか。（詩の中から選んでみよう）

最も離れているしあわせ	その理由
王様のように思いのままにできることだろうか。	自分のやりたいことが何でもできると，とても気持ちがいいと思うのでも，私は，それは自分中心になりがちだと思う。自分がやりたいことをすべてやってうれしくても，それが原因で他人が傷ついたらとても喜んではいられなくなると思うから。

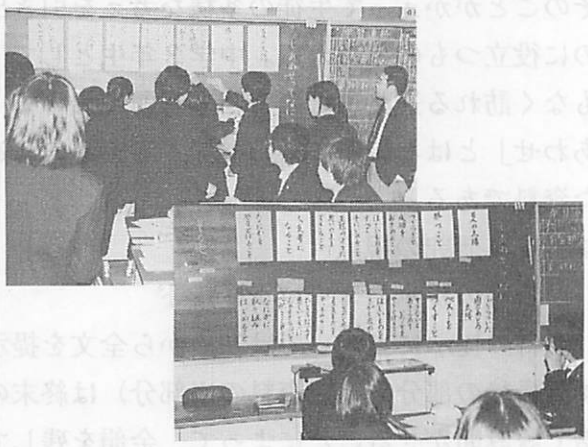
※14の事柄以外の「しあわせ」

しあわせってなに？	その理由
友達や家族といっしょにわらったり，泣いたり，考えていることを話し合ったりするとき。	人間は決して一人では生きてはいけない。自分がいて，ほかの人がいるからこそ人生楽しくなるのではないだろうか。

他の人はどんなことを「しあわせ」と考えているのか，グループをつくって意見を聴き合ってみよう。【聴き合い活動】

※聴き合いに当たっての支援・助言
◇「聴き合いの手引き」の活用　◇班としての結論を出さない
◇司会役を決める　◇声が大きくなりすぎないように

グループでの聴き合いが終わったようなのでクラスのみんながどのように考えたか確認してみたいと思います。「自分で選んだ項目の所にネームプレートを貼ってください。」【全体での振り返り】



多いのは「独りぼっちで悲しいときに／だれかが気づいて／心配してくれること」ですね。一人だけしか選んでいないところの理由を聞いてみましょう。【全体での振り返り】

S_4　勝つこと…中総体で負けたとき悔しかった。大きな大会で勝つことは幸福だ。
S_5　ほしいものをすべて手に入れること…欲

しいものすべてを手に入れることは難しいから，あこがれる。

S_6 人気者になること…毎日みんなに好かれて楽しく過ごすのはしあわせだ。

S_7 その他…友達や家族と笑ったり泣いたり話し合ったりするとき。人間は一人では生きていけない。自分がいて他の人がいてこそ，人生は楽しくなる。

S_8 寝ているとき…自分だけの世界に入り込めるし，満足感を味わえる。

他の人の意見を聞いて，自分の考えが変わってきたという人はいませんか。

S_9 人気者になるということよりも，ベストをつくしたり何かに取り組み始めることは，自分の意志でやることだからより重要かなと思う。

「しあわせ」について自分自身で考えたり，他の人の意見を聴いたりして考えたこと，感じたこと，などをまとめてみましょう。

【本時の学習の振り返り】

私にとっての「しあわせ」なことは，他の人の意見を聞いたりしても結局変わることはなかったけど，他の人の言っている「しあわせ」に対して納得することもあり，……（中略）……今「しあわせ」と思っていないものも，いつか自分にとっての「しあわせ」になるかもしれない。そのことを考えてこれから過ごしたいと思います。

自分が幸せだと思うことは苦労しないとかなえられないものだったんだと気づいた。人の意見を聞いてみて，人それぞれ幸せだと思うことは違っていて，自分には考えつかないような意見もあって，考えさせられるものがあった。

実はこの絵本には最後にもう1ページあります。そこを読んで今日の授業を終わりにしたいと思います。【オープンエンドの終末】

6　実践を振り返って

(1) 資料について

生徒は自分自身の生活体験に基づきながら「しあわせ」観について深く考えることができた。本資料の場合登場人物がいないので，生徒は自分の考えを登場人物に投影することなくストレートに表現しなくてはならない難しさがある。しかし，資料が饒舌すぎないことによって生徒は十分に本音を出し合い語り合うことができた。

資料の最後の部分は，自分の考え方・生き方に自信をもつとともに，他の価値観も大切にして欲しいという教師の願いを託すことのできる内容で，教師の押しつけになることなく本時のねらいを押さえることができた。

あの「しあわせ」という本の最後の言葉を授業の終わりに先生が読んだところがよかったと思った。

あの文章もすごく私の中に残っていて，あのコピーを大事にしようと思った。中の文にたくさん大事だと思うことがあった。楽しかった。

(2) 聴き合い活動について

「聴き合いの手引き」を示すことによって，友達の意見を共感的に聴き合うということに主眼をおき，質問や感想は述べ合っても反論はしないということをあらかじめ確認した。だが，相手を受容するという意識が十分に高まっていれば，反論しながらもお互いの考えを深めていくことが可能になってくるということが分かった。実際に聴き合い活動の中で自然にそのような展開になっていたグループもあった。

自分の意見を発表するときはたった4人しかいないのに何て思われるか不安で恥ずかしかったけど，みんないろいろと感想や質問を言ってくれたのでよかった。しあわせについて今まで考えもしなかったことに気づいたし，これからの自分はどうあるべきか，どうしたらいいのかがだんだん見えてきたような気がする。

内容も話し合いの仕方も楽しかった。うちの班は自分たちの意見をたくさん出し合ったし，とても楽しかった。しあわせについてなんていつも考えないことについて考えたので自分の考えを出すのも大変だった。けど，考え出せないってことは今がしあわせなんだと思う。

(3) 生徒の変容について

「しあわせ」について自分と違った考えや思っていることがいろいろわかって良かったと思う。グループの人たちの意見を聞いてみて，自分とは違った現実的な考えが多く，自分の考えが恥ずかしく思えてきたりもした。でも，改めて考えることのできる道徳なので，とても良かったと思った。

「しあわせ」について考えたことは自分にとってプラスになったと思う。自分が今どんなことを望んでいるのかということもわかってきた。そして友達がどんな考えを持っているのか知ることができて，本当に良かった。これからの生活で，もっともっと自分のしあわせがなにか考えていきたい。

このように，本授業を通して生徒たちは自分自身の「しあわせ」観を見つめ，価値観の特徴に気付くことができた。また自他の考え方の違いに気付き認め合いながら，そのうえで自分の考えをさらに深めることができたといえる。

Ⅵ 研究のまとめ

■1　実態調査から

教師の多くは，道徳の授業における資料の重要性について認識し，子供たちの心をゆさぶるような魅力ある資料を選択し，学習形態を工夫して活用しようと考えているが，実際には，市販の副読本に頼った授業を行っていることが分かった。

しかし，子供たちにとっては道徳の授業で使われる資料が，授業の好き，嫌いを決めるほど，興味・関心のあるものだった。そのことは，全学年の子供たちが道徳の時間が「好き」な理由や，授業で心に残っているものとして資料をあげていることなどからうかがうことができた。

しかも，道徳を「きらい」とする子供たちがあげた理由が「授業のマンネリ化」「資料に魅力がない」などであった。これらのことを考えたとき教師は子供たちの心をゆさぶるような資料の選択と，その活用法を工夫した魅力ある道徳の授業づくりをする必要性があることが明らかになった。

■2　授業実践から

(1) 役割演技や疑似体験活動を取り入れた子供たちの心に響く，楽しい授業　　（授業実践Ⅰ）

本授業実践では，島根県出雲市の第11回「くにびきマラソン大会」で，全盲のランナーを完走させるまでの市長の葛藤と職員の涙ぐましい努力の様子を描いた資料を用いている。

授業者は，資料を分割提示したり，疑似体験や役割演技等を取り入れたりし，子供たちを登場者や場面に共感させ，ねらいとする価値「思いやり・親切」を実感的にとらえさせようとしていた。

子供たちは，市長や職員の立場になって全盲のランナーを完走させるために悩み，考え，そして完走できたことに感動し，喜びを味わっていた。

役割演技や疑似体験が，登場者への共感を高め資料のもつ価値を一層引き出し，子供たちの心を豊かにしていくことを示した実践であった。

(2) 4コマまんがを中心資料とした授業　　（授業実践Ⅱ）

本授業実践は，朝日新聞に連載されていた園山俊二氏の4コマまんが「ペエスケ」を中心資料として，ねらいとする価値「動植物・自然愛護，環境保護」に迫ろうとしたものである。

授業者は，4コマまんがのもつ資料としての価値を生かすために，教師の実演，実物の写真，補助資料「地球があぶない」を取り入れた。

子供たちは，分割提示された4コマの各場面で動物を愛護し，環境を守ろうとするペエスケの思いや願いに共感し，ねらいとする価値について真剣に考えていた。その考えの深さと内容は，子供たちが書いた吹き出しからも読み取れる。

子供たちが親しみやすいまんがも，道徳の資料として十分活用できることを示した実践であった。

(3) 基本型にのっとった，語り聞かせによる授業　　（授業実践Ⅲ）

本授業実践は，感動資料「カーテンの向こう」を語り聞かせによって提示し，本当のやさしさとは何かについて考えさせ，人間愛の精神をとらえさせようとしたものである。

授業者は，あえて資料を配布しなかったが，語り聞かせと場面絵によって資料提示を行い，子供たちを主人公ヤコブの行為に共感させ，ねらいとする価値にとらえさせていった。

どんなにすばらしい感動資料でも，資料提示と学習展開の工夫がなければ，子供たちの心をゆさぶることはできないが，資料提示の工夫が子供たちの感動をさらに高めることを示す実践であった。

(4) 聴き合い活動を通じて，自他の個性を尊重し合う授業　　（実践授業Ⅳ）

本授業実践は，絵本「しあわせ」を資料として用い，級友の考えを聴き合うことを通して，自分なりの生き方をとらえさせようしたものである。

資料にある14の「しあわせ」を自分の「しあわせ」と同じとした友人の理由を聴くことは，実は，友人の考えや生き方を認めるとともに，自分

の価値観を見つめ直すことでもあった。

道徳の授業では，話合い活動が不可欠であるが，その前提として相手を受容し，話を聴くことが重要であることを明らかにした実践だった。

■3　まとめ

子供たちにとって，道徳の授業は決してつまらない時間でも，退屈な時間でもない。むしろ，実態調査からも読み取れるように「いろんな話が聞け，自分の考えが言え，友達や先生の考えが聞ける」楽しみな時間なのである。

今回の研究では，子供たちにとって楽しみになるような道徳の授業づくりのヒントになることも願って，心をゆさぶる資料の選択と学習展開の工夫に視点を当てて進めた。

従来，資料は市販の読み物資料に偏りがちであったが，ねらいに即せばビデオ，紙芝居，絵本などを資料としてよいわけである。そこで授業実践では，学年の発達段階を考慮しながら心をゆさぶるような内容の読み物，4コマまんが，詩を資料として取りあげ，さらに，そのもつ特性を生かすために，指導過程と学習活動の工夫も試みた。その結果，次の子供たちの姿が授業でみられた。

伴走者になりきって役割演技をし，全盲のランナーを完走させようとした4年生，地域のゴミの散乱とペエスケの願いを関連づけ，環境保全を考え合っていた6年生。そして，中学校では，教師の語り聞かせに熱心に耳を傾け，人間の優しさを学級の仲間関係とかかわらせながら考えていった1年生，生きることの幸せについて，仲間の考えを聴き，考え合った進路選択を控えた3年生。

「豊かな心をもち，たくましく生きる子供を育てる」ことは，一朝一夕にはできない。それは，今回の授業実践のように，指導者が本気で資料を探し，授業づくりをした道徳の時間の積み重ねによって，はじめて具現化されるものだということを授業中の一人一人の子供の姿から確信した。

Ⅶ　研究の反省と今後の課題

■1　研究の反省

・実態調査を大規模に行い，市内各学校の道徳の授業の現状を明らかにしようと計画していたが，今回は授業実践に重点をおいたため，最小限の調査にならざるをえなかった。

・今回のどの授業においても，子供たちは資料に興味を示し，真剣に学習に取り組んでいた。しかし，一度の授業実践だけで，資料の価値と学習展開の有効性を一般化することはできないので，今後とも検証を深めていきたい。併せて，さらに心をゆさぶる資料の収集に努めて行きたい。

■2　今後の課題

・子供たちの心をゆさぶるような，魅力のある資料とその活用例を蓄積し，市内各学校の教師がそれを自由に活用できるような「資料センター」のような組織を設ける必要があると考える。

●参考文献

○押谷由夫「道徳教育新時代」　国土社　1994

○「道徳教育カリキュラムの改善に関する調査研究」　国立教育研究所　1997

○諸富祥彦「道徳授業の革新」　明治図書　1997

●委嘱研究員

宮城教育大学講師	中木　國光
仙台市立南吉成小学校教諭	及川　俊
仙台市立加茂小学校教諭	今野　克則
仙台市立実沢小学校教諭	菊地　敦子
仙台市立鶴が丘中学校教諭	青山　清司
仙台市立桜丘中学校教諭	本木　一昭
仙台市立東華中学校教諭	菱沼　雅子

●担当

仙台市教育センター

指導主事(主担当)	大槻　博
主任指導主事	狩野　克彦
指導主事	桜田　尚子

たくましく生きる力をはぐくむ道徳の指導

今、子供たちは

・道徳の時間は**好き**

・いろんな話しを**聞きたい**
・他の人の考え聞きたい

今、先生たちは

適切な**資料がない，マンネリ化**で困っている

・授業を**改善**したい

児童生徒の実態の把握
・発達段階、地域の特性

学校全体の共通理解
・教育計画
・学級の指導計画

学習形態の工夫

資料の選択と活用の視点

指導過程 及び
学習活動の工夫の視点

資料を生かす

心をゆさぶる資料の選択

※選択の視点の明確化
・読み物資料（実践Ⅰ Ⅲ）
文学作品，民話，寓話，児童作文，日記，詩
・新聞記事
・まんが（実践Ⅱ）
・絵本，詩集（実践Ⅳ）
・教師の生き方，考え方
・郷土資料

資料提示の工夫
・分割提示（実践Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ）
・語り聞かせ（実践Ⅲ），録音，写真，ビデオ，紙芝居，場面絵，ペープサート 等

指導過程及び学習活動の工夫

※**指導過程**
・基本型（実践Ⅱ Ⅲ）
・基本型にとらわれない（実践Ⅰ Ⅳ）
※多様な学習活動
・話合い（実践Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ）
・役割演技（実践Ⅰ）
・体験活動（実践Ⅱ）
・聴き合い（実践Ⅳ）
・書く活動（実践Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ）
・視聴覚教材の活用（実践Ⅱ）
・説話（実践Ⅱ Ⅳ）　等

道徳の授業を改善するための視点

まず子供たちの実態を的確にとらえ
幅広い，**多様な資料の活用**を心掛け**基本型を踏まえた学習展開**
その上で、資料を生かすための基本型にとらわれない**新しい学習形態の工夫**を
教師の個性を踏まえ，教師自身の体験，本音を提示し授業を展開

その根底には信頼される教師、お互いに認め合う学級づくりが基本

豊かな心をもちたくましく生きる子供たちをはぐくむために

自らの生き方を見つめさせ，主体的進路選択能力を育成する学級活動における進路指導計画はどうあればよいか

――仙台市立中学校の進路指導実態調査を通して――

■要　約

この研究は，主体的進路選択能力の育成を目指し，学級活動における進路指導計画の在り方を探るために，仙台市市立中学校の進路指導に対する教師の意識と指導の実態を質問紙法により調査を行ったものである。

その結果，進路指導の計画と実践上の課題が明らかになり，「自己理解」「職業観・進路計画」「情報理解」に重点を置いた進路指導題材系統図，進路学習計画，進路指導計画案を提言することができた。

■キーワード

□進路指導計画　□進路選択能力　□学級活動

□自己理解　□職業観　□情報理解

目　　次

Ⅰ　主題設定の理由 …… 31
　1　進路指導の現状 …… 31
　2　進路指導の課題 …… 31

Ⅱ　研究の基本的な考え方
　1　主体的進路選択能力とは …… 31
　2　主体的進選択能力を育成するための指導の在り方 …… 31
　　(1) 自己理解に関する指導 …… 31
　　(2) 職業観・進路計画に関する指導 …… 32
　　(3) 情報理解に関する指導 …… 32

Ⅲ　研究の目的 …… 32

Ⅳ　研究の概要
　1　研究の方法 …… 32
　2　研究の内容
　　(1) 実態調査の実施の概要 …… 32
　　(2) 実態調査の結果と分析の概要 …… 33
　　①　中学校における進路指導の実態 …… 33
　　②　進路指導に関する教師の意識 …… 36
　　③　教師からみた進路指導に関する生徒の実態 …… 40
　　(3) 中学校学級活動における進路指導計画の作成 …… 42
　　①　実態調査から探る進路指導計画の在り方 …… 42
　　②　学級活動における進路指導計画の在り方 …… 45
　　③　学級活動における進路指導計画案 …… 45

Ⅴ　研究のまとめ
　1　実態調査の分析から …… 46
　2　進路指導計画案の作成から …… 46

Ⅵ　研究の反省と今後の課題
　1　研究の反省 …… 46
　2　今後の課題 …… 47

◇　参考文献 …… 47
◇　委嘱研究員 …… 47
◇　資料
　・学級活動を中心とした進路指導題材系統図 …… 48
　・学級活動進路学習計画 …… 49
　・第１学年学級活動進路指導計画 …… 50
　・第２学年学級活動進路指導計画 …… 51
　・第３学年学級活動進路指導計画 …… 52

Ⅰ　主題題設定の理由

■１　進路指導の現状

これからの学校教育においては，生徒が進路選択の問題を自己の生き方の問題として受けとめ，人生を積極的に切り開いていく力を育成することが重要である。進路指導では，生徒一人一人が自己理解を深め，自らの個性を伸長し，豊かな自己実現のために，多様な進路の中から自分なりの生き方を選択していくことができるように指導の充実が求められている。

学習指導要領では，総則第６・２(4)に「生徒が自らの生き方を考え，主体的に進路を選択することができるよう，学校の教育活動全体を通じ計画的，組織的な進路指導を行うこと」と位置付けている。また，文部省『教育改革プログラム』には進路指導改善の一方策として，中学校と高等学校の一貫教育の方向性が示されていることや，教育課程審議会の『中間まとめ』において「総合的な学習の時間」が提案されたことも踏まえておく必要がある。

学習指導要領の「特別活動」第２内容Ａ学級活動(2)及び(3)では，自己理解や情報活用，将来の生き方と進路の適切な選択について扱うことになっている。その時数は，「学級活動に配当する授業時数の３分の２程度」とされている。

しかし，中学校では学級活動の中で取り上げるべき課題が多く，進路指導計画はあるものの，進路指導の資料の準備や実施に多くの時間をかけられない。そして３学年になって必要に迫られて時間をかけている現状が考えられる。

■２　進路指導の課題

自分を見つめ理解し，適性に合った進路を主体的に選択していく生徒を育成するには，進路指導が，決して後回しになったり，単発的であったりしてはならない。つまり，教育課程に位置付けられた時間の中で，系統的・継続的に行われなければならない。そのためには，１・２学年の進路学習の充実が重要である。また，生徒の進路学習に対する関心・意欲を高め，学習そのものを実感させるために啓発的経験の設定も考えていくべきである。

各学校においては，それぞれ進路指導計画が作成されてはいるが，それが実状に合わなかったり，必ずしも実践に結びついていない。

本研究では，以上のことを課題としてとらえ，実態調査を通して，主体的進路選択能力を育成するための学級活動における指導計画の在り方を探るという視点で本主題を設定した。

Ⅱ　研究の基本的な考え方

■１　主体的進路選択能力とは

将来に展望を持ち，自己を理解し生かす能力と，進路に関する情報活用能力を生かして，幅広い考えの基に進路を選択する能力を持つこととととらえる。

■２　主体的進路選択能力を育成するための指導の在り方

以下の３点を押さえることが必要である。

(1) 自己理解に関する指導

進路指導における自己理解では，長所を伸ばすことが大切である。自分の能力や適性を固定的にとらえるのではなく，自分のよさを見つけ，それを伸ばすように指導しなければならない。そのためには，興味・関心のあることに目を向けさせ，自分自身の進歩や成長を信じて努力する気持ちを持つよう支援していく。さらに，他との関わりのなかから，新しい自分を発見することがあるということにも気付かせる。

また，自分の夢を育てることは大切だが，夢を実現するための現実的な制約についても理解させる必要がある。

(2) 職業観・進路計画に関する指導

職業観を「生きがい観」ととらえる。自分の将来に目を向けさせ，夢や希望を持たせるとともに，生きがいを追求する態度を育てていく。職業に関する学習では，「職業に貴賤はない」ということや「人はそれぞれの価値観で職業を選択する」ということを理解させる必要がある。

将来の見通しを持って進路選択をするためには，1学年から成長に応じた段階的な進路計画を立てさせなければならない。それがその後の進路学習の系統的・継続的な積み重ねにより，学年が進むにしたがって，より明確で具体的になるはずである。進路計画を作成する過程を通して，生徒の進路選択に対する意識や関心を深めていく。さらに，職場体験学習などの啓発的経験を取り入れることにより，進路学習への関心・意欲の一層の高揚を図る。

一方，将来の見通しを持って進路選択をしていく過程で，生徒の迷いや悩みは多くなる。しかし，それを克服していく体験こそ自分の生き方への自信となる。生徒がその自信を持てるよう進路相談の充実も不可欠である。

(3) 情報理解に関する指導

情報の収集・理解・活用等，情報活用能力を高めることは，生涯にわたる生き方の自己決定能力の伸長につながると言われている。

進路指導では，多くの情報の中から自分に関係のあるものを探し出し，それを理解して，自分の進路選択に活用していくことが大切である。自分の進路情報が少なければ進路選択の幅が狭まり，将来の可能性を小さくすることにつながる。しかし，多くの情報があったとしても，それを理解する能力がなければ情報を生かすことはできない。

したがって，情報収集，理解，活用という一連の学習が重要である。その指導においては，生徒自身に情報収集させることが最良の方法である。そのためには，進路指導のための資料室等の設置や資料の整備が必要である。

Ⅲ 研究の目的

仙台市市立中学校の進路指導の実態を把握し，中学校の学級活動における進路指導の在り方について，進路指導計画案を示すことを通して提言を行う。

Ⅳ 研究の概要

■1 研究の方法

(1) 実態調査
(2) 調査結果のまとめと分析
(3) 進路指導計画の作成

■2 研究の内容

(1) 実態調査の実施の概要

① 調査の目的

ア 仙台市立中学校の教師の進路指導に対する意識と指導の実態を探り，進路指導に関する課題を明らかにする。

イ 主体的進路選択能力を育成するための進路指導計画作成ための基礎資料を収集する。

② 調査対象者

ア 仙台市立中学校の進路指導主事
イ 同 各学年主任
ア，イ 総数245名（64校）

③ 調査領域

ア 組織的・計画的な取り組みについて
・進路指導組織の活動状況
・進路指導計画の実施状況（全体計画，学年計画）

イ 系統的・継続的な取り組みについて
・進路学習状況（各学年の指導時数と内容）
・啓発的経験の実施状況
・追指導について

ウ　教師の指導観について
　・進路指導の重点
　・進路指導の困難点
エ　教師の生徒観について
　・生徒理解の進め方
　・進路選択の要素
オ　教師の人生観について
　・望ましい職業観とは
　・望ましい学校観
カ　進路指導に使用している資料

④　調査方法
ア　質問紙法
イ　進路指導主事と学年主任兼任の場合は，学年主任の立場を優先

⑤　有効回収数　236名（61校）

⑥　調査期間
平成９年７月８日～７月16日

(2)　実態調査の結果と分析の概要

①　中学校における進路指導の実態

進路指導の計画に関して，作成方法，内容，系統性，設定時間数，使用資料，進路指導のための設備などについて質問した。

設問１　各学年ごとの進路指導計画は主にどのように作成していますか。

ア．自校に以前からある計画をそのまま利用
イ．自校に以前からある計画を年度ごとに見直しながら作成
ウ．文部省発行のもの等自校以外のものをそのまま利用
エ．その他

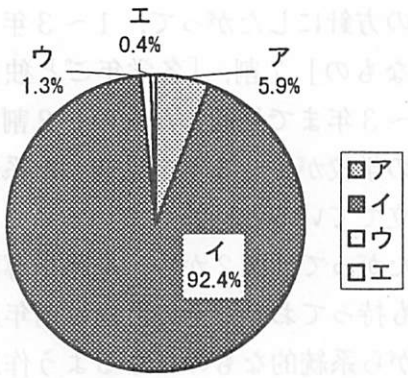


図１　進路指導計画の作成

設問２　各学年ごとの進路指導計画はどのようなものですか。

ア．学校全体の方針にしたがって，１～３年を見通した系統的なもの
イ．各学年ごと独自にその学年を１～３年まで見通したもの
ウ．各学年ごと単年度で計画を立てている
エ．その他

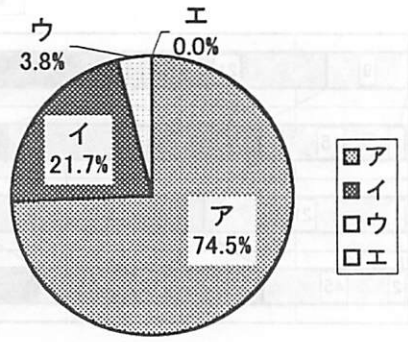


図２　進路指導計画の系統性の有無

図１によれば，「自校に以前からある計画を年度ごとに見直しながら作成」が最も多く，９割強を占めている。このことから，ほとんど自校以外の計画は使わず，前年のものを踏襲しているか，修正を加えたものを利用しているものと思われる。

図２では，進路指導の系統性については「学校全体の方針にしたがって，１～３年を見通した系統的なもの」７割，「各学年ごと独自にその学年を１～３年まで見通したもの」２割であり，ほとんどの学校が１～３年を見通した系統的な指導計画を立てていると回答していることが分かる。

したがって，図２から，進路指導計画はどこの学校も持っており，その計画は前年度の見直しをしながら系統的なものになるよう作成していることが読み取れる。計画の内容でみると，多くが学校全体として，３年間の系統性を考慮しており，学年独自で計画を作成している場合でも３年間の系統性は重視していることが分かる。

設問３　各学年における学級活動の年間計画の時数の中で，進路指導に当てられている時数はどのくらいですか。

ア．３時間未満　　イ．３～５時間
ウ．６～８時間　　エ．９時間以上

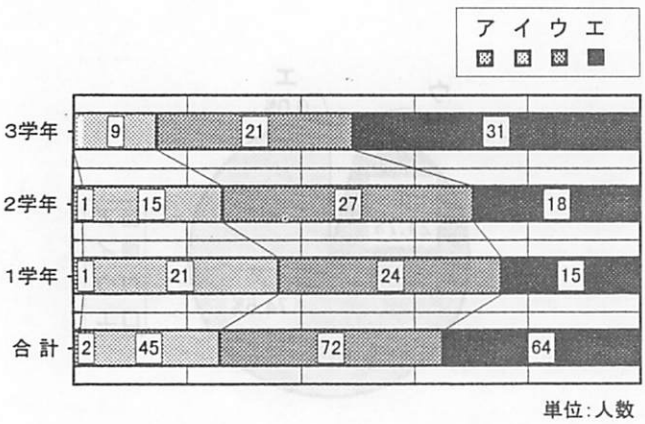


図３　学級における進路指導の設定時数

学年によって傾向が異なっている。１，２学年で最も多いのは，「６～８時間」，３学年で最も多いのは，「９時間以上」という結果である。３学年の時数が他学年に対して多いのは，上級学校受験を間近に控えているためと思われる。しかし，１学年についてみると，年間計画で５時間までの学校が22校もあり，いまだ出口指導に偏っていることの現れと考えられる。

設問４　進路学習はどのようなものを中心としていますか。各学年の立場でお答ください。（複数回答）

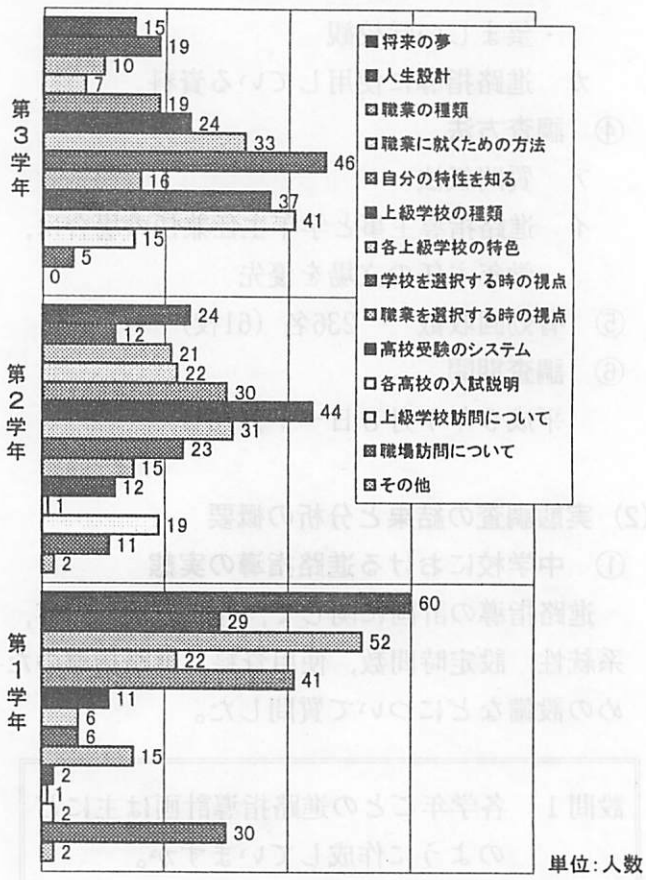


図４　進路学習の内容

学年によって傾向が異なっている。１学年では，将来に向けて，特に社会へ巣立った後の職業観が中心で，それに生徒自身の特性をどのように生かしていけばよいかを進路学習の内容ととらえているが，２学年，３学年と上がるにしたがって上級学校受験が中心となり，特に高校関係の情報や学校選択の視点といった具体的内容を多く取り入れていると思われ，職業観等の継続的な指導が少なくなってきている。

設問５　あなたの学年で啓発的経験として行っていることをあげてください。（複数選択）

ア．職場訪問　イ．職場体験学習
ウ．上級学校訪問　エ．ボランティア体験学習
オ．特に行っていない　カ．その他

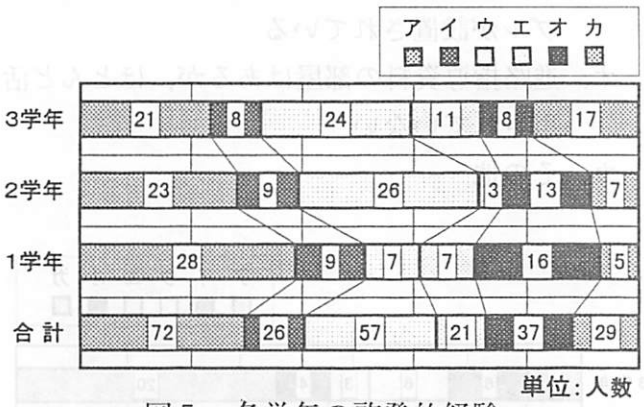


図５　各学年の啓発的経験

学年によって傾向が異なっている。各学年ごとに多い順に三つならべると以下のような結果である。

１学年は「職場訪問」「特に行っていない」「職場体験学習」，２学年は「上級学校訪問」「職場訪問」「特に行っていない」，３学年は「上級学校訪問」「職場訪問」「その他」（講話など）となっている。「職場訪問」と「職場体験」では，合わせて７割以上が実施しているが，「職場訪問」の方が多く，「職場体験」は圧倒的に少ない。「体験」は「訪問」と比べると，受け入れ機関の協力の面でより困難な状況がある。

また，「特に行っていない」という回答が37人であり，その主な理由として「時間が確保できない」ことを挙げている。「上級学校訪問」は，１学年では，わずか７校に対し，２学年から急に増えてきている。このことは，学年が上がるにしたがって進路発達上，進路情報や進路選択に力点を置いていることを示している。

設問６　進路指導に使用している資料はどういうものですか。（複数選択）

ア．研究会作成の副読本　イ．市販の副読本
ウ．学校作成の学習ノート
エ．その都度作成するプリント　オ．その他

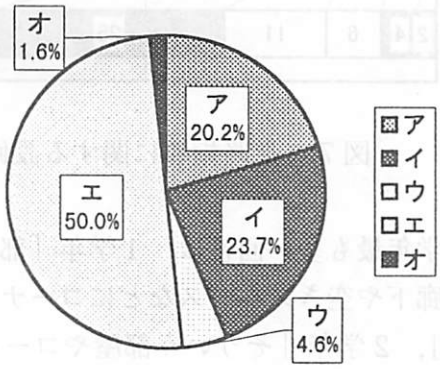


図６　進路指導に使用している資料

学年による差はほとんどなく，市販や研究会作成の副読本は，ある程度使用されているが，多くは各学校の実態を把握した教師による手作りプリントの類で，半数を占めている。また，ごく少数ではあるが，学校独自に作成した学習ノートを利用して進路学習に役立てているという回答があるが，単にプリントの作成段階にとどまらず，系統的な進路指導が行われているのではないかと考えられる。

設問７　進路情報提供または進路相談のための部屋はありますか。

ア．両方とも別々に設置している
イ．他の部屋と兼用になっている
ウ．進路資料室はある
エ．進路相談室はある
オ．部屋ではないが，廊下や空きスペースなどにコーナーを設けている
カ．そういう部屋やコーナーは特に設けていない

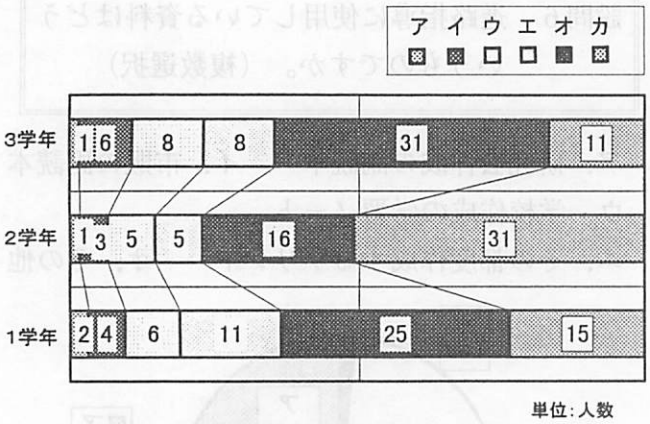


図７　進路指導に関する設備

各学年最も多い回答は，１学年「部屋ではないが，廊下や空きスペースなどにコーナーを設けている」，２学年「そういう部屋やコーナーは特に設けていない」，３学年「部屋ではないが，廊下や空きスペースなどにコーナーを設けている」である。この設問からは，進路指導に力を入れているかどうかを伺い知ることができる。実態は進路指導専用の部屋を設置している学校は少数で，全学年を通じて，実際に進路相談を行う場所や，資料を提示及び保管目的の場所としては，教室や廊下にある空きスペースを利用していることが多い。「特に設けていない」という回答は２学年で最も多くなっている。１・３学年は少ないが，２学年では，他の学年の倍近い数字が上がっている。したがって主体的な進路選択能力を育成するためには，進路指導のための環境をより整える必要がある。

設問８　進路情報提供のため，または進路相談のための進路指導の部屋やコーナーがある学校では，その活用状況は次のどれですか。

ア．進路指導資料が整い，進路相談室としての活用もできるように椅子やテーブルも設置されている

イ．進路指導資料の保管のための部屋として活用している

ウ．進路指導資料が整い，生徒への進路情報提供のための部屋として活用している

エ．進路資料室とは別に進路相談専用の部屋があり，生徒や保護者から進路に関する相談があった時対応できるように，椅子やテーブルが設置されている

オ．進路指導資料の部屋はあるが，ほとんど活用されていない

カ．その他

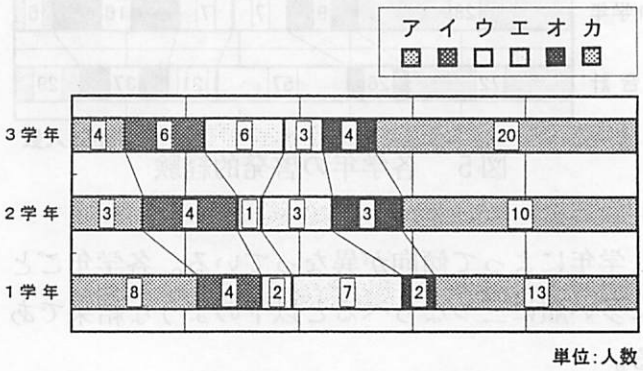


図８　進路指導の設備活用状況

進路指導資料のための部屋等，進路相談で活用している学校や，単に資料置き場として使っているところまで千差万別であるが，進路相談や進路情報の収集・活用を充実させるための環境整備が生徒のために重要である。

②　進路指導に関する教師の意識

進路指導に関する教師の指導観，困難点，教師の共通理解，指導内容・資料等の提供，指導時間の確保，啓発的経験等に関して質問した。

設問９　進路指導において最も重要なことは何だと思いますか。（二つ選択）

ア．生徒に自分の適性・能力を気付かせること
イ．生徒に自分の学力の程度を把握させること
ウ．生徒に必要最低限の進路先を確保させること
エ．将来の展望や生き方を考えさせること
オ．職業社会や上級学校について理解を深めさせること
カ．生徒の学力向上への意欲や努力を促すこと
キ．社会のしくみを知り，視野を広げさせること
ク．その他

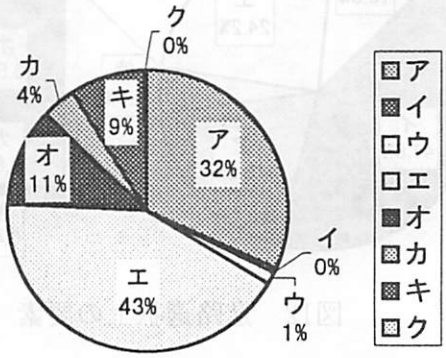


図９　進路指導の重点

最も多いのは，「将来の展望や生き方を考えさせること」で，次に「生徒に自分の適性・能力を気付かせること」である。

３番目に多い回答として「職業社会や上級学校についての理解を深めさせること」を挙げたことには，「進路先の確保」や「学力向上の努力」に固執しているのではなく，「自分に合った学校」「就きたい職業」を適切に選択させたいという教師の意識が表れている。

多くの教師は，生徒の適性・能力を生かし，将来への展望や生き方，社会の仕組みと職業観，そして上級学校とのかかわりに重点を置いて指導に当たっているものと考える。

設問10　継続的な進路指導を行うに当たっては，学年ごとの発達段階に応じた指導計画が不可欠だと考えられますが，それを実施するために，何に重点を置いていますか。（二つ選択）

ア．進路ノート（ファイル）を活用する
イ．指導のための計画的な資料の提供に努める
ウ．指導計画作成段階で十分話し合う
エ．１・２年の進路指導を強化する
オ．特に意識していない
カ．その他

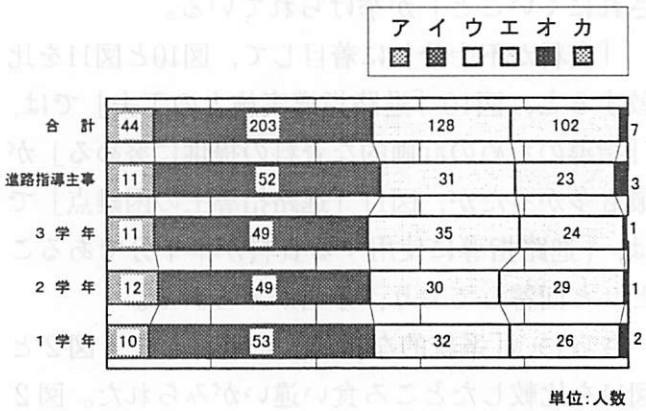


図10　進路指導実施上の工夫

設問11　進路指導を進めていく上で最も困難だと思うことは何ですか。（二つ選択）

ア．準備のための十分な時間の確保がむずかしい
イ．進路指導に使用する資料が不十分である
ウ．教職員の考え方の統一が図られていない
エ．学校の指導と保護者の考え方に差異がある
オ．３年間を通した系統的な指導がされにくい
カ．その他

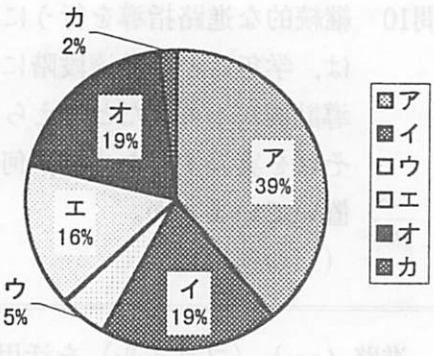


図11　進路指導上の困難点

図11から，指導実施上の困難点として，第一に「準備のための十分な時間の確保がむずかしいこと」第二に，「進路指導に使用する資料が不十分であること」と「3年間を通した系統的な指導がされにくいこと」が挙げられている。

「資料が不十分」に着目して，図10と図11を比較すると，図10「進路指導実施上の工夫」では，「指導のための計画的な資料の提供に努める」が最も多かったが，図11「進路指導上の困難点」では，「進路指導に使用する資料が不十分であること」と回答しており，矛盾がみられる。

さらに，「系統的な指導」に着目して，図2と図11を比較したところ食い違いがみられた。図2では，指導計画は「1～3学年を見通した系統的なもの」と9割強が回答している。にもかかわらず図11「進路指導の困難点」では，「最も困難」なことの2番目に挙げられている。

これらのことは，計画上と現実の違いを明らかにしている。つまり，計画上は系統的なものが各学校できてはいるが，実際は進路指導に1年生から系統的に指導することが困難ということを表している。しかも「進路指導に使用する資料の不足」さらに「準備のための十分な時間の確保がむずかしい」となれば，実施されている内容のレベルについて教師側の検討が必要である。

設問12　進学先を考えさせるに当たり，重要な要素は何だと思いますか。
（二つ選択）

ア．その学校に学力の程度が合っていること
イ．興味や適性に合った学校であること
ウ．校風や教育理念に共感できること
エ．将来の進路展望がもてること
オ．通学しやすいこと
カ．授業料等の経済的負担が少ないこと
キ．その他

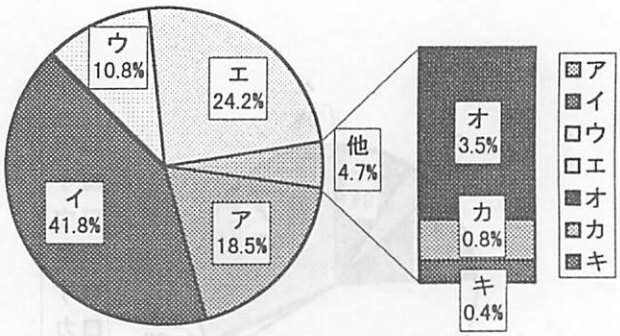


図12　進路選択上の要素

上位三つを挙げると，「興味や適性に合った学校であること」「将来の進路展望がもてること」「その学校に学力の程度が合っていること」という結果である。

これは，高校中退が社会問題化されていることと教師の意識との関連がみられる。

教師は「興味や適性」のある学校への進学指導を行いたいという意識をもっているが，一方，高校入学後に進路変更を希望したり，意欲を失ってしまうなど，難しい問題が増加している。中学校の段階では，進路変更に対応できる柔軟な考え方や，生きがいをもって生きることの大切さを指導することが必要である。これは，職業観や進路計画の内容とかかわっている。

さらに「その他」の内容に着目すると，最も多

いのは「通学しやすいこと」である。受験当日まで，受験校の位置を知らないでいたり，通学しやすいかどうかが入学後の意欲にもつながることが考えられる。中学校段階では，この点での把握も進路情報の一つとして，指導の中に入れる必要がある。

設問13　あなたの学年では，学級活動の中で進路指導はどのように実施されていますか。

① 教師の共通理解

ア．十分できている
イ．ほぼできている
ウ．あまりできているとはいえない
エ．不足している

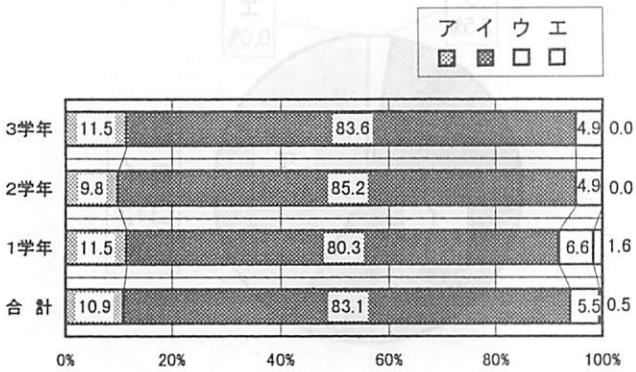


図13　教師の共通理解

各学年共通の傾向で，「ほぼできている」が8割，「十分できている」が1割という結果である。しかし，その理解の内容や程度が問題になる。

② 指導内容・資料等の提供

ア．十分できている
イ．ほぼできている
ウ．あまりできているとはいえない
エ．不足している

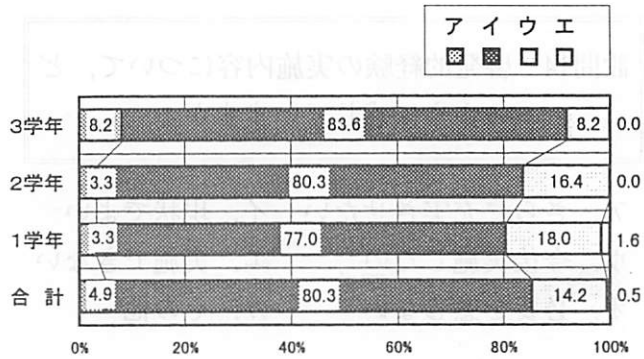


図14　指導内容・資料の提供

各学年指導内容や資料等の提供は「ほぼできている」が8割前後である。しかし，図11「進路指導上の困難点」でみたように，資料の準備の時間不足や資料そのものの不足という実態が一方にはあり，教師は指導内容にほぼ満足しているとはいえ資料の充実には至っていないものと考えられる。

③ 指導時間の確保

ア．十分できている
イ．ほぼできている
ウ．あまりできているとはいえない
エ．不足している

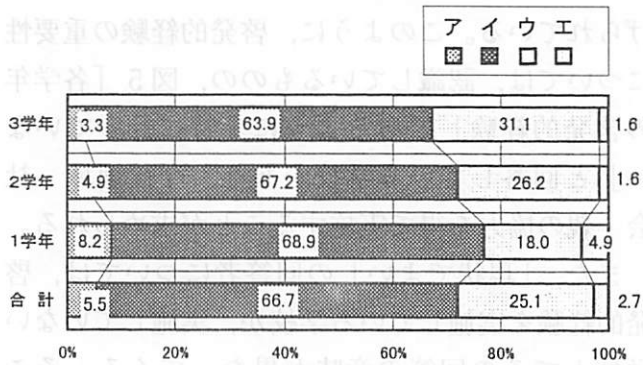


図15　指導時間の確保

「あまりできていない」に着目すると，学年が上がるにつれて，指導時間が不足という回答が増加している。3学年では，指導時間の不足を約3割の教師が感じている。

設問14　啓発的経験の実施内容について，どのように感じていますか。

ア．さらに充実させたい　イ．現状でよい
ウ．今後実施したい　エ．実施できない
オ．必要を感じない　カ．その他

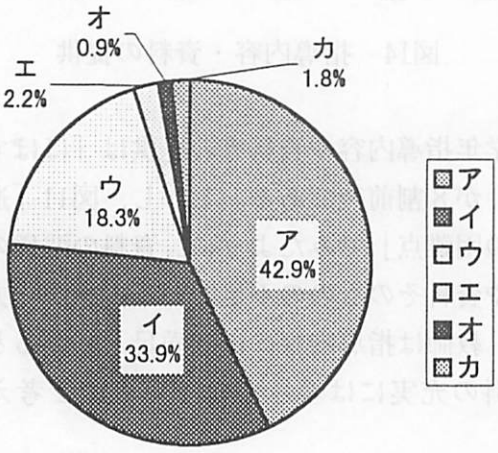


図16　啓発的経験についての教師の意義

回答として，「さらに充実させたい」「現状でよい」「今後実施したい」の順に多かった。

「さらに充実させたい」の理由としては，「進路理解が深まる」「自分の将来を真剣に考える機会になる」「進路選択の幅を持たせたい」などが挙げられている。このように，啓発的経験の重要性については，認識しているものの，図５「各学年の啓発的経験」にあるように「特に行っていない」と回答している学校があり，今後地域・社会・親の協力を得て実施することが求められる。

また，「現状でよい」の回答者については，啓発的経験を実施している学校か，実施していない学校かでその回答の意味が異なってくる。そこで，設問５とのクロス集計をしたところ「実施」していて「現状でよい」と回答していることが分かった。

したがって，ほとんどの教師は啓発的経験を実施することを肯定的に考えているということがいえる。

③　教師からみた進路指導に関する生徒の実態

「学力」「適性や興味」「将来の生き方」「家族の希望」の四つを挙げ，生徒はどの程度重要と考えていると思うか，また進路学習について，教師が中学生に求めることを質問した。

設問15　生徒が進路を選択するときに，生徒は「学力」はどの程度重要だと考えていると思いますか。

ア．大変重要
イ．ある程度重要
ウ．あまり重要でない
エ．ほとんど重要でない

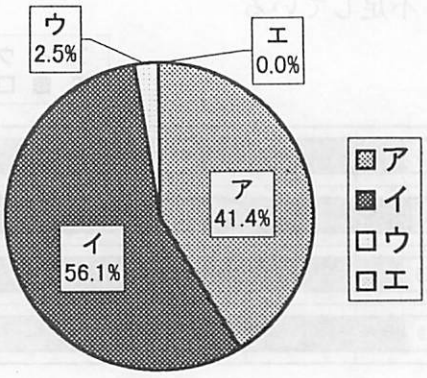


図17　学力

設問16　生徒が進路を選択するときに，生徒は「適性や興味」は，どの程度重要だと考えていると思いますか

ア．大変重要
イ．ある程度重要
ウ．あまり重要でない
エ．ほとんど重要でない

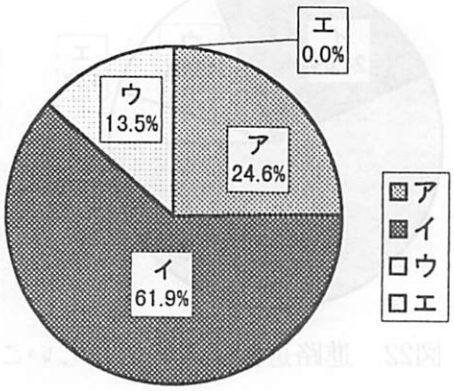


図18　適性や興味

設問17　生徒が進路を選択するときに生徒は「将来の生き方」をどの程度重要だと考えていると思いますか。

ア．大変重要
イ．ある程度重要
ウ．あまり重要でない
エ．ほとんど重要でない

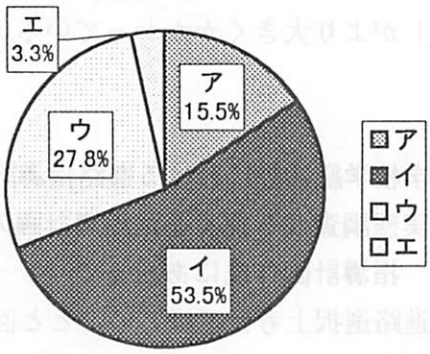


図19　将来の生き方

設問18　生徒が進路を選択するときに，生徒は「家族の希望」は，どの程度重要だと考えていると思いますか

ア．大変重要
イ．ある程度重要
ウ．あまり重要でない
エ．ほとんど重要でない

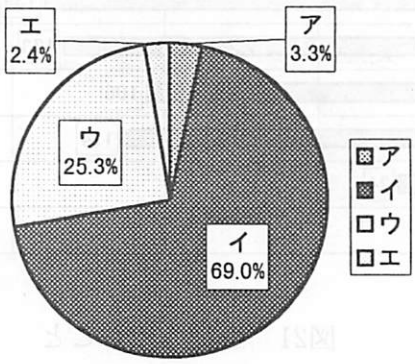


図20　家族の希望

図17～20のグラフによると，生徒が進路を選択する時に，一に「学力」，二に「適性や興味」または「将来の生き方」，そしてできれば「家族の希望」もかなえられれば，といったかたちで進路が決定されていっていると教師の多くは考えていることが分かる。

設問19　進路学習にあたり，中学生として生徒にこれだけはしてほしいと望むことは何ですか。（三つ選択）

ア．教師に相談にきてほしい
イ．自分の将来のことに興味関心を持ってほしい
ウ．上級学校や職業について自分で調べてほしい
エ．現在の自分の生き方を見つめてほしい
オ．目標を持って生活してほしい
カ．家族で将来の方向性について話合ってほしい
キ．将来何をしたいのかよく考えてほしい
ク．学習に力を入れてほしい
ケ．その他

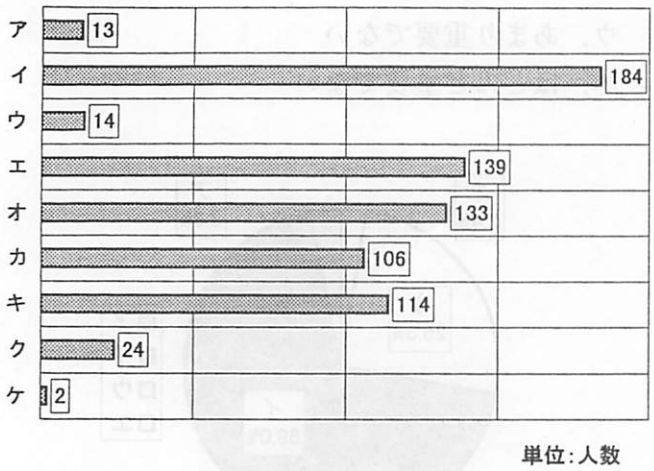


図21　生徒へ望むこと

多い順に三つを挙げると，「自分の将来のことに興味関心を持ってほしい」「現在の自分の生き方を見つめてほしい」「目標をもって生活してほしい」である。これらの項目はすべて進路指導の目標と一致している。教師は現在の教育の中で目指すべき方向をつかんでいるにもかかわらず，現実問題として生徒の「興味・関心」の段階から困難さがあることを示している。生徒にどのようにして関心・意欲を高めさせ，進路学習に積極的に取り組ませるか，今後の課題である。

設問20　生徒の進路選択にあたり，生徒に最もよく考えてほしいことは何ですか。

ア．将来まで見通した自分の生き方
イ．自分の適性・能力
ウ．自分の興味・関心
エ．自分を取り巻く社会状況の認識
オ．現在の成績
カ．その他

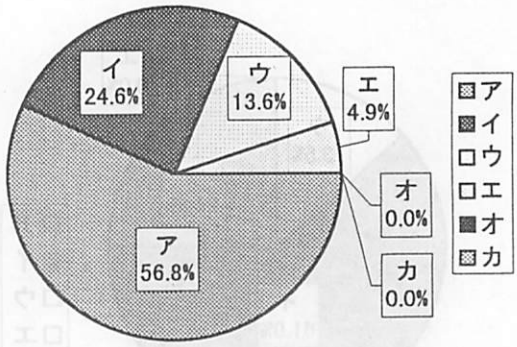


図22　進路選択上考えてほしいこと

「将来を見通した自分の生き方」を選んだ回答が最も多く，次に多かったのが「自分の適性・能力」で，その次が「自分の興味・関心」であった。「現在の成績」を選んだ教師はいなかった。

図22から，学校では「適性や興味」「将来の生き方」の大切さを指導していることがいえるが，図17～20によれば，現実には「学力」が大きくかかわっている。

しかし，教師が「適性や興味」「将来の生き方」に重点を置くことは間違いではない。「学力」だけではこの社会の変化に生きてはたらく力とはなりえない。生涯にわたって必要とされる「生きる力」を育成するためには，「適性や興味」「将来の生き方」がより大きくかかわっている。

(3) 中学校学級活動における進路指導計画の作成

①　実態調査から探る進路指導計画の在り方

ア　指導計画作成にあたって

図22進路選択上考えてほしいことと図９「進路指導の重点」によれば，「生き方」指導として進路指導をとらえ，自己理解を通して自分の「適性・能力に気付かせる」ことに重点を置いている。

図11「進路指導上の困難点」によれば「３年間を通した系統的な指導がされにくいこと」が挙がっている。これは，１，２年生での進路指導の充実をさせたいが，実際は難しいという教師の問

題意識がある。

しかしながら，主体的進路選択能力を育成する視点から，1・2年生での進路指導を充実させていくことが必要である。

主体的進路選択能力を目指すためには，「自己理解」を図る指導を通して自己の適性・能力に気付かせ，啓発的経験を通して将来に展望を持たせる。さらに情報理解を図る指導を行うことが重要である。これらを3年間にわたって系統的・継続的に行う必要がある。

設問10では，指導計画の実施には，「1・2年の指導強化」を大切としている。「1・2年の指導強化」は，3年生に偏らない進路指導のために十分に検討すべきことである。3年生になってから時間をかけ，資料を充実させても主体的進路選択は難しい。

さらに，設問1，10，11との関連で見ると，設問11では，進路指導の困難点として「3年間を通した系統的な指導がされにくいこと」とある。これは，1・2年生での進路指導の充実をさせたいけれども実際は難しいという教師の意識が見える。

主体的進路選択能力を育成する視点からは，1・2年生での進路指導の充実が重要である。どうすれば実現できるか，学校の実態に合わせて工夫する必要がある。そのためには，まず進路指導計画の作成から取りかからなければならない。

イ　学級活動における進路指導の内容はどうあればよいか

表1は，図4「進路学習の内容」から，各学年の学級活動における進路指導で多く実施されている内容をまとめたものである。

表1　学級活動で実施している指導内容

順位／学年	1位	2位	3位
1学年	将来の夢	職業の種類	自分の特性を知る
2学年	上級学校の種類	各上級学校の特色	自分の特性を知る
3学年	学校を選択する時の視点	各高校の入試の説明	高校受験のシステム

1学年では「職業」について，2学年では「上級学校」について，3学年では「学校を選択する時の視点」について指導している学校が多い。これは，図5「各学年の啓発的経験」にあるように，1学年で「職場訪問」，2学年で「上級学校訪問」を実施している学校が多い。また，図16「啓発的経験」についての教師の意識で実施を肯定的にとらえていることから，「啓発的経験」を指導計画に取り入れる必要がある。

また，「将来の夢」「自分の特性を知る」については，1学年のみ取り上げている学校が多いが，3年間の発達段階を踏まえた指導が必要である。1学年でとらえる「夢」と3学年でとらえる「夢」とでは質的に異なっていることから，3学年では夢の実現のためにどうするか，具体的に考えさせなければならない。「将来の夢」や「自分の特性を知る」の指導は「自己理解」にかかわる内容である。

「情報理解」の能力については，1・2学年の啓発的経験を通して自分で調べ，まとめる活動の中で育成されるものである。その力が3学年になって，自分の進路に関する資料を個別に収集し，活用していく力へと発達を遂げるよう指導すべきである。

ウ　進路相談との関連

進路指導には，全体指導と個別指導があり，進路は個々で決定しなければならない。したがって，いつでも個別に対応できるよう体制を整えておくことが必要になってくる。このことから，指導計画に「進路相談」も入れることにする。

エ　学級指導における進路学習に要する時数

次に，設問３と設問13③をクロスしたグラフを作成した。各学年の自校の設定時数と教師がそれに満足しているのかどうか，について相関を見た。

表２　進路指導の設定時数

順位／学年	１位	２位
１学年	６～８時間	３～５時間
２学年	６～８時間	９時間以上
３学年	９時間以上	６～８時間

表２は，図３「学級における進路指導の設定時数」のグラフをまとめたものである。

さらに，設問３と設問13③をクロスしたグラフを学年ごとに作成し，各学年の設定時数とその満足度について相関を見た。（図23，24，25）

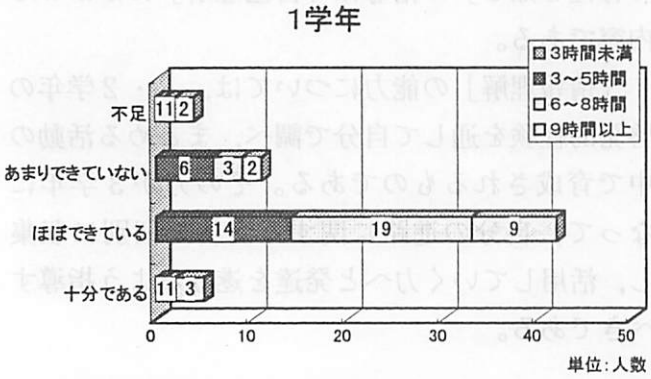


図23　設定時数への満足度（１学年）

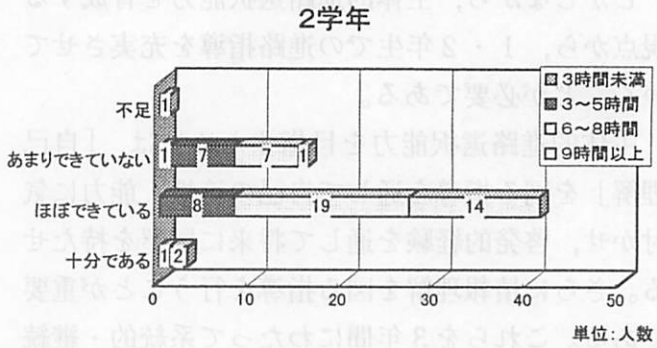


図24　設定時数への満足度（２学年）

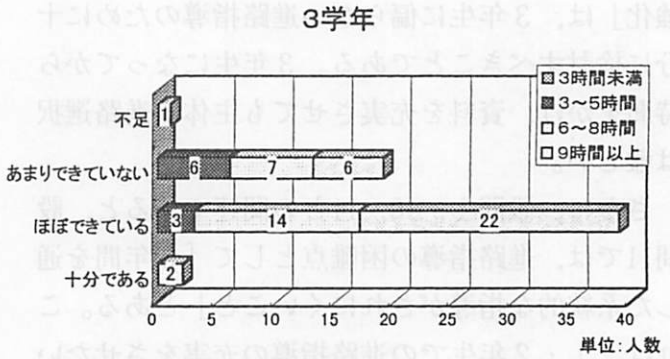


図25　設定時数への満足度（３学年）

次に，図23，24，25から，指導時間の確保が「ほぼできている」と回答した人数と，指導計画における設定時数との関係を表３にまとめた。

表３　設問３③で「ほぼできている」

学年＼時数	設定時数		
	３～５時間	６～８時間	９時間以上
１学年	１４人	１９人	９人
２学年	８人	１９人	１４人
３学年	３人	１４人	２２人

「ほぼできている」と回答した人数の最も多い設定時間に着目すると，１，２学年では，６～８時間で「ほぼできている」としている。３学年で

は，９時間以上である。

この実態を踏まえ，指導計画作成に当たっては，時間設定を１学年８時間，２学年８時間，３学年10時間とした。

②　学級活動における進路指導計画の在り方

実態調査と本研究の基本的な考え方を踏まえ，主体的進路選択能力の育成のために「自己理解に関すること」「職業観・進路計画に関すること」「情報理解に関すること」の三つの領域で，３年間の発達段階を考慮した系統的な指導計画を作成することにした。以下に作成に当たっての各領域における基本的な考え方である。

ア　「自己理解に関すること」

１学年では，自分の夢をはぐくむところから始まり，やがて自分の長所に目を向けさせ，それを伸ばすようなはたらきかけを行う。また，学校生活や啓発的経験から今まで気付かなかった自分に気付くことがある。人とのかかわりの中で，主観的・客観的に自分を知り，自分を育てていこうとする意欲と態度を育成していかなければならない。

２学年では次第に現実的な自己を認識させる。自分の個性や進路適性についても考えさせ，将来により具体的に目を向けさせる。

３学年では夢をもう一度とらえなおさせ，その実現のための方法を考えさせる。悩みを乗り越えて自分をよりよい方向に伸ばすよう指導する。また，柔軟に対応して生きることに気付かせる。中学校最後の授業では「後輩へ贈る言葉」を書くことなどを通して，自分を振り返り，自信をもって卒業後の進路へ向かっていける気持ちを持たせる。

イ　「職業観・進路計画に関すること」

１学年では，体験などを通して，いろいろな職業の種類があり，人それぞれの価値観の違いがあることに目を向けさせる。そして自分はどう生きるか，職業体験を通して学ばせる。

２学年では，職業と上級学校との関連へとひろげさせ，上級学校訪問を通して，具体的な進路計画を意識させる。

３学年では，人生について将来への展望というかたちで認識させる。上級学校を主体的に選択できるよう自分の学習計画を検討させたり，職業講話を通して，人生の先輩の話を聞かせ，自分の将来の展望を持たせるなどして，自分の志望先を決定していく過程で主体的な進路計画を立てさせる。

ウ　「情報理解に関すること」

１学年では，進路に関する情報の収集の仕方，その理解と活用の仕方を職場体験活動を通して指導する。

２学年では，上級学校について自分で調べ，調べたことを生かして訪問させる。さらに情報を得る活動やまとめの活動を通して情報理解を図り，発表会を開くなどして情報交換の場を広げ，それを活用するよう促す。

３学年では，先輩からの情報を得る中で，進路に対する選択幅を広げさせ，将来の生活を考えた進路選択につながるよう情報活用を図る。また，進路資料室などを活用して自分の志望先について調べさせ，進路相談等で主体的な進路選択をしていくよう支援する。学級では，受験の心構えなど，全体指導で情報提供を行う。

③　学級活動における進路指導計画案

ア　学級活動を中心とした進路指導題材系統図（資料編参照）

学級活動における３年間の進路指導計画案として取り上げたい題材を実態調査や発達段階を踏まえて，本研究の基本方針である三つの領域「自己理解に関すること」「職業観・進路計画に関すること」「情報理解に関すること」にまとめ，題材

の系統化を図った。これらは，互いに関係が深く，二つあるいは三つにまたがっている題材もあるが，中でも関係が深いものに分類した。「啓発的経験」「進路相談」等は，学級活動の時間外にも取り上げることの多い題材であることから，学級活動との関連の中で見てもらいたい。

イ　学級活動進路学習計画（資料編参照）

・第1学年学級活動進路指導計画
・第2学年学級活動進路指導計画
・第3学年学級活動進路指導計画

学級活動進路学習計画は，「系統図」を基に，学級活動の各時間ごとの「題材名」とそのねらいを学年ごとにまとめた。時数については，1学年，2学年は8時間，3学年は10時間で設定した。

各学年の学級活動進路指導計画は，学級活動進路学習計画をさらに学年ごとに「題材」「ねらい」「指導方法」を表にまとめたものである。「指導方法」の欄の中の数字は指導の順序を示している。

V　研究のまとめ

■1　実態調査の分析から

中学校の学級活動における進路指導の在り方を考えるために，教師の意識を中心とした実態調査を行った。

調査対象は，仙台市立中学校64校の学年主任，進路指導主事とした。その理由の一つは，学年主任と進路指導主事が，進路指導の計画実施におけるリーダーの役割を担っているためである。

調査結果からは，進路指導の重点を「将来の展望や生き方を考えさせること」「生徒に自分の適性や能力を気付かせること」とし，教師の進路指導に対する意識が高いことが分かった。一方，計画実施上困難なこととしては，「準備のための十分な時間の確保」や「3年間を見通した系統的な指導」を挙げ，課題が調査結果に表れた。啓発的経験についても「今後実施したい」と意識しながらも，実施に踏み切れないでいる状況が見えた。また，進路指導のための部屋等の未設置学校や学年が多くあったことも，課題としてでてきた。

■2　進路指導計画案の作成から

仙台市の実態調査によって，指導時間の設定や指導目標，内容等について明らかになったことを踏まえて進路指導計画案を作成した。

この進路指導計画案の特徴としては，次の点にまとめることができる。

○仙台市の実態に基づいていること
○主体的進路選択能力の育成を目指していること
○自己理解，職業観，情報理解の各領域における発達段階の系統性を重視していること
○啓発的経験や進路相談との関連を考慮していること
○単位時間ごとの指導内容，指導方法を明確にしたこと

以上のような点に工夫して作成したが，実施に当たってはさらに学校と生徒の実態に即したものにする必要があろう。

Ⅵ　研究の反省と今後の課題

■1　研究の反省

本研究では，進路指導の実態を明らかにし，学年と領域との関連まで図ることのできる題材系統図をはじめ，指導方法も含めた進路指導計画案を提言できた。これは，実態に即した時数的にも内容的にも無理のない計画案である。

しかしながら，啓発的経験の中の職場体験学習については実施するに当たっての具体的な情報や資料が必要だが，その提示には至らなかった。

また，自己理解や職業観についても，より詳細

な分析ができればよかったが，本研究では，時間的制約のため報告には盛り込めなかった。

■2　今後の課題

今後の研究すべき課題の一つは，本研究の成果である進路指導計画案を実施するための指導過程や資料の準備である。

次は，この進路指導計画案の検証と修正である。実践を通して，よりよいものを求めていく必要がある。実践の中では，道徳教育との関連を図っていくことも考えられる。2003年の学校週5日制の実施にともない，時間数の削減と指導内容の精選とともに，総合的・横断的指導についても今後追究していかなければならない。

本研究では，各中学校より多くの指導計画やワークシートなどを提供していただき，研究に活用させていただいた。今後は研究過程のなかで得た貴重な資料や情報をさらに生かしていく手だてを考えたい。

最後に，実態調査及び指導計画等の資料提供にご協力をいただいた各中学校の先生方に感謝するとともに，各学校の実態に応じた有効な活用をお願いしたい。

●参考文献

○文部省中学校・高等学校進路指導の手引『主体的な進路選択力を育てる進路指導』　1985
○内藤勇次『生き方の教育としての学校進路指導』　北大路書房　1991
○菊池武剋編『進路指導』　中央法規　1993
○文部省中学校進路指導資料『個性を生かす進路指導をめざして』　1993
○仙台市中学校校長会研究調査部『個性の伸長を図る進路指導と学校経営の在り方』　1993
○新潟県三条市立第三中学校『進路指導全体計画』　1993
○文部省中学校・高等学校進路指導の手引『中学校学級担任編』　1994
○文部省中学校・高等学校進路指導の手引『進路指導主事編』　1994
○東京都教育委員会『進路指導実践の手引き』　1994
○文部省中学校進路指導資料『個性を生かす進路指導をめざして』　1995
○京都市立永松記念教育センター『研究集録』　1995，1996
○下村哲夫『生徒指導・進路指導体制づくりのマニュアル　主任の仕事』　明治図書　1996
○埼玉県立南教育センター『個性を生かす進路指導の在り方に関する調査研究』　1996
○仙台市立山田中学校『研究紀要』　1996
○京都府城陽市立西城陽中学校『研究紀要』1996

●委嘱研究員

東北大学教授　菊池　武剋
仙台市立山田中学校教諭　中村　伸夫
仙台市立鶴谷中学校教諭　相澤　茂
仙台市立住吉台中学校教諭　工藤　俊治
仙台市立第一中学校教諭　大曽根眞紀子
仙台市立将監中学校教諭　佐藤　智子
仙台市立西山中学校教諭　山﨑千穂子

●担当

仙台市教育センター
指導主事(主担当)　首藤　真弓
指導主事　今藤　紀雄
指導主事　澁谷代志子
指導主事　水池　立彦

〈資料編〉　学級活動を中心とした進路指導題材系統図

学年	学期	学級活動における進路指導の題材			啓発的経験 進路相談等
		自己理解に関すること	職業観・進路計画に関すること	情報理解に関すること	
1年 8時間	一学期	①自分を知る1－私の夢		②進路情報1－職業調べ	・進路意識調査
	二学期		③職業観1－職場体験学習のために　その1 ④職業観2－職場体験学習のために　その2 ⑤職業観3－職場体験学習のまとめ	⑥進路情報2－職場体験学学習報告会	・職場体験学習 ・進路相談
	三学期	⑦自分を知る2－長所を伸ばそう		⑧進路情報3－職業と上級学校	・進路希望調査
2年 8時間	一学期		②上級学校1－上級学校訪問のために　その1	①進路情報4－上級学校の種類	・校外学習
	二学期		③上級学校2－上級学校訪問のために　その2 ④上級学校3－上級学校訪問のまとめ	⑤進路情報5－上級学校訪問報告会	・上級学校訪問 ・進路相談
	三学期	⑥自分を知る3－私の個性 ⑦自分を知る4－進路適性を知る ⑧自分を知る5－私の将来			・進路希望調査
3年 10時間	一学期	①自分を知る6－夢の実現のために	②進路計画1－学習計画の改善 ③職業観4－職業講話		・進路希望調査 ・修学旅行 ・高校体験入学
	二学期	⑥自分を知る7－進路の悩み	④進路計画2－私の進路選択 ⑦進路計画3－私志望先調べ	⑤進路情報6－先輩からのアドバイス	・高校体験入学 ・進路希望調査 ・高校説明会 ・進路相談
	三学期	⑩自分を知る8－後輩へ贈る言葉	⑨進路計画4－将来の生活	⑧進路情報7－受験の心構え	・入学試験 ・卒業式

学級活動進路学習計画　〈資料編〉

		1　年		2　年		3　年
月	時	「題材名」・ねらい	時	「題材名」・ねらい	時	「題材名」・ねらい
4月					①	「自分を知る６－夢の実現のために」 ・自分の夢を見つめ直し，３年生としての目標を持つことの大切さを理解する
5月	①	「自分を知る１－私の夢」 ・幼いころからの夢や希望の変化をたどり自己の成長に気づくとともに夢や希望の実現には進路の学習が大切であることを理解する	①	「進路情報４－上級学校の種類」 ・中学校卒業後の学校制度を理解する		
6月					②	「進路計画１－学習計画の改善」 ・これからの学習の方法について考え，計画を立てる
7月	②	「進路情報１－職業調べ」 ・多くの職業があることを理解し，職業の世界についての関心を高める	②	「上級学校１－上級学校訪問のために　その１」 ・上級学校訪問の目的を理解して，計画を立てる	③	「職業観４－職業講話」 ・人生の先輩である身近な職業人を通して多様な生き方について知る
9月	③	「職業観１－職場体験学習のために　その１」 ・職場体験学習に課題意識を持って取り組むことができるように，目的を理解する	③	「上級学校２－上校学校訪問のために　その２」 ・各上級学校の下調べをすることにより，訪問の意欲が高まる	④	「進路情報６－先輩からのアドバイス」 ・先輩からのアンケートにより，卒業後の生活について具体的な情報を知る
10月	④	「職業観２－職場体験学習のために　その２」 ・職場体験学習にあたっての一般的な注意事項などを理解する	④	「上級学校３－上級学校訪問のまとめ」 ・上級学校訪問の学習内容のまとめと報告資料作りをすることにより，進路学習に興味関心を持つ	⑤	「進路計画２－私の進路選択」 ・志望校を決めるために考えておくべきことを知り，主体的に進路を選択する意欲と態度を身に付ける
11月	⑤	「職業観３－職場体験学習まとめ」 ・職場体験での学習内容をまとめることを通して，体験したことを振り返る			⑥	「自分を知る７－進路の悩み」 ・進路について悩みや不安を持つのはみんな同じであることを理解し，積極的に解決しようとする姿勢を持つ
12月	⑥	「進路情報２－職場体験学習報告会 ・それぞれの職場で学習したことを発表することを通して，幅広く多様な職業の世界があることを理解する	⑤	「進路情報５－上級学校訪問報告会 ・上級学校訪問の発表を聴くことにより，自分の進路計画の参考にするとともに，進路情報の整理をする	⑦	「進路計画３－私の志望先調べ」 ・自分の志望先についての詳細な情報を整理する
1月	⑦	「自分を知る２－長所を伸ばそう」 ・多様な個性を認め合い，自分をさらによく理解する	⑥	「自分を知る３　－私の個性」 ・自己の特色をまとめ，自分の課題を明確にして改善や努力する意欲を持つ	⑧	「進路情報７－受験の心構え」 ・受験の心得を確認することで，進路実現のための最終的な注意と努力の必要性を理解する
2月			⑦	「自分を知る４－進路適性を知る」 ・進路適性とは，興味・関心・願いや希望を見つめることによって知ることができることを理解する	⑨	「進路計画４－将来の生活」 ・自分の進路選択に対して，自分で選んだという責任を自覚するとともに，今後の人生で柔軟に対応して生きていく必要性もあることに気づく
3月	⑧	「進路情報３－職業と上級学校」 ・上級学校と職業への道の関係を理解する	⑧	「自分を知る５－私の将来」 ・職業と上級学校のつながりを振り返り自分の将来について考えることで，見通しを持つ	⑩	「自分を知る８－後輩へ贈る言葉 ・自分の進路実現のために行ってきたことで得たものを　後輩に「贈る言葉」としてまとめる

〈資料編〉

第1学年学級活動進路指導計画

題　材	ね　ら　い	指　導　方　法
①自分を知る1 ー私の夢ー	・幼いころからの夢や希望の変化をたどらせ，自己の成長に気付かせるとともに夢や希望の実現には進路の学習が大切であることを理解させる。	1　幼いころからの夢や希望の変化をまとめさせ，今までの自分はどのように成長してきたのかを自覚させる。 2　希望にあふれるA君とそうでないB君を例として提示し，それぞれの将来について話し合わせ，さらに今後も自分を成長させなければならないことを確認させる。 3　どのように自分を成長させれば夢や希望の実現に向かうのかを考えさせる。
②進路情報1 ー職業調べー	・多くの職業があることを理解させ、職業の世界についての関心を高めさせる。	1　どんな職業があるかを調べ発表させる。 2　職業ごとにその特徴を話し合わせる。 3　自分の好きな職業についてまとめさせる。
③職業観1 ー職場体験学習のためにーその1	・職場体験学習に課題意識をもって前向きに取り組むことができるように目的を理解させる。	1　職場体験学習の意義を考えさせる。 2　どんなことを学びたいかを話し合わせる。 3　体験先希望調査を記入させる。
④職業観2 ー職場体験学習のためにーその2	・職場体験学習にあたっての一般的な注意事項などを理解させる。	1　職場体験にあたっての注意事項を話し合わせる。 2　体験先での挨拶，言葉遣いなどを考えさせる。 3　訪問する時間，場所，質問事項などの打ち合わせをさせる。
⑤職業観3 ー職場体験学習のまとめー	・職場体験での学習内容をまとめることを通して，体験したことを振り返らせる。	1　職場体験で学んだことをまとめさせる。 2　体験先の職場の方にお礼状を書かせる 3　発表用資料を作成させる。 4　報告会に向けての打ち合わせをさせる。
⑥進路情報2 ー職場体験学習報告会ー	・それぞれの職場で学習したことを発表することを通して，幅広く多様な職業の世界があることを理解させる。	1　生徒の司会で報告会を進めさせる。 2　資料を活用してわかりやすく発表させる。 3　聴く側が興味を持つよう工夫させる。 4　発表を聴いて学んだことを発表させる。
⑦自分を知る2 ー長所を伸ばそうー	・多様な個性の認め合いを図り，自分をさらによく理解させる。	1　事前に自分以外のクラス全員あるいは班員の長所を書いてまとめさせる。 その結果をもとに話し合わせ，人には必ず長所があることを確認させる。 2　自分の長所として認められた事柄について感想を書かせる。さらに今後，自分の長所をどのように伸ばしていくかを考えさせる。
⑧進路情報3 ー職業と上級学校ー	・上級学校と職業への道の関係を理解させる。	1　職場体験学習で得た職場への道と上級学校との関係をまとめたものなどを資料として示し，それぞれの職業にどのような上級学校への進学が必要であるかを理解させる。 2　「私の進路」という題で作文を書かせ,自分の将来と進路について検討させる。

第２学年学級活動進路指導計画　〈資料編〉

題　材	ね　ら　い	指　導　方　法
①進路情報４ －上級学校の種類－	・中学卒業後の学校制度を理解させる。	1　上級学校にはどのようなものがあるか，発表させる。 2　上級学校の校種別の特色についてグループで調べさせ，発表させる。 3　自分の進路計画を，学校系統図を利用して検討させる。
②上級学校１ －上級学校訪問のために－その１	・上級学校訪問の目的を理解させ，計画を立てさせる。	1　上級学校訪問の意義について理解させる。 2　訪問可能な近隣の上級学校を挙げ，または，訪問希望のある学校を挙げさせ，グループ編成と学校の割当をする。 3　グループごとに，係・日時・場所の確認等計画を立てさせる。
③上級学校２ －上級学校訪問のために－その２	・各上級学校の下調べをさせることにより，訪問の意欲を高めさせ学習の充実を図る。	1　グループごとに訪問する学校の資料を検討させ合い，各学校の概要をまとめさせ，質問事項を考えさせる。 2　グループごとにその質問事項を発表させ，さらに他のグループから質問事項を募らせる。 3　１・２より再度質問事項を検討させ，決定させる。 4　訪問計画書を提出させる。 5　訪問時の留意事項を話す。
④上級学校３ －上級学校訪問のまとめ－	・上級学校訪問の学習内容のまとめと報告資料作りをさせることにより，進路学習に興味関心を持たせる。	1　グループごとに訪問のまとめをさせ，報告書を作らせる。 2　発表についての方法・役割を検討させる。 （資料にない部分についての情報に留意させる。）
⑤進路情報５ －上級学校訪問報告会－	・上級学校訪問の発表を聴くことにより，自分の進路計画の参考にさせるとともに，進路情報の整理をさせる。	1　各グループの発表を聴かせ，学習のまとめをさせる。 （資料の保管，質疑応答の記録，興味ある部分の把握，上級学校訪問学習の感想のまとめ等） 2　自分の進路計画を見直させる。
⑥自分を知る３ －私の個性－	・自己の特色をまとめさせ，自分の課題を明確にし，改善や充実に努力する意欲を持たせる。	1　保護者や友人からの意見を参考にしながら，自己分析をさせる。 2　自分の性格傾向をとらえ，伸ばしたい所，改めたい所をまとめさせる。 3　自分の希望する進路と自己の特色との関係を考えながら，改善すべき点がないかをまとめさせる。
⑦自分を知る４ －進路適性を知る－	・進路適性とは，興味・関心・願いや希望を見つめることによって知ることができることを理解させる。	1　適性の意味を理解させ，自分の希望する職業についての特色をとらえさせる。 2　「私の個性」でまとめた性格傾向や自分の興味・関心と希望する職業における特色との関係をまとめさせる。 3　自己の進路設計について，自分が何について努力しなければならないのかについて考えさせ，まとめさせる。
⑧自分を知る５ －私の将来－	・職業と上級学校のつながりを振り返り，自分の将来について考えさせ，見通しを持たせる。	1　今までの学習を振り返り，自分の将来の希望を確認させる。 2　希望の職業と上級学校とのつながりを調べさせ希望実現のための計画を立てさせる。

〈資料編〉

第3学年学級活動進路指導計画

題　材	ね　ら　い	指　導　方　法
①自分を知る6 ー夢の実現のためにー	・自分の夢を見つめ直し，3年生としての目標を持つことの大切さを理解させる。	1　幼い頃の自分の夢は何だったか改めて思い返させる。 2　今の自分が将来に対してどんな夢を抱いているか考えさせる。その夢の実現のためにライフプランを立てさせ，発表させる。 3　自分の夢を実現させるためにはこれからどんな目標を立てればよいか考えさせる。
②進路計画1 ー学習計画の改善ー	・これからの学習の方法について考え，計画を立てさせる。	1　中総体後の生活の在り方について話し合わせ，話し合いの内容を発表させる。 2　自分なりの生活スケジュールを作らせ，発表させる。 3　今後の学習についての決意を書かせる。
③職業観4 ー職業講話ー	・人生の先輩である身近な職業人を通して多様な生き方について知らせる。	1　職種の異なる複数の講師の話を聴かせる。 2　講師のお話を通して職業人として生きる姿，生き方に触れさせる。 3　感想を書かせる。
④進路情報6 ー先輩からのアドバイスー	・先輩からのアンケートにより卒業後の生活について具体的な情報を知らせる。	1　グループごとに分担してアンケート結果を整理させ，発表させる。 2　より確かな進路選択をするために大切なこと，方法等について考えさせる。 3　自分の進路選択に対する考え方をもう一度整理させる。
⑤進路計画2 ー私の進路選択ー	・志望先を決めるために考えておくべきことを知り，主体的に進路を選択する意欲と態度を身につけさせる。	1　入試の日程，流れ等について説明を聞き理解させる。 2　公立の推薦，私立の推薦，専願等について理解させる。 3　自分の進路希望を確認させ，どんな選択が可能か検討させる。
⑥自分を知る7 ー進路の悩みー	・進路について悩みや不安をもつのはみんな同じであることを理解させ，積極的に解決しようとする姿勢を持たせる。	1　進路選択における悩みについてのアンケート結果を見て，感想をグループで話し合わせる。 2　代表的な悩みを取り上げ，解決法について，相談者になったつもりで考えさせる。（グループごとのロールプレイなどの方法で） 3　効果的な進路相談の受け方について考えさせ，まとめさせる。
⑦進路計画3 ー私の志望先調べー	・自分の志望先についての詳細な情報を整理させる。	1　自分の志望先についてチェックカード等で確認させる。 2　自分の身の回りにある資料で不足している情報の調べ方を話し合わせ，解決法を考えさせる。
⑧進路情報7 ー受験の心構えー	・受験の心得を確認することで，進路実現のための最終的な注意と努力の必要性を理解させる。	1　筆記試験直前及び当日の準備と行動上の注意点を考えさせ，チェックカードに記入して確認させる。 2　自分の志望先がどんな面接試験を実施するのかを調べさせ，受験するときの注意点を考えさせる。 ペアやグループで練習させる。
⑨進路計画4 ー将来の生活ー	・自分の進路選択に対して，自分で選んだという責任を自覚させるとともに，今後の人生で柔軟に対応して生きていく必要性もあることに気付かせる。	1　“私の進路計画カード”に最終的な選択を記入させ，自分の意志で選択してきた過程を確認させる。 2　自分の進路計画に問題点がないかを考えさせる。 3　第二，第三志望での進路計画を考えさせる。 4　高校中退者の実態などの統計を利用し，今後進路の変更の必要性が生じた時の心構えや態度について考えさせる。
⑩自分を知る8 ー後輩へ贈る言葉ー	・自分の進路実現のために行ってきたことで得たものを後輩に“贈る言葉”としてまとめさせる。	1　今までの進路学習のまとめとして，”後輩へ贈る言葉”という題で作文を書かせる。1，2年生の進路学習で生かしてもらうことを話す。 2　新しい進路に自信と意欲をもって向かっていける気持ちにさせる。

学校教育目標の具現化を目指す校内研修の在り方の探究（第二年次）

―― 校内研修推進のリーダーに対する意識調査と実践事例を通して ――

■要　約

この研究は，２年間の継続研究として行われたものである。第一年次には仙台市立小・中学校の一般教員の校内研修に関する意識及び校内研修の実施状況を調査した。

第二年次は，指導的な立場にある仙台市立小・中学校の校長・教頭・教務主任・研究主任・研究推進委員を対象に調査した。研究の自分化・自校化（主体化）という観点から校内研修の問題と課題を明らかにし，充実した校内研修を推進するための方策と提言をまとめた。

■キーワード

□校内研究　□学校リーダー　□研究の自分化

□研究の自校化　□教員モラール　□複線型研究

目　　次

Ⅰ　主題設定の理由
1　自ら取り組む校内研究 …… 55
2　校内研究におけるリーダーシップ …… 55
3　学校のリーダーの意識調査 …… 55

Ⅱ　研究の基本的な考え方
1　研究の自分化・自校化（主体性）とは …… 56
2　教員のモラールとは …… 56

Ⅲ　調査研究の概要
1　ねらい …… 56
2　研究方法 …… 56
3　調査時期及び調査対象 …… 57
4　調査内容 …… 57

Ⅳ　調査の結果と考察
1　研究主題の自校化のプロセス …… 57
2　研究主題の自分化のプロセス …… 60
3　研究主題の自校化・自分化 …… 61
4　校内研究の評価の観点 …… 65
5　校内研究の組織 …… 67
6　校内研究を進めるうえでの課題 …… 70
7　校内研究におけるリーダーシップ …… 74

Ⅴ　おわりに …… 75

◇　参考文献 …… 76
◇　委嘱研究員 …… 76
◇　資料
資料１　校内研究調査対象人数 …… 76
資料２　「校内研究アンケート」質問内容 …… 76

Ⅰ　主題設定の理由

■1　自ら取り組む校内研究

平成８年度第一年次の調査結果によると，一般に教員の研修に対する意識は高く，研修の目的を「日々の授業の充実」「資質能力の向上」「指導方法の改善」におくことについては積極的に支持していた。教員個人の資質向上を図るうえで，教員自身が研修を積み重ねることが基本であるという認識は浸透していた。

その反面，「学校教育目標の具現化」や「学校で抱えている問題の解決」に対しては，積極的に支持する割合が低く，特にその傾向は若い年代ほど顕著であった。これは学校の課題解決を教員個人の資質の向上とは切り離して考える教員が多く，学校教育目標の具現化というような内容は研修の目的としては関心が低いことを示すものであった。

学校教育は「児童・生徒の実態に即して，教師として何をしなければならないか」を追究することから出発し，教師一人一人の創意・個性あふれる教育活動が集約され，学校として取り組む共通のテーマとしての教育目標に収斂していくものであると考えられる。したがって，学校におけるすべての教育活動は学校教育目標の具現化と切り離しては考えられず，個々の教員の資質や指導技術の向上は，学校の課題解決の不可欠の要件である。教員はその職務の専門性の故に，本人の意志に基づき自律的に自己研修を行うことが求められている。「やらされる校内研究」という受動的な意識を払拭し，「自ら進んで取り組む校内研究」へ転換を図る校内研究の在り方を探究する必要がある。

※　研修には研究と修養の２つの側面があるが，本研究では研究面に焦点化して考察を加えるので「校内研究」または「研究」と表記する。

■2　校内研究におけるリーダーシップ

校内研究は，教員個人の自発的な意志に基づく研究を積極的に支援する機能をもっている。

校内研究は従来，学校全体の研究主題がまず始めにあり，取り組むべき課題がおろされてくる，という共同研究スタイルで行われることが多かったために，校内研究の推進役は，ともすると「教員個々の関心を一つの方向性にまとめあげる」という志向性が強い傾向がみられた。

平成８年度の調査では，校内研究に対する教員個人のモラールが，学校としての集団のモラールに結びついているとは言い難い結果であった。これは，現在多くの学校でとっている共同研究スタイルが，必ずしも学校を活性化させることに有効に機能していないことを示唆している。

研究推進に際して，教員一人一人が各自の問題意識に基づいたテーマを設定し，課題を解決することによって資質を向上させることができれば，研究に対するモラール（意欲）が高まると考えられる。教員個人のモラールが高まれば学校も活性化し，集団のモラール（志気）も高まるであろう。

学校のリーダーのリーダーシップの在り方は，教員のモラールに影響を及ぼすことが報告されている。校内研究において，校長，教頭，教務主任，研究主任，研究推進委員はそれぞれの役職に応じて適切にリーダーシップを発揮し，教員一人一人の研究の取り組みを支援し，モラールを高めることが求められている。

個々の教師の研究意欲を高め，研究テーマをそれぞれの教師のライフステージに位置付けること，個人の力量を高め，充実した教育実践としてまとめあげていくことなど，校内研究のリーダーの役割は極めて大きい。

■3　学校のリーダーの意識調査

仙台市立各小・中学校において，校内研究推進の中心的立場にある校長，教頭，研究主任等を対象として，その指導的立場から校内研究をどのようにとらえているかを調査し，実践事例を通して充実した校内研究の在り方を探究する目的で，本主題を設定した。

Ⅱ　研究の基本的な考え方

■1　研究の自分化・自校化（主体化）とは

(1) 研究の自分化とは

教員一人一人の関心・問題意識に基づき，教科・領域の指導内容，学年の発達段階，学級の実態，個々の子供の能力差等に応じて具体的な目標を設定し，それぞれの課題解決に向けて，各教師が専門性を生かしながら自律的に研究に取り組むことが研究の自分化である。

研究と修養は本来，教員が自律的・自主的に行うべきものであり，このインフォーマルな自主研究は個人の研究意欲に基づいて進められるだけに，研究に対する積極的な取り組みが期待できる。

研究の自分化は，各自の研究課題をそのライフステージに位置づけ，自らの意思で継続して追究し続けるライフワークのテーマ化でもあり，教員としてのアイデンティティ確立の過程でもある。

(2) 研究の自校化（主体化）とは

校内研究の意義は，教職員の研究と修養の基盤となるものであり，自校の児童生徒の実態に即して実践的教育研究を担当することにある。

各学校における研究は，日常の教育活動の場で行われるため，児童生徒の実態や学校のおかれている地域の実態に応じて様々な教育課題をもっており，その解決のために各学校で特色ある試みがなされている。所属教員の個性や能力に応じて自分化された研究・教育活動を集約し，学校としての研究主題を設定し，各学校が独自性を発揮し，個性的な研究に取り組み活力のある学校を目指すことが学校としての研究の自校化（主体化）である。

研究の自校化が，児童生徒の実態に即して学校として「何をしなければならないか」という側面をもつのに対し，研究の自分化は，教員自身の関心に基づき専門性を向上させるために「何をしたいか」である，ということができる。

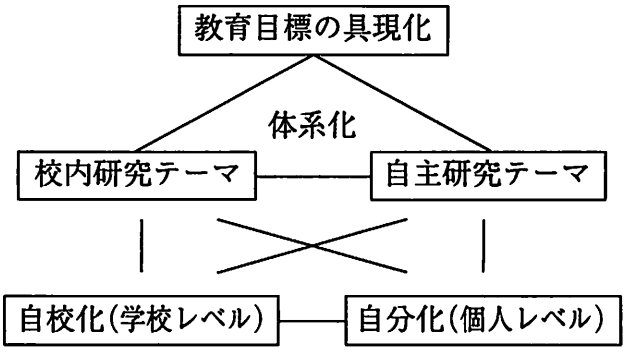


図1　自分化・自校化と校内研究

■2　教員のモラールとは

集団のモラールは，通常集団の「士気」「行動意欲」「やる気」などと訳され，集団の成員が集団の目標や集団の課題解決にあたって一致して示す熱意，もしくは努力の水準を示す概念である。

教員集団のモラールとは「ある学校の教員が，その学校の教員であることに満足と誇りとをもって結束し，教育目標という共通の目的を達成すべく，よりよい教育実践を目指して積極的に努力しようとしている感情ないしは態度」と考えられる。

Ⅲ　調査研究の概要

■1　ねらい

仙台市立小・中学校の校内研究推進のリーダーに対する調査を実施し，校内研究の諸問題解決の在り方を検討する。併せて，校内研究の実践事例を通して，学校教育目標の具現化を目指し，充実した校内研修を推進するための方策を，研究の自分化・自校化の観点から探究する。

■2　研究方法

質問紙法により，校長，教頭，研究主任，研究推進委員が学校のリーダーとしての立場から充実した校内研究を推進するための方策をどのようにとらえているか調査を行い，校内研究の在り方を分析する。

調査結果の考察に当たり，質問のねらい→結果

→考察→提言の順に記述し，問題点と今後の課題を指摘する。提言においては，市内各小・中学校より収集した校内研究計画の分析に基づいて，実践事例を通して具体的な改善策を提言する。

■3　調査時期及び調査対象

平成９年９月上旬に，仙台市立小・中学校の校長，教頭，教務主任，研究主任，研究推進委員（２人）の，各校計６人を対象に，質問紙法による調査を実施した。有効回答者の校種別・役職別・性別の人数は資料１（P75)のとおりである。

■4　調査内容

本研究で用いた質問紙はP75～76に示した「校内研究に関するアンケート」（資料２）である。

Ⅳ　調査の結果と考察

■1　研究主題自校化のプロセス

(1) 質問のねらい

校内研究の主題を決定する際に「重要と考えている項目」「重要と考えて決定した項目」を対比することによって，研究主題決定における主体化（自校化）のプロセスの問題点を分析する。

- 分析のポイント -
①研究主題設定における重要度と判断のずれ
②「学校教育目標の具現化」と「前年度の研究課題」との関連
③研究主題決定のプロセスと主題の自校化

(2) 結果と考察

研究主題の理念と現実のずれ

研究主題設定の重要度（理念）と決定時の現実的な判断を対比して役職別に示したのが図２から図６である。

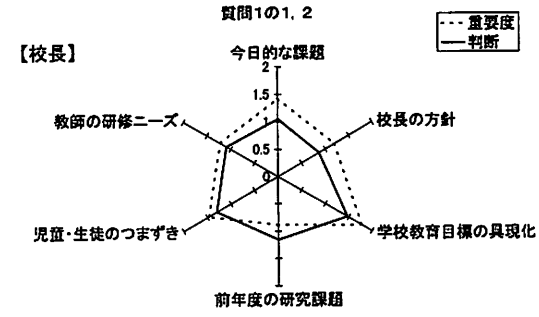


図２　研究主題設定の際の重要度

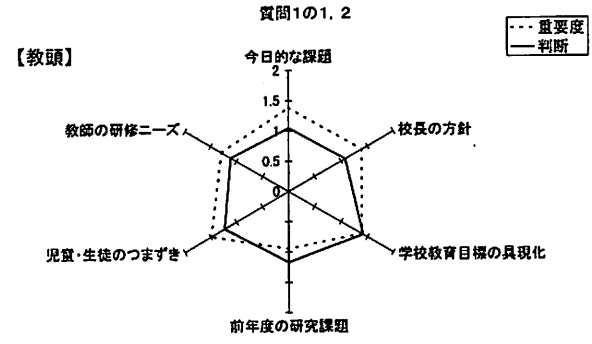


図３　研究主題設定の際の重要度

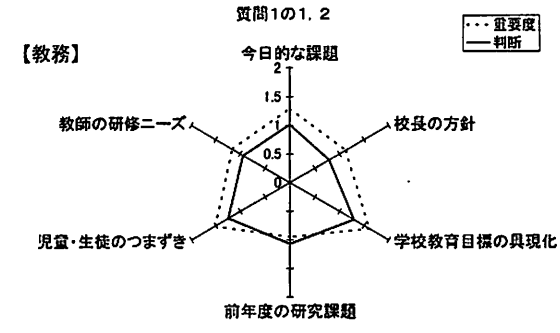


図４　研究主題設定の際の重要度

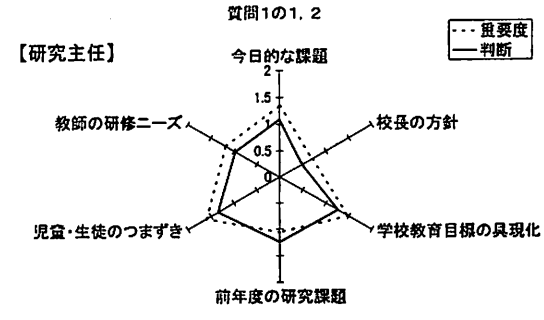


図５　研究主題設定の際の重要度

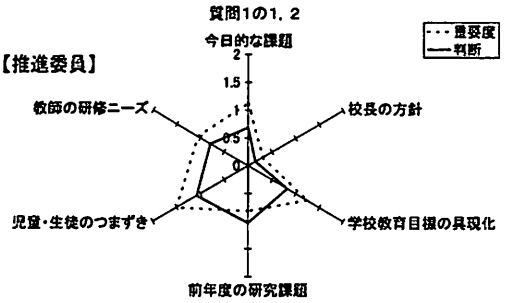


図6　研究主題設定の際の重要度

各項目への回答の特徴を概観すると，主題設定に際して「非常に重要」と考えている割合が高い項目は「学校教育目標の具現化」「児童生徒のつまづき」であった。このうち「目標の具現化」を重視しているのは校長で，78％が「非常に重要」と考えていた。また教務主任（以下教務と記述）も「具現化」を重視している割合が他に比べて高かった。これに対して，教頭・研究主任・研究推進委員（以下推進委員と記述）は「児童生徒のつまづき」を最も重視していた。

次に役職別の回答の傾向をみると，校長・教頭・教務はほぼ同じパターンを示し，研究主任と推進委員が同じような傾向を示していた。推進委員は全体的に各項目とも得点が低く，特に「校長の方針」については研究主題としては「あまり重要とは考えていない」割合が高いことが際だった特徴であった。これは，推進委員が特に校長の方針に無関心であるということではなく，校長の職務の内容が，児童生徒の管理，教職員の管理，学校の運営管理，施設・設備の管理等，きわめて広範囲にわたるために，校長の方針が包括的に示され，具体的な研究主題としてイメージしにくいことも理由の一つとして考えられる。

前述のとおり「前年度の研究課題」だけが重要度が判断を上回り，研究主題設定に際してはあまり重要と考えられていないにもかかわらず，実際の研究主題決定に際しては判断材料として重視されていた。特に研究の推進役と期待されている（質問４－２）研究主任がこの項目を他よりも重視する傾向があった。

これらの結果から，研究主題設定のあるべき姿としては「児童生徒の実態を踏まえた学校教育目標具現化のための校内研究」が意識されていると考えられる。各学校から収集した研究計画及び研究構想図等の分析の結果，学校教育目標から導き出された研究主題が多かったことによっても裏付けられる。

しかし，理念上では重要と考えていない「前年度の研究課題」を，現実には最も重視して研究主題を決定するというずれが生じている。

研究主題を学校の主体性を発揮した独自のものにするためには，児童生徒の実態に即し，教員一人一人が問題意識を明確にしたうえで，個々の問題として解決するか，学校全体として解決を図るか，十分に話し合われた後に研究主題が設定されなければならないと考える。

(3) 提　言

Ｑ；研究主題を自校化する手だてにはどのような実践事例があるか

Ａ；共通の児童像の確立を出発点に

【Ａ小学校の事例】

研究主題の自校化に当たり，「自ら学ぶ子供の育成」というようなスローガン化された研究主題を，児童が実際にどのような行動をとることができたときに目標が達成できたといえるのか，教員間に共通な児童像をつくることからはじめた。具体的な児童像を確立するために，次のような手順で教員間の共通理解を図った。

自校化のプ

自ら学ぶ児童像の抽出

・ブレーンストーミングにより，実際に児童がどんな行動をとったときに自ら学んだことになるのか，目標行動として洗い出した。
・次に，カード化し，ＫＪ法により整理分類した。

ロセス

自ら学ぶ児童像をとらえる観点の構造化

・①に基づき，質問項目を整理し，アンケートを作成し所属教師に実施した。

自ら学ぶ児童を育てる手だての検討①（学年指導計画）

自分化のプロセス

・②のアンケートを集計・分析し，自ら学ぶ児童像を抽出した。

・抽出した児童像を学年の発達，A校の児童の実態を考慮して，学年ごとに配列した。

自ら学ぶ児童を育てる手だての検討②（学級指導計画）

・各学級毎に，一人一人の児童の特性に応じ，自ら学ぶ児童を育てる教師の働きかけを検討した。

Q；研究の自校化にはどのような実践事例があるか

A；複線型の研究のアプローチ

【B小学校の事例】

研究の自校化のために，学校が抱える課題を洗い出し，全教師で追究した。

校舎施設と子供の実態から，次のような課題を教育実践の重点項目として位置づけ，研究主題を設定し自校化に迫った。

① 長期的な視野に立った研究の取り組み

一人一人の子供の個性や能力に合った学習指導法の確立を目指し，さらに新学力観に基づいた個別化・個性化教育の在り方について自校としての考えを明確に持つべく，長期にわたって研究に取り組んだ。これまでに三度の研究主題・副主題の改訂を経たものの，基盤となる個別化個性化教育の在り方については10年間に及ぶ長いスパンの中で探究してきた。その結果，「個別化・個性化教育の在り方を探究する学校」というスクール・アイデンティティが確立した。

このように長期にわたる研究が継続できた理由として，全教員の総意に基づき，自校の課題として必要かつ適切な基盤となるテーマを設定したこと，新規転入の研究同人に対し意欲的に理論構築に向けて提案をし続けたことなどがあげられる。

② 複線型のアプローチ

研究方法は，前述の個別化・個性化教育を目指し教科・領域を絞るのではなく，各教科・領域において，まず子供の実態をとらえた。次に，学習する子供の側に立った学習活動を設定した。その際に，学習進度，到達度，学習スタイル，興味・関心など，一人一人の違いに応じて学習方法・学習形態・学習環境の関連を図った。

教科・領域を全校で統一しないので，話合いはまとまりにくいように考えられるが，子供の側に立ち，「一人一人に応じた指導」「一人一人を生かす授業」という共通の研究テーマに向けて話合いを深めた。教科・領域を統一しないことが結果的に各教師の専門性を生かしながら，一人一人のインフォーマルな研究テーマを校内研究に集約し，研究を進めることができた。このようなアプローチの複線化により，子供の多様な学習活動の保証が可能になったばかりでなく，教師も自己の専門分野での取り組みが可能となり，研究の自分化が図られたと考えられる。

③ 問題点と解決の方策

10年間という長期間にわたる取り組みの過程では，途中転入者との研究についてのレベルの差などの問題点も生じた。解決策として，これまでの研究の取り組みに対する理解を深めるために気軽に授業を見せ合うなど，テーマの自分化に向けて早く取り組みができるように周囲からのサポートを大切にした。

研究推進に当たって，インフォーマルな話合いの機会を十分設けたり，授業研究に際して全員で授業作りに向けて教材の準備や学習環境の設定の支援を行った。また，理論化に向けて，先行研究

に学んだり，積極的に関係機関（市教委，大学等）から講師を招き，指導助言を仰いだ。

■２　研究主題の自分化のプロセス

(1) 質問のねらい

研究の自校化を受けて研究主題が自分化される過程を，各教員の理念と現実や役職による意識の差を基に，現状と問題点を明らかにする。

- 分析のポイント -
①話合いの活性化と研究主題の共通理解
— 研究自校化への自己関与 —

(2) 結果と考察

話合いの活性化とテーマの共通理解

研究の自校化においては，教員一人一人の関心や問題意識に基づき，自校の児童・生徒のあるべき姿が具体的に検討され，共通理解されることが出発点となる。

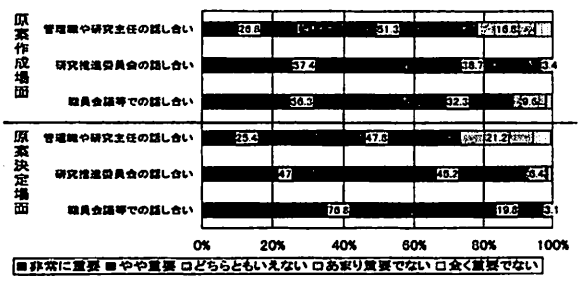


図７　研究主題設定までの手順について

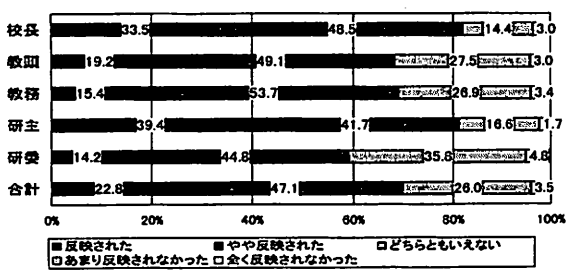


図８　主題決定までに，自分の考えが反映されたか

図７に示した結果から，主題設定の手順では「全員での話合い」を非常に重要であると考えていることが分かる。しかし，図８からこの過程で，自分の意見が反映されたと感じていたのは研究主任と校長であった。これに対して推進委員はその約60％が自分の意見があまり反映されたとは感じていなかった。

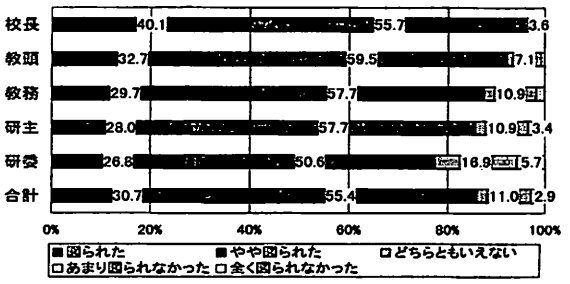


図９　主題設定までに共通理解が図られたか

教員間の共通理解に関しては，図９からどの回答者も，おおむね共通理解が図られたと考えていた。

これらの結果から，全員での話し合いを重視して共通理解を図っているが，その過程で自分の意見が反映されたとは言い難く，必ずしも話し合いに満足していないことが明らかになった。

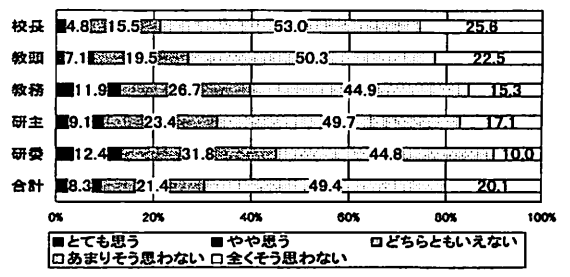


図10　質問７－５ 研究内容が必要なものと異なっていると思うか

次に，不満足の理由について考察する。

質問７からは，校長，教頭，教務，研究主任は研究の内容に対しておおむね妥当性と有用性を感じているが，推進委員はやや否定的であった。特に推進委員の約45％が「研修内容が必要なものと異なる」と考え，約40％が「自己の感じている問題点とテーマの不一致」を感じていた（図10）。平成８年度に調査した一般教員は，推進委員よりさらにその傾向が強く，否定的に感じている割合が「研修内容の必要性」は約80％，「テーマとの不一致」は60％であった。

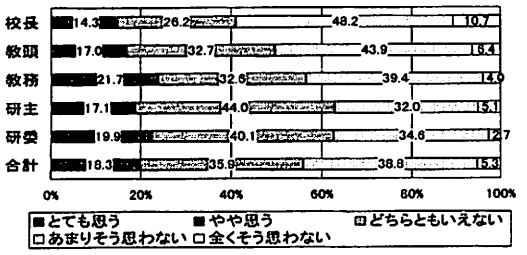


図11　質問７－18 内容の薄い話し合いが多いと感じることがあるか

話合いの内容について，校長，教頭は「内容の薄い話合いが多い」と感じてはいないが，研究主任や推進委員，一般教員の65％前後が内容が薄いと感じていた（図11）。

各学校とも全員で話し合い，個々の教員の関心や問題意識を取り入れ，共通理解を図りながら研究主題を決定しようと努めている姿がうかがえる。しかし，現実には校長，教頭，教務の多くは共通理解が十分にできていると考えているのに対して，研究主任や推進委員の中には自分の意見や考えが十分反映されず，内容の薄い話合いをしていると感じている教員も多かった。これは，研究全体会で共通理解が図られたとしてはいるものの，スローガン化された研究主題の確認にとどまり，具体的な児童生徒像の共通理解が不十分であることを示唆する結果である。個人の研究テーマと校内研究テーマの有機的結合を図るに当たり，解決されなければならない問題である。

(3) 提　言

Ｑ；研究主題を自分化する実践事例にはどのような事例があるか。

Ａ；具体的な生徒像の確認の過程の重視

【Ｃ中学校の事例】

研究主題が全職員の話合いの場で決定され，研究の目指す具体的な生徒像を全職員が共通理解することから研究を始めた。

「学校生活に生きがいを感じ，意欲的に取り組む生徒の育成」を目指し，次の項目に関して具体的な生徒像を教員，生徒，保護者が出し合い，テーマの共通理解を図り，研究の方向を明確化した。

①どんなときに学校生活に生きがいを感じるか。また，その具体的行動は何か。

②どんなときに意欲的になるのか。また，意欲的に取り組む生徒の具体的行動は何か。

学校教育目標が目指す生徒像の共通理解
（具体的生徒像の確認）
○話合いは全体会で全職員で行う。
職員一人一人の考えや意見を出し合う
○具体的な行動と，その項目に当てはまる生徒名を何人かあげ，具体的な生徒像を明確にした。
生徒・保護者の実態調査
○教員と生徒・保護者のえがく生徒像の差から，再度目指す生徒像をとらえ直した。
調査結果を基に全体での話し合い

以上の取り組みの中で，教員一人一人の考えが研究主題に反映し，自分たちの研究であるという自覚が生まれた。テーマの自校化の過程で自己関与が図られることにより，一人一人のモラールも高まった。学校教育目標と研究主題の関連性も図られ，生徒が目指すあるべき姿が明確になった。

この一連の過程を通して，テーマについての共通理解が具体化されて深まり，研究の目標，仮説，評価項目がより分かりやすいものとなり，テーマの自分化の下地になった。

■３　研究計画の自校化・自分化

(1) 質問のねらい

校内研究計画を実践に移す際に重要と考えていること（重要度）と，研究実践の過程で計画がどの程度実現したかの認識（実現度）とを対比することにより，研究実践上の問題点を明らかにする。

分析のポイント

①研究計画実践上重要と考えることと，実現の度合いのずれ

②研究の自校化（研究計画立案）から自分化（研究実践）の過程における問題点

(2) 結果と考察

授業実践を重視した研究計画

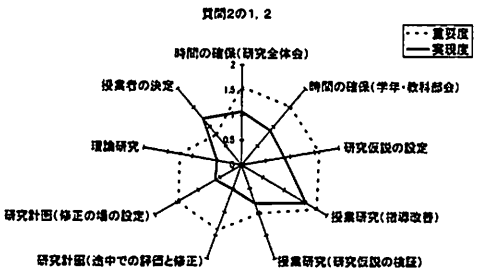


図12　研究実践の際の重要度（校長の回答）

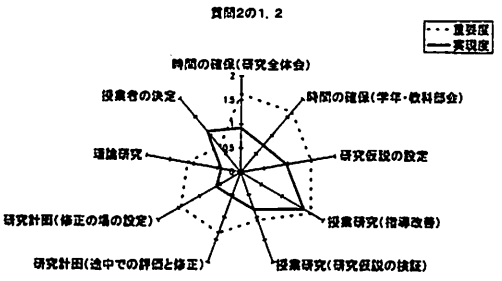


図13　研究実践の際の重要度（教頭の回答）

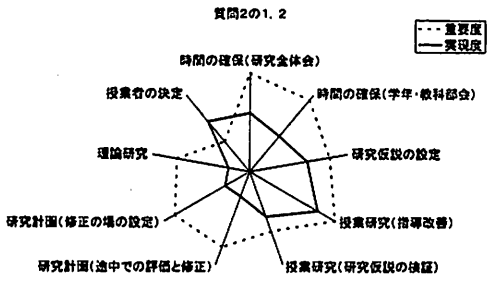


図14　研究実践の際の重要度（教務の回答）

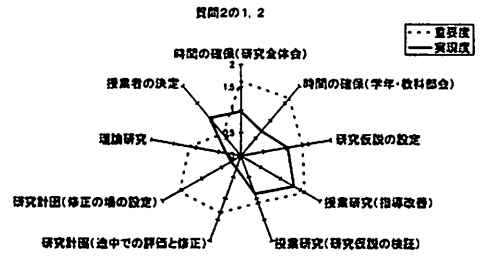


図15　研究実践の際の重要度（研究主任の回答）

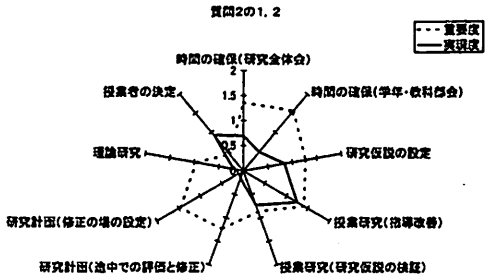


図16　研究実践の際の重要度（推進委員の回答）

図12～図16により各項目への回答を概観すると，研究計画を実践に移す際に回答者が重視していたのは「時間の確保」「学年教科部会」「研究計画の柔軟な修正」「授業研究」であった。

このうち，特に重視されていた「授業研究」では「指導の改善としての授業研究」を非常に重視し，「研究仮説の検証」については，どの役職も指導の改善ほどは重視していなかった。

「時間の確保」「学年教科部会」は重要度に比べると実現度が低下し，役職の違いで考え方に差があった。推進委員を中心に，研究推進の中心的な場である学年・教科部会の設定に必ずしも満足していなかった。

「研究計画の柔軟な修正」は重要性を感じていながら，実現度を明確に否定する意見が多かった。研究計画を柔軟に考え，途中で評価しながら話し合いによって修正していく必要性を感じながらもなかなか実現しない現状がうかがえた。

「授業者の決定」は研究計画立案上は重視されていなかったが，研究実践上は上記の項目に対して唯一実現度が重要度を上まわり，肯定的に評価する回答者が多かった。

平成8年度の調査結果から，一般教員の多くが「日々の授業の充実」「指導法の改善」を校内研究の目的として重視し，個人研究も授業を中心に行われているという実態が明らかになっている。今回の調査から，校内研究のリーダーもまた指導法の改善のための授業研究を重視し，授業実践を通して校内の問題点の解決の方策を探ろうとする指向性が強いことが分かった。

教師の資質を高め，授業を改善し，児童生徒の変容を図ることは校内研究の基本である。校内研究の取り組みの結果，子供が変わり教員自身もこれまでと変わったと感じる授業が実現すれば，教師自身の校内研究に対する意識も変わるであろう。校内研究の原点に帰って授業の充実を中心に据え，教員個々のモラールを高めていく方策も検討される必要があると考える。

理論研究推進の必要性～外部機関との連携

各学校の研究計画を分析すると，多くの学校が仮説検証型の研究スタイルを取っていた。しかし，上述の結果から，実際には仮説検証型の授業研究よりは指導法の改善のための授業研究を重視する傾向が顕著であった。さらに研究仮説を支えるべき理論研究は，回答者にとって重要度が低いうえに実現度も全項目中最低であり，研究計画上も実践上も重要視されていなかった（図13～16）。

以上の結果から，仮説検証型の研究スタイルが浸透している割には，仮説検証型の研究授業や理論研究については実現されたとは言い難い状況であった。

なお，研究推進上「研究に必要な予算や指導者の確保」はあまり重視されていない（質問５）が，理論研究を進める上で，先行研究の文献収集上予算措置と理論学習上指導者の確保は重要な要件であろう。校内研究をサポートするための教育センター等外部の機関との連携の在り方が検討されなければならない。

(3) 提　言

Q；授業実践を中心に据えた自校化・自分化の実践事例にはどのようなものがあるか

A；共同研究から個人研究へ

【D小学校の事例】

D小学校では，二年にわたる取り組みで校内研究を「共同研究」から「個人研究」へと転換し，教師一人一人の資質向上を図った。

一年次

〈個人研究への導入〉

・年度当初に，校長が全教員に対し，質の高い教育は教師も児童もともに成長する中から生まれることを話した。

〈教師の実態の把握〉

・校内研究に対する教師の意識の有様（研究に対する自立の度合い等）を把握した。

〈啓発期間〉

・教師一人一人が絶えず成長しなければ児童の成長によい影響を与え続けることができないことを，様々な機会をとらえて全教員で具体的に確認し合った。

〈全体構想〉

・教師一人一人の総論賛成，各論反対の信条を推し量り，研究についての考え方，進め方，一年間の研究の流れと見通しを説明する機会をもった。

〈共同研究方式の見直し〉

・教師の研究面の自立のために従来の共同研究方式の見直しについて理解を深めた。

〈演習〉

・教師の不安を払拭するため，さらに次年度からスムーズに新方式に移行できるように，具体的な事例を挙げて説明しながら演習を実施した。

二年次

〈研究主題の設定〉

・学校の共通の研究主題を決めた後に，副題は各教師が決定した。

〈個人研究の原則〉

・グループ研究はともすると「他人に頼り，頼られる関係」になりがちになる。研究の責任はすべて自分にあることの意識をもたせ，研究の自分化，自校化を図った。

〈研究授業の主体化〉

・教員が各自研究主題，副題に対するイメージをえがき，5月末までに個人ごとに取り組みたい研究教科・領域，公開授業単元を決定した。

〈公開授業の原則〉

・教職にいる間，力量を高め続けることが教師としての良心であることを確認した。

・担任，ＴＴ教師全員が公開授業をすることという一定の枠を設定した。

・指導の積み重ねが見られるように，公開授業は11月以降とし，授業日は授業者が決定した。

〈研究授業の進め方〉

・公開授業場面を想定し，そこにたどり着くまでの行程を思いえがき，各自授業公開日までの研究の進め方の日程を月ごとに立案した。

・１か月ごとに指導目標を設定し，到達度を見極めていく。

・長期的な観点と，短期的な指導内容の観点を洗い出す。

〈研究推進上の相談〉

・２か月に１回程度自分の研究の進み方を報告する全体会をもつ。

・公開授業案と授業の進め方について，個人ごとに研究主任，推進委員が相談に応じ，進むべき方向性を確認する。

・研究主任，推進委員が手に負えない部分は校長，教頭が相談に応じる。

〈公開授業〉

・事前及び事後の話合いは設定しないが，誰とでも相談をしてもいいこと。

・参観希望者は誰でも授業を参観できること。

・子供が変わり，教員自身もこれまでと変わったと感じる授業の実現に努力する。

〈新たな課題〉

・授業を終えて自分で感じるところが次の研究課題になる。

・発表のために資料をまとめる過程が教員の力量を伸ばすのに役立つことから，２～３年後には個人ごとに教育センター主催の教育課題研究発表会等において研究発表ができるように準備する。

このような取り組みで，教員一人一人が明確な研究課題を自分で見つけられるようになるにともない，研究方法も自ら考え，自分一人で研究ができるようになった。このような教師集団になれば個々のモラールも高まり，一人一人が生きて働く校内共同研究が可能になるであろう。

Ｑ；研究の自校化の過程で授業研究を単なる実践にしないための手だてはどうあるべきか。

Ａ；授業仮説の設定

【Ｅ小学校の事例】

仮説を立てて指導の内容や方法を改善する具体的な手だてを工夫し，実践を通して検証するのが実践的研究である。仮説は研究の内容・方法を明確にし，手だてを具体化するのに役立つ。しかし，実際には，仮説そのものが具体性を欠いているために検証が困難な場合が少なくない。改善策の一つとして，Ｅ校では「授業仮説」を積極的に指導案の中に盛り込む取り組みが行われている。

研究主題につながる全体仮説はどうしても抽象的な表現になりがちである。それを具体化するために，１時間の授業の中にも明確に検証場面を設け，授業仮説に基づいて手だての有効性を検討している。

授業仮説を設けるという作業を通して，研究仮説が自校化のプロセスの中で，より具体的なものとして自分化されていくことができる。また，授業参観者にとっても授業参観の視点が明確になり，手だての有効性に焦点化された話合いができた。

このように，研究に具体性を持たせ焦点化するということは結局時間の効率的利用につながり，時間確保の問題を解決する糸口にもつながった。

Q；負担にならない理論研究の進め方にはどんな方法があるか。

A；先行研究の効果的活用

【F小学校の事例】

F小学校では先行研究を上手に活用して，次のような取り組みをしている。

算数の研究に取り組んだ初年度に，研究主任がリーダーシップを発揮して，参考文献を1冊選択し，全職員で購入して1年間手元に置いて研究にとり組んだ。本の読み合わせをしたり，そこで紹介されている理論を基礎にして授業を構築していくことを試みた。1冊の本を共有するという簡単なことであるが，実践を通して理論を学ぶうえで有効な手段であった。

将来的には，当教育センターにおいて各校の研究内容がデータベース化される予定であるので積極的に活用が期待される。

Q；教育センターは，研究の自校化・自分化をどのようにサポートするのか。

A；仙台市教育センターの支援

①研究の自校化のサポート

○要請研修

・校内研修をサポートするために，学校からの要請に応じて教育センターから学校へ講師（指導主事）を派遣しての研修

○教育センターの施設・設備の提供

・教育センターへの移動研修

情報教育研修室，理科研修室，音楽研修室，美術研修室，技術研修室，家庭科研修室を利用した研修

○教育講演会の実施

・平成9年度は3回実施

○大学・学会等の他機関の研修事業の紹介

○各校の研究実践のデータベース化

②研究の自分化へのサポート

○教科領域の研修の機会の提供

・平成9年度基本研修（13研修会）

教職経験に応じた研修会

職能に応じた研修会

・平成9年度専門研修（63研修会）

教科・領域別研修会

○長期研修員の募集

・教育課程研究コース

・情報教育研究コース

・教育相談研究コース

・特殊教育研究コース

○教育研究グループ奨励事業

・18研究グループに対し補助金を交付

○研究成果の発表の機会の提供

・教育課題研究発表会の開催

（平成9年度第23回教育課題研究発表会で72件の研究発表）

○図書資料室の開放・図書資料の貸出

○理論・方法論等の相談・支援

■4　校内研究の評価の観点

(1) 質問のねらい

校内研究について，どのような観点を重視して評価しようと考えているかを明らかにする。

分析のポイント

①学校教育目標の具現化と校内研究の評価

(2) 結果と考察

自校化・自分化へ向けた評価の改善

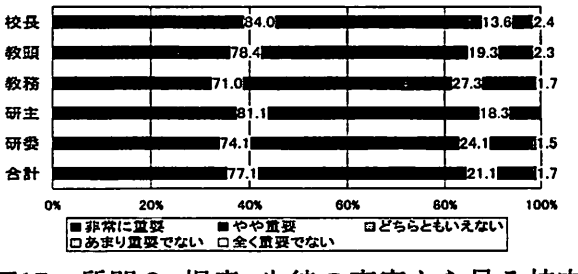


図17　質問3　児童・生徒の変容から見る校内研究の評価

どの回答者も校内研究の評価の観点として，「児童・生徒の変容」（図17）を最も重要と考えている。また，「教師の協力体制」（図19）についても重要視する傾向にある。

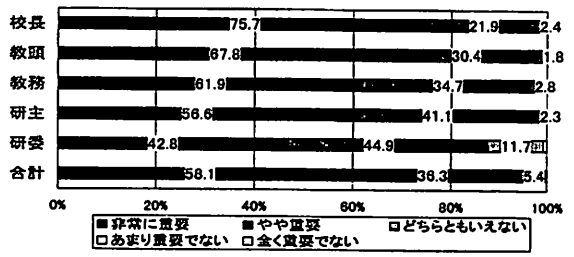


図18　質問3　教師の研究意欲から見た校内研究の評価

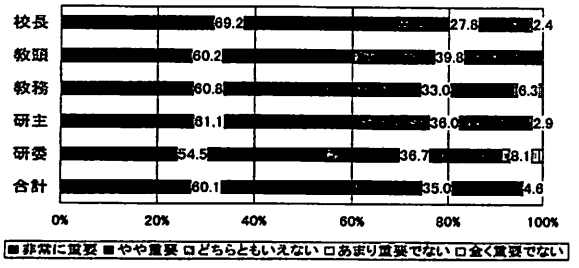


図19　質問3　教師の協力体制から見た校内研究の評価

一方「教師の研究意欲」（図18）の項目では，校長は「非常に重要」とする回答が75％とかなり高かったが，教頭・教務主任・研究主任とその割合が低くなり，推進委員においては「やや重要」「どちらともいえない」が増加する。校長・教頭と教室で直接児童・生徒を指導する立場にある推進委員との間には，多少意識の差があると考えられる。

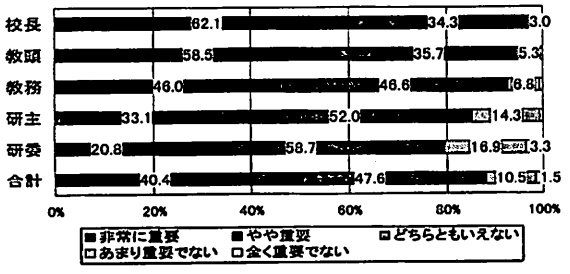


図20　質問3　学校目標の達成から見た校内研究の評価

「学校目標の達成」（図20）は，校長・教頭が重視しているのに対して，教務主任・研究主任・推進委員の順に「非常に重要」が減少し「やや重要」「どちらともいえない」が増加する。これは，質問1－1において，研究主題決定の場面では比較的大きなウェイトをおいていた「学校教育目標の具現化」（図2～6）も，研究の評価の観点としてはそれほど重視されなくなっている。本来，学校教育目標の具現化を目指し，育てたい児童・生徒像を明確にして研究を進めていくことが望ましい校内研究の在り方であると考えられる。上記質問1の結果と併せて考えると，研究が進むにつれて，教育目標の具現化という観点が，次第に指導法の改善という目の前の児童・生徒への対応へと変化していく様子がうかがえた。研究主題と研究評価の一義的な対応関係があいまいになっていることを示唆する結果である。

平成8年度の調査結果で，年度末学校評価による校内研究の評価・改善が着実に行われているほど研究に対するモラールが高いことが明らかにされている。きめ細かな評価による研究計画の修正の過程において個人の考えが全校の計画に反映され，モラールが高まると考えられる。

しかし，図12～16の結果より「研究計画の柔軟な修正」についての回答者の評価は低く，「研究途中での評価による計画の修正」「研究計画修正のための話し合いの場の設定」は不十分であると考えられていた。

きめ細かな評価による研究計画の柔軟な修正は，研究の自校化・自分化を左右する重要なポイントであると考えられる。

(3) 提　言

Q；研究の自校化・自分化を支える評価の在り方はどうあればよいか。

A；きめ細かな評価と計画の柔軟な修正

①明確で具体的な目標の提示

・研究が目指す変容すべき児童生徒像を明確に目標として示す。

・児童生徒を変容させる具体的手だてを検討し，実践する。（仮説の重要性）
・児童生徒の変容が目標としたレベルに到達したか評価する。

②研究の形成的評価の導入
・単元や授業レベルでの評価，授業研究での討議などの短期的な評価を意図的に繰り返し，柔軟に計画を修正する。

③教師教育の観点の明確化
・児童生徒の行動の変容を支える意図的・計画的な教師の教授活動を評価する。
・教師の力量形成に資する効果的な教師訓練へ焦点化する。

■5　校内研究の組織

(1) 質問のねらい

校内研究を推進する組織，担当者の重要性並びに研究組織の実態や機能に対する学校のリーダーの意識を明らかにする。

分析のポイント
①校内研究推進で重要な組織，担当者
②研究組織の実態
③意見反映や能力活用など研究組織の機能

(2) 調査の結果と考察

研究主任と研究推進委員会への期待

①　校内研究を推進する組織の重要度

図21に示した「各組織ごとの重要度」からは，

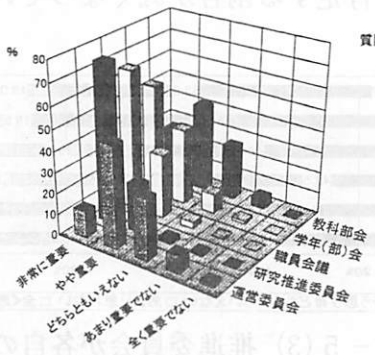


図21　校内研究組織の重要度

研究推進委員会に対して回答者全体の76％が「非常に重要である」と回答しており，校内研究推進の中心的に研究推進委員会を考えていた。しかし，推進委員は委員会の中心的構成メンバーであるにもかかわらず，推進委員会をかなり低い重要度でとらえる回答をしていた。

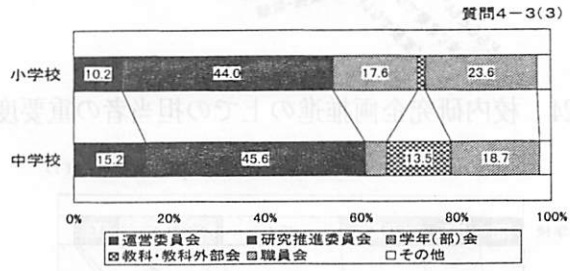


図22　校内研究について協議する組織

校内研究について協議する組織は，小・中学校ともに約45％が研究推進委員会であり（図22），校内研究の最終的に合意する組織としては，小・中学校とも回答者の約90％が職員会議及び研究全体会を挙げている（図23）。

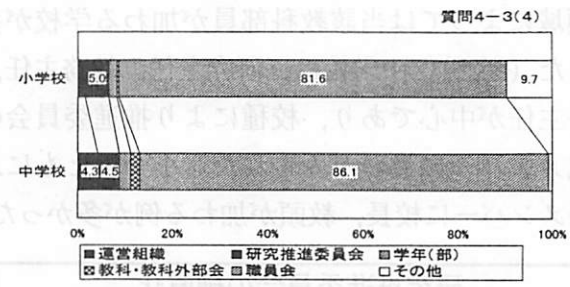


図23　校内研究について合意する組織

②　校内研究を企画推進する担当者の重要度

全回答者の90％が，研究主任を研究推進の担当者として「非常に重要である」と回答している（図24）。研究主任は，まさに研究推進の中核的な存在としてとらえられている。

研究主任に次いで，重要と考えられていたのは推進委員で，「非常に重要である」との回答の割合は70％であった。しかし，推進委員が重要である，と考えている推進委員は，①の結果と同様に最も低い回答率で，推進委員の重要度に対する認識が，ほかの役職とは異なることが分かった。

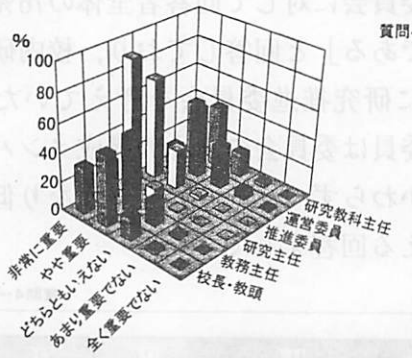


図24　校内研究企画推進の上での担当者の重要度

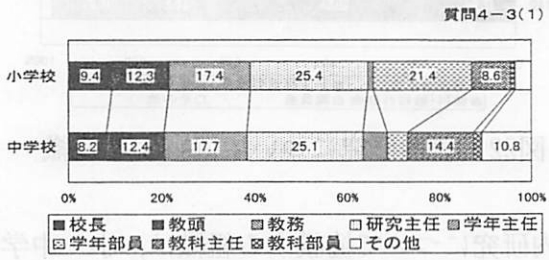


図25　研究推進委員会の構成メンバー

研究推進委員会の構成メンバーをみると，小学校は研究主任，学年部員が中心となり，さらに研究領域によっては当該教科部員が加わる学校が多かった（図25）。中学校は，研究主任，教務主任，教科主任が中心であり，校種により推進委員会の構成メンバーに違いがみられた。小・中ともに以上のメンバーに校長，教頭が加わる例が多かった。

研究推進委員会の硬直化

③　研究組織における機能

研究計画の原案作成の中心的メンバーは，小・中学校ともに研究主任が中心になっている。それ以外のメンバーは，小・中学校とも学年部員，教科主任が多いことから，推進委員も研究計画の原案作成にかかわっていることが分かった。

推進委員会の開催回数は，研究指定校など特例もあるが，小学校は月１回程度，中学校は２か月に１回程度，定期的に開催されていた（図26）。

図27の「校内研究に個人の意見が反映されているか」の問いや，図28の「研究内容が教員間で共通理解されていると思うか」との問いでは，校

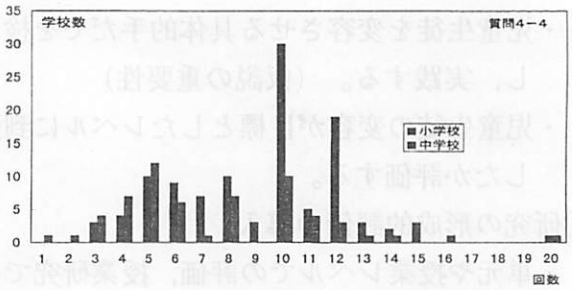


図26　研究推進委員会の開催予定回数

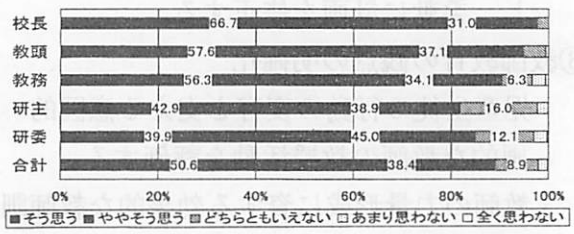


図27　質問４－５(1) 校内研究に個人の意見が反映されるか

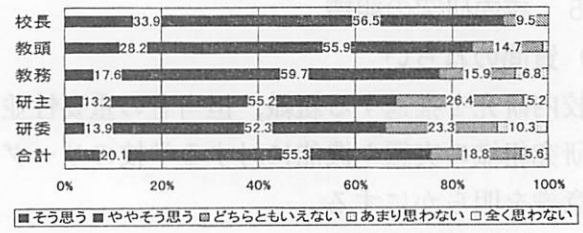


図28　質問４－５(2) 校内研究の内容が共通理解されているか

長，教頭，教務主任，研究主任，研究推進委員の順に，共通理解されていると思う度合いが低くなっている。

図29の「個人の能力を生かす研究推進委員会の運営がなされていると思うか」や図30の「研究推進委員会が十分話合いができる場になっていると思うか」の問いに対して，研究主任，研究推進委員の積極的に肯定する割合が低くなっている。

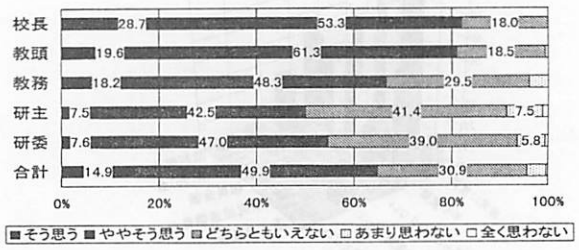


図29　質問４－５(3) 推進委員会が各自の能力を生かせるように機能しているか

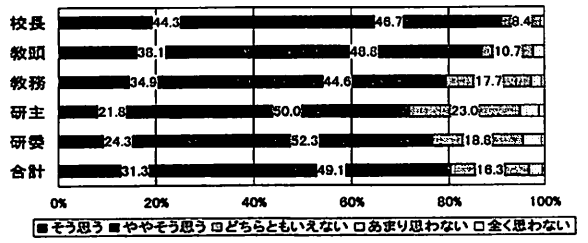


図30　質問４－５(4) 研究推進委員会が話し合いのできる場になっているか

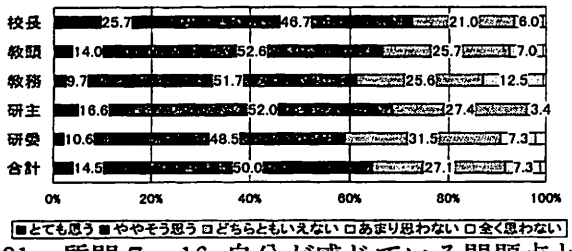


図31　質問７－16 自分が感じている問題点とテーマがあっているか

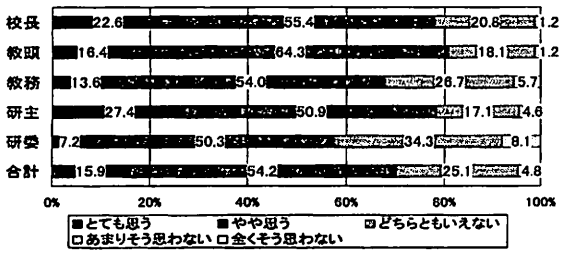


図32　質問７－６ 校内研修に進んで取り組んでいるか

以上の結果から考えると，校内研究の原案作成や協議の場と考えられ，定期的に開催されている研究推進委員会に，推進委員が参加してはいる。しかし，研究推進の中核的存在として，委員としての意見や能力を，研究に積極的に反映させるなど，研究に十分自己関与させているとはいえない状況であった。図31及び図32の結果から，「委員自身が感じる問題点と研究テーマにずれがあるために，校内研究に進んで取り組めない」と感じている推進委員も存在し，そのために研究主任にかなり依存した研究推進委員会の運営の現状がうかがえた。

(3) 提　言

Q；研究推進委員会を活性化させるための手だてはどうあればよいか。

A；研究組織の複線化

平成８年度の調査結果より，教員一人一人の研修に対するモラールは高いが，必ずしも学校全体のモラールの高まりになり得ていないことが分かった。研究に対する個人レベルの目的意識の高さを，学校としてどう生かすかが課題であった。

校内研究が深まらない要因としては，研究主題が理念化して具体性に欠けるなどの理由が考えられるが，研究組織として，一人一人の役割が明確に位置付けられていないために，校内研究に対する教員の自己関与が図られず，個々のモラールが高まらないこともその一因と考えられる。

校内研究は，教員の資質向上を図るものであるとともに，学校の実態に即した課題と解決するという二面性がある。したがって，その両面を満足させることができたときに，教員の意欲も高まるであろう。

校内研究を活性化させるためには，複線型の研究組織が考えられる。組織の複線型により，研究分野，内容，方法など教員の多様な研修ニーズを集約し，研究への関心，問題意識などから自分化し，校内研究主題へ多様にアプローチすることを支援できると考えられるからである。研究の自校化を進める複線型の研究の組織の中に研究推進委員会を位置付けることにより，研究推進のために「何をしなければならないか（自校化)」とともに「何ができるか（自分化)」が明確になり，全体と個人の研究ニーズの一致が図られ，研究に対する一人一人のモラールが高まることが期待できる。

【Ｇ中学校の事例】

「学校と家庭，地域，関係諸機関との連携による有機的な生徒指導の在り方」を研究主題に掲げ，以下のような研究推進委員会の位置付けで取り組んだ。

・「登校拒否部会」「いじめ対策部会」「生徒会部会」「教育相談部会」など小集団にブロック化し，そのチーフが研究推進委員会の構成メン

バーとなる。

・研究推進委員会の前に各部会のチーフが連携，調整を行い，研究推進委員会での話合いの焦点化を図る。

・推進委員が各部会からみた研究の事務面や運営面を評価し，校内研究のチェック機能を果たす。

このような取り組みから，小集団での話合いが深まり，推進委員の専門性や問題意識などを生かすことができた。その結果，研究推進委員会だけでなく，研究全体会でも積極的に推進委員の意見を反映させることができるようになった。また，このように研究を進めるなかで，個人的な課題の発見や専門分野の指導力の向上など，研究の自分化を促進させることができた。さらに，研究がどのように進んでいるかという評価にもかかわることにより，校内研究推進の中心的存在としての自覚が促がされた。以上の取り組みは，推進委員を校内研究のリーダーとして育成する上でも効果が大きかった。

■6　校内研究を進める上での課題

(1) 質問のねらい

研究推進上重要と考えることや，重要と考え実践されていることを把握する。併せて，研究の内容・運営についての課題を明らかにする。

分析のポイント

①研究推進上重要と考えられ，実践されていること

②研究推進上，不十分な取り組みや課題

(2) 調査結果と考察

授業研究を中心とする校内研究

① 重要と考えられ実践されていること

「研究を進めていく上で重要と考えていること」ではどの回答者も共通して「研究の手順や内容の方向付け」「教員の意識高揚」「研究計画の立案」「研究に必要な時間や場所の確保」を挙げていた

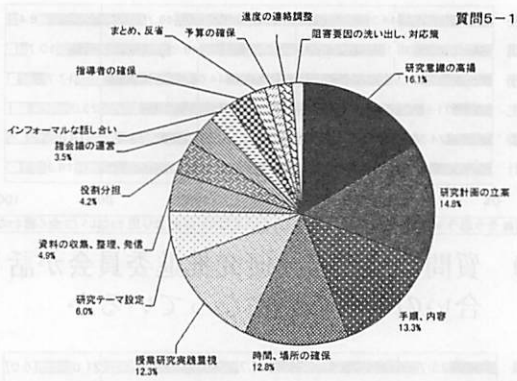


図33　研究を進めていく上で重要と考えること

(図33)。

役職ごとの特徴的な項目として，校長，教頭は「研究意識の高揚」，研究主任は「研究計画の立案」「研究の手順や内容についての方向付け」などを重視する傾向がみられた。

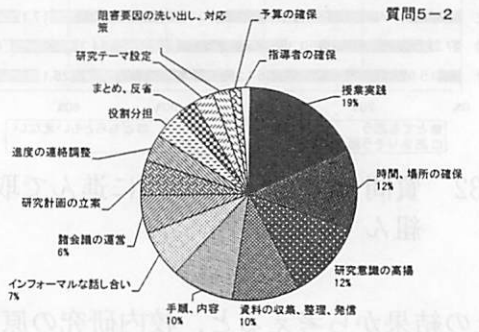


図34　日頃重要だと考えていること

「研究を進めていく上で日頃重要だと考え，取り組んでいること」に関して，最も多かったのは「授業研究・授業実践の重視」(図34)で，「研究を進める上で十分行われていること」でも「授業研究・授業実践」が挙げられていた(図35)。

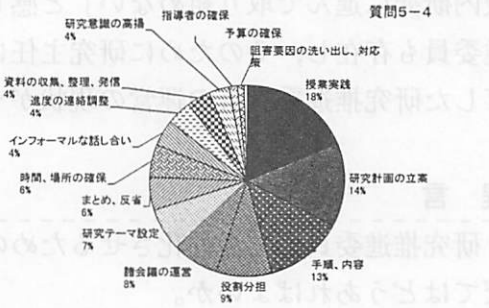


図35　研究を進める上で十分に行われていること

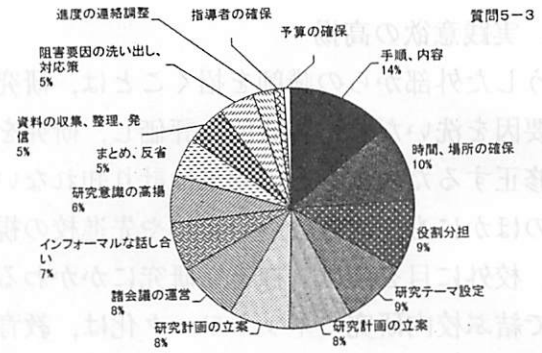


図36　教職員の意見を採り入れるのに重要だと考えること

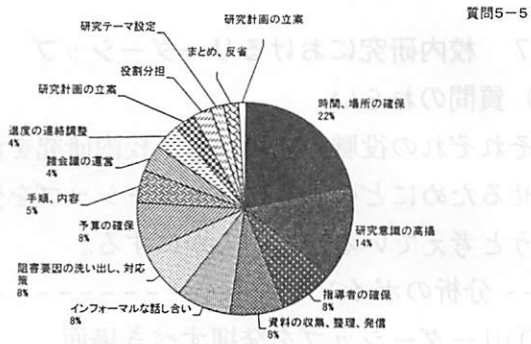


図37　推進上課題となること

これは，一般教員を対象にした昨年の調査と同じ傾向であった。このことから，研究の推進役である学校のリーダーも一般教員も，日頃重要と考えて取り組んでいることに差がないことが分かった。

図36の「職員の意見を採り入れるのに重要と考えていること」では，図34と同様に，「研究の手順や内容の方向付け」「研究に必要な時間や場所の確保」「教員の役割分担」などを挙げていた。

各学校とも，研究の場所や時間の確保，役割分担などに配慮して，研究意識の高揚に努めながら授業研究を計画的に進めていることを示す結果であった。

研究の意識を低下させる教育環境の不備

② 不十分な取り組みや課題

「研究を進めていく上で重要と考えること」での回答率が低く，研究を進めていく上であまり重要と考えられず，取組みもされていないのが「研究に必要な予算の確保」「研究の阻害要因の洗いだしと対応策の樹立」「指導者の確保」であった（図34）。

「研究を進める上で課題になっていること」でも「場所や時間の確保」「意識高揚」に次いで「指導者の確保」「研究の阻害要因の洗い出しと対応策の樹立」があげられていた（図37）。「資料の収集や整理，発信」をあげる回答者も多かった。「研究に必要な時間や場所が不足し，研究推進をリードする指導者が少ないため，研究の阻害要因の洗いだしや対応策の樹立や資料の整備が十分にできず，そのために研究意識の高揚には努めているが，成果が上がっていない」と考えている回答者が多いことが分かる。

この結果から，年間計画にしたがって授業研究が行われてはいるが，場所や時間の設定，資料の整備などの物的環境や指導者などの人的環境が十分に整わないため，研究の評価や掘り下げが不十分であり，柔軟な研究の自校化も進まず，研究へのモラールも高まっていないという現状がうかがえた。

(3) 提　言

Q；校内研究を深め，研究意識を高揚させるための教育環境の整備はどうあればよいか。

A；校内研究のネットワーク化

校内研究の最大の障害は，時間不足といわれるが，特に年度始めの，校内研究の基礎を構築するための資料の収集や整理は時間がかかり，担当者の負担は大きい。

先行研究などのデータバンクとして，教育センターや図書館の活用が有効である。データベース化によって，利用価値が高まり，その収集はインターネットなどにより，飛躍的に効率化した。研究の基礎の構築に必要な調査・資料の収集，研究技法の選定などにおいてその有効な活用が考えられる。

【Ｈ中学校の事例】

研究推進委員会が中心になって研究に必要な資料の収集・整理を次のように分担しながら行っている。

ア．用語の規定概念や基本的な考えを固める資料

イ．研究計画の立案，研究方法の参考にする資料

これらは，研究活動の初期に必要なものである。

ウ．研究活動そのものに関する資料

エ．実態把握に必要な資料

これらは，研究の実践段階で必要なものである。

このように，研究過程で必要な資料の整理をスムーズに行い，必要に応じて発信できる態勢を整えておくことは研究が停滞することなく推進するために必要なことである。

また，調査・資料の収集に当たっても，目的や対象など分類の基本的な視点を以下のように明確にして取り組んでいる。

ア．何のために行うのか　（調査目的）

イ．何を調べるのか　（目標，調査対象）

ウ．何で調べるのか　（用具，内容）

エ．いつ，どこで調べるのか　（時期，場面）

オ．どのように調べるのか　（用具，方法）

カ．誰が行うのか（調査主体，記録者，資料作成者）

指導者など人的教育環境についても，学校や教育委員会，その他の関係機関を活用し，校内研究の充実・深化に生かせることは，先に述べた通りである。

【Ｉ中学校の事例】

生徒指導に関する校内研究に取り組んだＩ中学では，教育関係者だけでなく，精神科医師や少年指導員など諸機関の職員を講師として招き，連携しながら研究に取り組み，以下のような成果を得た。

ア．教育活動の視野の拡大

イ．指導法の改善

ウ．教育活動における人間関係の改善

エ．実践意欲の高揚

こうした外部からの講師を招くことは，研究の阻害要因を洗いだし，客観的に評価し，研究を柔軟に修正するためにもその効果は計り知れない。

このほかにも，研修会への参加や先進校の視察など，校外に目を向け，様々な研究にかかわる点を線で結ぶ校内研究のネットワーク化は，教育環境を整備し，教員のモラールを高めるためにも積極的に活用されるべきであろう。

■７　校内研究におけるリーダーシップ

(1) 質問のねらい

それぞれの役職の立場から，校内研究を活性化させるためにどのようにリーダーシップを発揮しようと考えているかを明らかにする。

分析のポイント

①リーダーシップを発揮すべき場面

②リーダーシップの在り方

(2) 調査結果と考察

校長，教頭の積極的なリーダーシップ

「校内研究において，リーダーシップをどの場面で発揮すべきか」の問いに対して，校長，教頭は「研究意識の高揚」，教務主任や研究主任，研究推進委員は「研究の手順や内容の方向付け」を最も重視している（図38）。

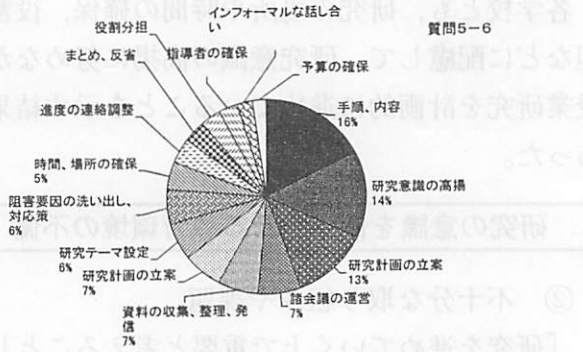


図38　リーダーシップをどの場面で発揮すべきか

次に「リーダーシップをどのように発揮すべきか」については「考えを明確に述べ方向性を示す」がどの役職も多かった（図39）。

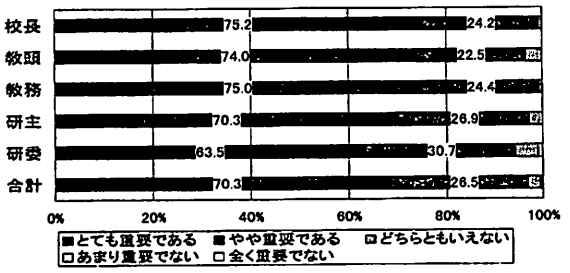


図39　質問6(2) いろいろな意見が出たとき，考えを明確に述べ，方向性を示すことについて

「授業研究において必要なときには助言する」の項目や（図40），「研究計画の進み方について助言する」の項目では（図41），校長，教頭の回答率が高かった。

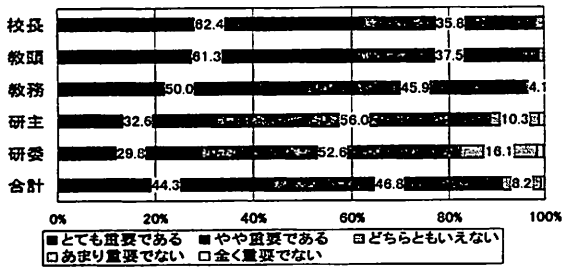


図40　質問6(4) 授業研究において必要な時には助言をすることについて

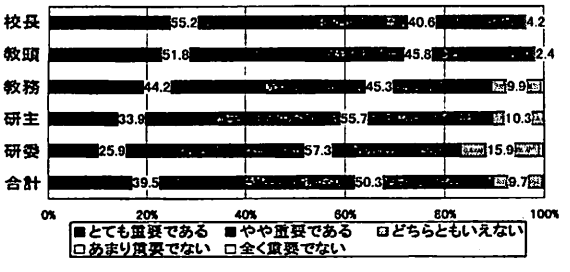


図41　質問6(6) 校内研究の進み方について助言することについて

「研究の悩みごとの相談にのる」の回答率は教頭が最も高く，教務主任，校長が続く（図42）。

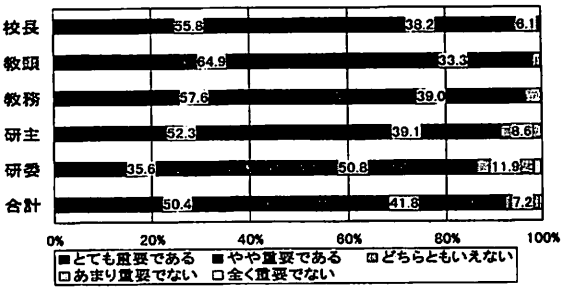


図42　質問6(5) 先生方の研究上の悩み事の相談にのる

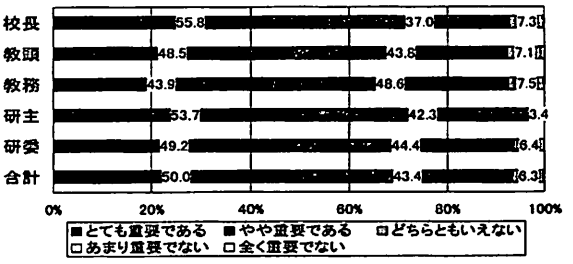


図43　質問6(1) 話し合いで一人一人の意見を大切にすることについて

「話合いで意見を大切にする」では，どの役職も肯定的に回答しているが（図43）「先生の教育観や教育方針を尊重する」では「やや重要」といずれもトーンダウンした回答であった（図44）。

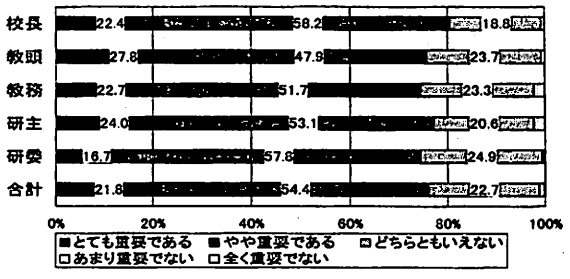


図44　質問6(3) 先生方の教育観や教育方針を尊重することについて

この結果から，校長，教頭は研究の方向付けや授業研究で，積極的にリーダーシップを発揮し，必要に応じて研究主任や研究推進委員の助言，相談にのり，支えている姿がうかがえる。

いずれの立場からも話合いで意見を大切にし，研究の方向性を示すときなど，必要があれば自分の考えを明確に述べているが，教員一人一人の考えを尊重し，十分引き出すために，さらに積極的にリーダーシップを発揮することが望まれる。

(3) 提　言

Q；教員のモラールを高めるリーダーシップの発揮はどうあるべきか。

A；PM型のリーダーシップの発揮を

校長が変わると学校の雰囲気が変わるといわれる。これは校長をはじめとする学校のリーダーのリーダーシップが教員集団の性格，雰囲気を決定づける主たる要因の一つであることを示している。

リーダーシップ行動は，目的遂行機能（P機能）と集団維持機能（M機能）に分類することができる。

本調査では，質問6の項目のうち(2)(4)(6)がP機能，(1)(3)(5)がM機能のリーダーシップ行動に相当する。質問6の調査結果では，校長，教頭は研究推進上必要に応じて指導助言する立場から，P型リーダーシップ志向が比較的強く，研究主任は連絡調整役としての立場上，P機能よりはM機能を重視する傾向があった。一方，推進委員はいずれの機能も弱い傾向にあった。

リーダーシップP機能，M機能がともに強いPM型の校長・教頭のもとでは，所属教員のモラールが高まり，P，M機能がともに弱いpm型のリーダーのもとではモラールが低下し，教員の疲労感が高まったという調査結果がある。

所属教員のモラールを高めるためには，研究推進のリーダーはPM型のリーダーシップを発揮することが望ましい。しかし，仮にリーダーシップがPM型でない場合でも，校長，教頭，教務主任，研究主任らが，P機能・M機能を相補的に分担してもつことによって，PM型のリーダーシップを発揮し，教員の研究に対するモラールを高めることは十分に可能であると考えられる。

V　おわりに

■　研究の成果

本調査研究は，昨年度より二年間の継続研究として行われた。

二年次の今回は，校内研究の中心的立場にある校長，教頭，教務主任，研究主任，研究推進委員を対象として，学校のリーダーとしての立場から，校内研究の現状をどのように認識し，充実した校内研究を推進するための方策をどのようにとらえているか調査した。

調査結果を，研究の自分化・自校化という観点から分析し，校内研究の課題について，Q＆Aの形式で，実践事例を通して具体的に改善策を提言した。

生涯学習社会の到来により，専門職としての教員になる努力が以前にも増して要請されている今日，校内研究の究極の目的は，教員の資質向上・専門的力量の形成にある。各学校の教育目標と研究テーマとの構造的関連づけ，学校全体のテーマと個人のテーマの有機的結合等，解決されなければならない問題は数多い。

本調査研究のささやかな提言が，学校教育目標の具現化を目指し，充実した校内研究推進の一助になれば幸いである。

●参考文献

○坂元　昂「授業改造の技法」　明治図書　1980
○長尾一三二(代表)「教師教育の課題」　明治図書　1983
○小川一夫(編)「学校教育の社会心理学」　北大路書房　1985
○三隅二不二「リーダーシップの科学」　講談社　1986
○吉崎静夫「教師の意志決定と授業研究」　ぎょうせい　1991
○内藤勇次(編)「生きる力を育てる」　東洋館出版　1993
○中留武昭(編)「学校改善を促す校内研修」　東洋館出版　1994
○高階玲治(編)「学校改善をめざす組織づくり」　東洋館出版　1994
○小島弘道(編著)「研究主任の職務とリーダーシップ」　東洋館出版　1996

●委嘱研究員

仙台大学教授	佐藤　幹男
仙台市立南小泉小学校教諭	菅原　弘一
仙台市立古城小学校教諭	花渕　浩司
仙台市立茂庭台小学校教諭	畠山　厚子
仙台市立蒲町中学校教諭	加藤　則幸
仙台市立袋原中学校教諭	大友　智明
仙台市立折立中学校教諭	佐々木静輝

●担当

仙台市教育センター

指導主事(主担当)	米澤　孝雄
主任指導主事	末　武
指導主事	成田　忠雄
指導主事	三品　良春

資料１　校内研究調査対象人数

		校長	教頭	教務主任	研究主任	推進委員	合計
小学校	男	100	99	99	87	96	481
	女	12	15	17	27	124	195
	計	112	114	116	114	220	676
中学校	男	55	52	57	53	68	285
	女	2	5	3	7	45	62
	計	57	57	60	60	113	347
合計		169	171	176	174	333	1023

資料２　「校内研究アンケート」質問内容

質問１　研究主題が設定されるまでのプロセスについてお答え下さい。

1　あなたは研究主題を決定する際に，次の点についてどの程度重要とお考えですか。
(1)今日的な課題（情報教育，総合単元など）　(2)学校長の方針　(3)学校教育目標の具現化　(4)前年度の研究課題　(5)児童・生徒のつまずき
(6)教師の研修ニーズ

2　今年度の研究主題を決定する際に，御校では次の点についてどの程度重点をおいて決定しましたか。
(1)今日的な課題（情報教育，総合単元など）　(2)学校長の方針　(3)学校教育目標の具現化　(4)前年度の研究課題　(5)児童・生徒のつまずき
(6)教師の研修ニーズ

3　あなたは研究主題を決定するまでの次の手順について，どの程度重要だとお考えですか。
<原案作成する場面で>
(1)校長や教頭，研究主任などの話し合い　(2)研究推進委員会など，代表者の話し合い　(3)職員会議，全体会等全員での話し合い
<原案を決定する場面で>
(4)校長や教頭，研究主任などの話し合い　(5)研究推進委員会など，代表者の話し合い　(6)職員会議，全体会等全員での話し合い

4　研究主題が決定するまでのプロセスの中で，あなたの考えがどの程度反映されたと考えますか。

5　研究主題が決定するまでのプロセスの中で，御校では教員の共通理解が図られたとお考えですか。

質問２　研究計画についてお答え下さい。

1　研究実践を行う際，あなたは次の点についてどの程度重要だと思いますか。
(1)時間の確保をすることについて　・研究全体会　・学年・教科部会
(2)研究仮説を設定することについて
(3)授業研究について　・指導の改善としての授業研究について　・研究仮説の検証としての授業研究について
(4)研究計画を柔軟に考え，修正が可能なように進めていくことについて
・研究途中での評価が行われ,修正されることについて
・研究計画修正が必要になった時，話し合いの場が設けられることについて
(5)理論研究を取り入れていくことについて
(6)授業者の決定を行うことについて

2　御校では，昨年度の研究の中で，次の点についてどの程度実現できましたか。
(1)時間の確保ができたか　・研究全体会　・学年・教科部会
(2)研究仮説を設定して研究を進めていくことができたか
(3)授業研究を中心に研究を進めることができたか
・指導の改善としての授業研究について　・研究仮説の検証として授業研究について

(4)研究計画を柔軟に考え，修正が可能なように進めていくことができたか
・研究途中での評価が行われ，修正されていたか
・研究計画修正が必要になった時，話し合いの場が設けられていたか
(5)理論研究を取り入れて研究を進めていくことができたか
(6)授業者の決定を行うことがスムーズに行われたか

質問3　校内研究の評価の観点について，あなたは次の点がどの程度重要だとお考えか，お答え下さい。
(1)児童・生徒の変容　(2)教師の研究意欲　(3)教師の協力体制　(4)学校目標の達成

質問4　校内研究の組織についてお答え下さい。
1　校内研究を推進していく場合，次の組織についてどの程度重要とお考えですか。
(1) 運営委員会（企画会）　(2) 研究推進委員会　(3) 職員会議（研究全体会）　(4) 学年（部）会　(5) 教科部会

2　校内研究の企画推進の上で，次の担当者はどの程度重要とお考えですか。
(1) 校長，教頭　(2) 教務主任　(3) 研究主任　(4) 推進委員　(5) 運営委員（企画委員）　(6) 研究教科主任

3　研究推進委員会の組織について，下の欄から選んで数字でお答え下さい。（複数回答可）
(1) 研究推進委員会はどのようなメンバーで構成されていますか。
(2) 校内研究計画について，原案を作成する上で中心になる人は誰ですか。

1　校長	2　教頭	3　教務主任	4　研究主任	5　学年主任	6　学年部員	7　教科主任	8　教科部員	9　その他

(3) 校内研究について，協議する組織はどこですか。
(4) 校内研究について，最終的に合意する組織はどこですか。

1　運営（企画）委員会	2　研究推進委員会	3　学年（部）会	4　教科・教科外部会	5　職員会	6　その他

4　平成9年度に，研究推進委員会はだいたい何回ぐらい開催を予定していますか。回数をお書き下さい。

5　御校の研究組織にかかわることについてお答え下さい。
(1) 校内研究に，個人の意見や考えを自由に発言できる場が保障されていると思いますか。
(2) 校内研究の内容が教師間で共通理解されていると思いますか。
(3) 研究推進委員会は，各自の能力が十分に生かせるように運営されていると思いますか。
(4) 研究推進委員会は十分に話し合いができる場になっていると思いますか。

質問5　研究を進める上でのそれぞれの立場で，次の質問について下の欄の中から番号で5つ以内で選んでお答え下さい。。
1　研究を進めていく上で重要だとお考えになることは次のうちどれですか。
2　日頃重要だと考え，実際に取り組んでいることは次のうちどれですか。
3　研究を進めていく上で，教職員の意見を採り入れるのに重要だとお考えになることは次のうちどれですか。
4　御校で，研究を進める上で十分に行われていることは次のうちどれですか。
5　御校で，研究の推進上で課題となることは次のうちどれですか。
6　校内研究を活性化させるために，リーダーシップを次のどのような場面で発揮すべきとお考えですか。

1　研究計画の立案	2　教職員の研究意識の高揚	3　研究手順や研究内容についての方向付け	4　研究にかかわる教職員の役割分担	
5　研究にかかわる諸会議の運営	6　研究進度の連絡調整	7　研究の阻害要因の洗い出しと対応策の樹立		
8　研究に必要な時間や場所の確保	9　研究に必要な資料の収集，整理，発信	10　研究のまとめや反省	11　授業研究・授業実践の重視	
12　研究に必要な指導者の確保	13　研究に必要な予算の確保	14　適切な研究テーマの設定		
15　空き時間，放課後などの時間を活用した話し合い（個人的なものも含む）				

質問6　校内研究の推進役の立場から，「リーダーシップの在り方」を考える際に，次の点についてどの程度重要とお考えですか。
(1)話し合いの過程で，一人一人の意見を大切にする。
(2)いろいろな意見が出たときに,考えを明確に述べ，方向性を示す。
(3)先生方の教育観や教育方針を尊重する。
(4)授業研究において，必要なときには助言をする。
(5)先生方の研究上の悩みごとの相談にのる。
(6)校内研究計画の進み方について助言する。

質問7　御校の校内研修について，考えをお聞かせください。
1　研修内容に興味がもてますか。
2　研修に精神的負担を感じることがありますか。
3　研修のための教育機器は充実していますか。
4　長期展望に立った取り組みをされていますか。
5　研修内容が必要なものと異なっていると思いますか。
6　校内研修に進んで取り組んでいますか。
7　研修に時間がとられ，子供たちと接する時間が減ると感じることがありますか。
8　研究主題・方法等が，全体としてよく理解されていますか。
9　研修の内容は役に立っていると思いますか。
10　全体的に研修の意欲が低いと感じることがありますか。
11　研修図書・資料は充実していますか。
12　研修の反省や評価が的確になされていますか。
13　人間性を豊かにするもの（質質の向上を図るもの）になっていますか。
14　研究授業等の引き受け手がなく,消極的であると感じることがありますか。
15　他の校務が忙しく，研修する時間が少ないと感じることがありますか。
16　自分が日頃感じている問題点とテーマが合っていますか。
17　研修で充実感が得られますか。
18　内容の薄い話し合いが多いと感じることがありますか。

質問8　充実した校内研究にするために最も重点と考えることは何ですか。自由にお考えをお書き下さい。

豊かな学校週５日制の実現のために（第一年次）

―― 仙台市の子供と保護者への調査を通して ――

■要　約

この研究は，豊かな学校週５日制の実現のために仙台市に住む小・中・高校生及びその保護者に対して，生活の実態や意識を「仲間・時間・空間」を視点として調査し，子供や保護者の考えや願いを探り，子供たちにとって学校・家庭・地域社会のバランスある取り組みをよりよいものとするための資料を提供するものである。

調査の結果，自己認識を含む子供と保護者の生活の実態や意識，家庭や地域の役割と課題などが明らかとなった。

■キーワード

□学校週５日制　□子供の自己認識　□仲間・時間・空間

目　　次

Ⅰ　主題設定の理由 …… 79

Ⅱ　研究の目的 …… 79

Ⅲ　研究の計画と内容
　1　平成９年度 …… 80
　2　平成10年度 …… 80

Ⅳ　調査研究の概要
　1　調査の方法 …… 80
　2　調査内容の構成とねらい …… 81
　3　調査項目と質問内容 …… 82

Ⅴ　調査の結果と考察
　1　学校週５日制をどう考えているか …… 84
　2　子供自身と仲間たち …… 88
　3　子供の生活時間 …… 90
　4　子供を取り巻く生活空間 …… 92
　5　家族とのかかわり …… 94
　6　地域とのかかわり …… 96
　7　調査結果のまとめ …… 98

Ⅵ　おわりに
　1　一年次を終えて …… 100
　2　二年次に向けて …… 100

◇　参考文献 …… 100
◇　委嘱研究員 …… 100

Ⅰ　主題設定の理由

学校週5日制は，生涯学習社会への移行を目指した学校・家庭・地域の教育の見直しであり，労働時間の短縮や週休2日制が普及しつつある社会的動向を背景として，子供たちに「ゆとり」をということで導入された。これまで，平成4年9月より月1回，平成7年4月より月2回の実施という形で段階的に進められてきている。

第15期中央教育審議会の第一次答申では，子供たちに「生きる力」と，それを生み出す「ゆとり」の確保がキーワードとして取り上げられている。子供たちが家庭や地域社会ですごす生活時間の比重を増やすことにより「ゆとり」を確保し，さらに家庭や地域社会における豊富な生活経験や自然体験などを通して「生きる力」をはぐくむことの大切さが指摘されている。

児童・生徒を取り巻く実態について，平成7年度に行われた文部省委託調査の「幼児・児童・生徒の学校外活動実態調査」では，幼稚園児から高校2年生までの幼児・児童・生徒が，休業土曜日の午前は「ゆっくり休養」を第1位か第2位に挙げており，午後にまで「ゆっくり休養」と答えているケースも多くみられる。仙台市では，平成7年度・平成8年度に市内の学校を対象としてその取組状況についての調査が行われているものの，子供たちや保護者を対象とした調査はまだ行われていない。

学校週5日制導入時には，休業土曜日の受け皿の問題や共働き家庭の問題など，多くの課題についての検討がなされ，解決へ向けての対策がとられてきた。そして，社会の風潮が，学校週5日制の受け入れについてのコンセンサスができたところでの月2回の実施の際には，学校週5日制月1回実施時ほどの話題とはならずに，円滑に受け入れられた印象がある。これは，月1回導入以来2年半を経過し，制度が定着してきたためとも考えられるが，それに伴いそれぞれの立場の人々の意識がどのように変化してきているのかといった点などについて，学校週5日制月2回実施の現時点で，改めていろいろな角度からの検討を進める必要性がある。

そこで，仙台市に住む小・中・高校生及びその保護者，指導に当たっている教職員を対象として，学校週5日制のもとでの生活の実態や意識を「仲間・時間・空間」の視点から調査し，子供たちや保護者が今何を考え，何を願っているのか，また，学校では教職員がどのような取り組みを行っているのかを探ることにした。そして，その調査結果を基に，子供たちにとって学校・家庭・地域社会がどうあるのが望ましいか，また，どのような役割を果たしていったらよいのかを探り，相互のバランスある取り組みをよりよいものへと追究していくための資料を提供したいと考え，本主題を設定した。

このことは，学校が今後保護者や地域住民の期待に応え，地域社会における生涯学習の場の一つとして新たな役割を果たす際の「生涯学習体系における学校教育の在り方」を模索していくことにもつながるものと考える。

Ⅱ　研究の目的

■1　保護者の学校週5日制に対する意識を把握するとともに，学校週5日制のもとでの子供の生活実態を把握し，今後，学校週5日制の完全実施を迎えるに当たり，学校・家庭・地域社会が，それぞれどのような機能をもって子供たちにかかわっていったらよいのかの基礎資料を提供する。

■2　現在，学校週5日制のもとで学校・家庭・地域社会が子供たちに対してどのような認識を持っているのか，また，それぞれが週5日制についてもっている認識の違いを明確にし，今後，児童生徒に学校外での実体験の機会を増やし，その中で一人一人の生きる力を育てていくためには，三者がどのような役割と連携をもってかかわっていけばよいかの方向を探る。

Ⅲ　研究の計画と内容

平成９・10年度の２か年間で行う

■１　平成９年度

仙台市における学校週５日制の中での，子供たちと保護者の生活と意識に関するアンケート調査の作成，実施，処理，分析

■２　平成10年度

学校週５日制に関する教職員の意識調査の作成，実施，処理，分析及び仙台市の学校週５日制に向けた提言の作成

Ⅳ　調査研究の概要

■１　調査の方法

(1) 調査対象

調査対象は，市立小・中・高等学校の児童生徒及び養護学校の児童生徒，並びに調査対象児童生徒の保護者

① 児童生徒

ア　小学校12校（２・５年　各１学級）

イ　中学校12校（２年　各１学級）

ウ　高等学校２校（２年　各２学級）

エ　養護学校１校

② 保護者…上記　児童生徒の保護者

(2) 調査期間

平成９年10月27日（月）～11月13日（木）

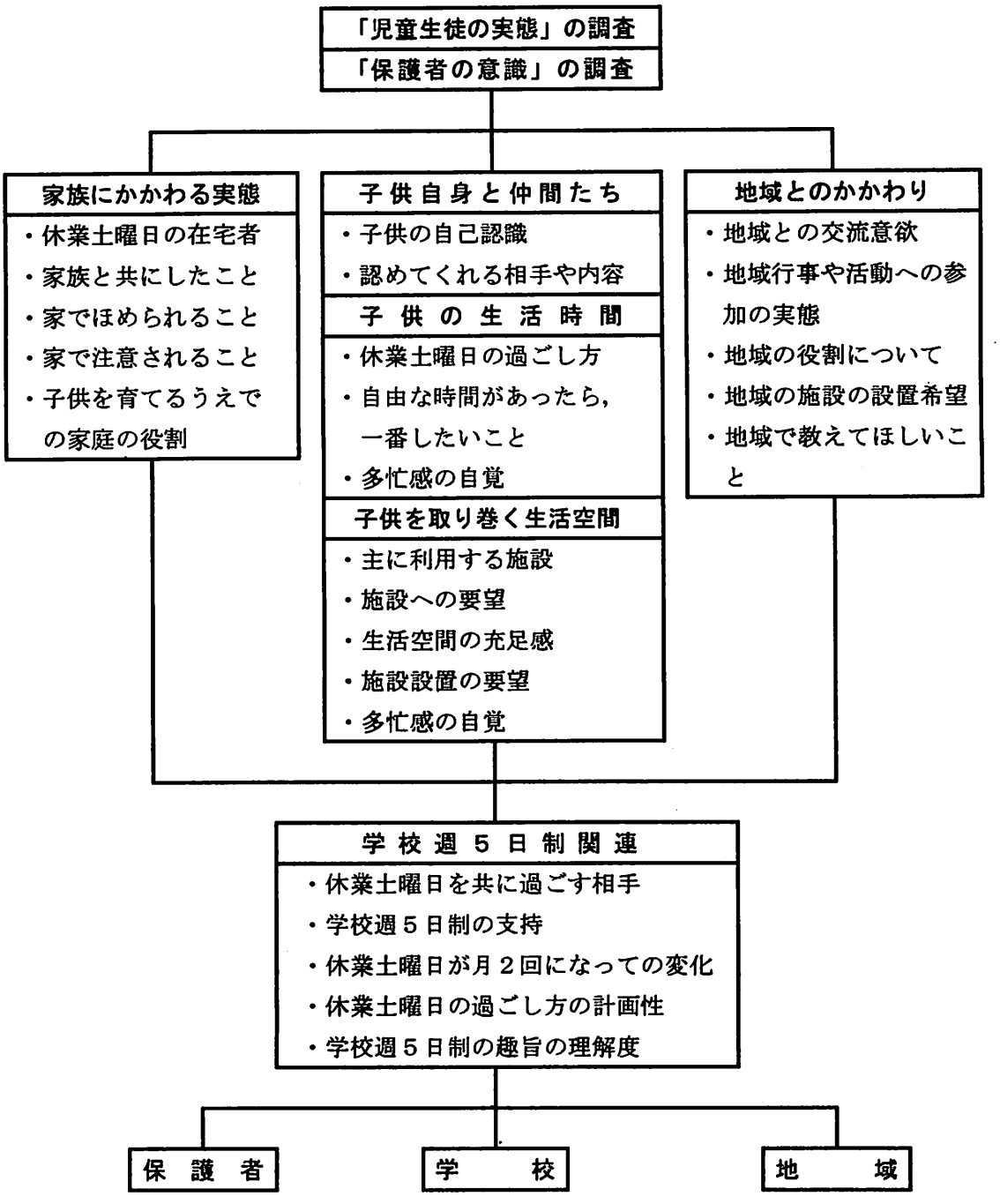
(3) 調査の方法

児童生徒に対しては，学級で一斉に調査を行い，保護者に対しては，児童生徒を通じて調査票を配布し，一週間後に封筒に入れた状態で児童生徒を通じて回収した。

(4) 調査対象校及び有効回答者数　　全市27校抽出（地域別）

校種	地域	学校名	児童生徒数	保護者数	合計
小学校	中央	上杉山通小　片平丁小 榴岡小　荒町小	２年生 男子 199名 女子 174名 ５年生 男子 190名 女子 183名	２年生 368名 ５年生 366名	2,688名
	団地	吉成小　鶴谷小 高森小　中田小			
	周辺	福岡小　栗生小 岡田小　七郷小			
中学校	中央	南小泉中　第一中 上杉山中　五橋中	男子 222名 女子 202名	416名	
	団地	西山中　向陽台中 住吉台中　山田中			
	周辺	広瀬中　秋保中 岩切中　袋原中			
高等学校		仙台高校　仙台工業高校	男子 106名 女子 45名	111名	
養護学校		鶴谷養護学校　抽出校特殊学級	男子 43名 女子 17名	46名	
小計			男子 760名 女子 621名 計 1,381名	1,307名 (父 142名 母 1,154名 その他 11名)	

■2　調査内容の構成とねらい



児童生徒及び保護者について以下の観点で調査を行う。
①児童生徒にかかわる「仲間」「時間」「空間」の三つの「間」の現状把握から
②児童生徒の自己認識（自分のよさの理解，他から認められていると感じているか）から
③保護者の子供へのかかわりから
④児童生徒及び保護者の地域とのかかわりから

■3　調査項目と質問内容

幣	No.	調査項目と質問内容
基本的属性	1	あなたの性別
	2	子供の校種と学年 続柄
家族にかかわる実態	3	休業土曜日に，たいてい家にいるのはだれですか。（小中高）
	4	先週一週間，家族といっしょにしたことは，どんなことですか。（小中高）
	5	あなたがお父さんお母さんにほめられるのは，どんな時ですか。（小中高）
	6	あなたがお父さんお母さんに注意されることばは，どれですか。（小中高）
	7	あなたは学校が休みになった日の土曜日，おもにだれと過ごしていますか。（小中高）
	8	あなたが子供の日常生活を見ていて，気になって声がけをしていることは，どんなことですか。（保）
	9	あなたは子供を育てるうえで，家庭には特にどのような役割が必要だと思いますか。（保）
地域とのかかわり	10	あなたの住んでいる地域では，夏祭りや公園などの清掃活動の行事はありますか。（小中高，保）
	11	地域で行われる行事や活動に参加したことはありますか。（小中高）
	12	参加した活動からどのようなことを学びましたか。（小中高）

幣	No.	調査項目と質問内容
地域とのかかわり	13	地域活動や行事があれば，お子さんの参加についてどう考えますか。（保）
	14	地域活動や行事へのあなた自身の参加についてどう考えますか。（保）
	15	あなたは休業土曜日に，学校が体育館を開放していることを，知っていますか。（小中，保）
	16	あなたは休業土曜日に，学校の体育館を利用していますか。（小中）
	17	あなたは休業土曜日に，小中学生が天文台や科学館などの社会教育施設に，無料で入場できることを知っていますか。（小中，保）
	18	あなたは地域の人たちが，経験や知識・技能を生かして教えてくれるとしたら，何を教えてほしいですか。（小中高）
	19	あなたは学校週5日制を考えた時，地域で実施してほしいことはどんなことですか。（小中高）
子供自身と仲間たち	20	あなたは自分をどんな生徒（児童）だと思いますか。（小中高）
	21	あなたのよいところを一番認めてくれるのはだれですか。（小中高）
	22	あなたは学校の友達から，どんなことで認められていると思いますか。（小中高）
	23	あなたは自分に自信がついたと感じるのはどんなときですか。（小中高）

幣	No.	調査項目と質問内容
子供の生活時間	24	第2，第4土曜日が休日となってからあなたの生活は忙しくなったと思いますか。（小中高）
	25	連休が多くなりましたが，あなたは自由に過ごせる時間があったら，どのように過ごしたいですか。（小中高）
	26	あなたは今まで休業土曜日には，どのようなことをして過ごすことが多かったですか。（小中高）
子供を取り巻く生活空間	27	あなたは今学年になってから，休業土曜日には，どこで過ごしたり活動したりしていますか。（小中高）
	28	あなたは社会教育施設に対して，どのような点を改善してほしいですか。（中高，保）
	29	あなたの家の近くに設置されればいいと思う施設はどのようなものですか。（小中高，保）
	30	あなたの家の近くで，子供たちが利用できる施設や公園などが，どのように整備されていると思いますか。（小中高）
学校週5日制関連	31	あなたは月2回土曜日が休みになったことをどう考えますか。（小中高，保）
	32	あなたは全ての土曜日が休みになることについて，どのように考えますか。（小中高，保）

幣	No.	調査項目と質問内容
学校週5日制関連	33	あなたは月2回土曜日が休みになって自分の生活がどのように変わったと思いますか。（小中高）
	34	あなたは休業土曜日を子供たちにどんな時間として使ってほしいと考えていますか。（保）
	35	学校週5日制が月2回実施されていますが，子供の連休の過ごし方は，日曜日だけの休みの時と比べてどんな様子ですか。（保）
	36	あなたは今後土曜日の休日を増やすためには，どんなことが必要だと考えますか。（保）
	37	あなたは第2，第4土曜日が休日となった連休に，どのように過ごすか前もって考えていますか。（小中高）
	38	あなたは完全学校週5日制になった時に心配される点は，どんなことだと思いますか。（保）
	39	あなたは学校週5日制の趣旨をどのように受け取られますか。（保）
	40	あなたは休業土曜日を，子供たちにどのように過ごしてほしいと考えていますか。（保）
	41	学校週5日制の趣旨や取り組みなどについての情報の提供は，十分になされていると思いますか。（保）

※（保）は保護者

V　調査の結果と考察

■1　学校週5日制をどう考えているか

質問　数字は調査項目の番号，( ) 内は調査対象者を校種または保と略して表記
31 月2回の土曜日が休みになったことについてどう思いますか。（小中高保）
31「よかった」とした理由は何ですか。（小中高保）
31「よくなかった」とした理由は何ですか。（小中高保）
37 連休をどのように過ごすか，前もって考えていますか。（小中高）
33·35 月2回の土曜日が休みになり，連休の過ごし方はどう変わりましたか。（小中高保）
32 毎週土曜日が休みになることについて，どう思いますか。（小中高保）
39 学校週5日制の趣旨をどのように受け取っていますか。（保）
38 学校週5日制が完全実施となったときに心配される点はどんなことですか。（保）
41 学校週5日制についての情報の提供は十分になされていると思いますか。（保）
38 今後土曜日の休日を増やすためには，どんなことが必要だと考えますか。（保）

子供と保護者の意識に大きな違い

月2回の土曜休業日の実施について，図1に示したように，どの学年も80～90%の子供は「とてもよい」「よい」と回答しており，現行の学校週5日制を支持している様子がうかがえる。中でも特殊学校・特殊学級へ通学する児童生徒の支持率は一番高い。

ところが，保護者をみると，現行の学校週5日制を支持する割合は全体の約半数に過ぎず，子供の意識とは著しく異なった結果となっている。

さらに，完全実施についての考えを図2により図1の傾向と比較すると，児童生徒は高校生を除いて「どちらともいえない」「よくない」と回答する割合が増加する。一方，保護者も同様の傾向を示し「とてもよい」「よい」と支持する回答は35%に著しく低下する。

図1・2の結果から，現行の実施を支持すると回答した保護者の中には，完全実施には「どちらともいえない」または「よくない」とする考えも多いことがうかがえる。保護者の回答を性別で比較すると，母親の「とてもよい」「よい」は，父親より10%も下回っている。月2回実施以来2年半を経過している状況ではあるが，この保護者の不安要素を十分受け止めていく必要がある。

自由時間や親子で過ごす時間が増えてよかった

学校週5日制が「よかった」とする理由について児童生徒の回答では，69%が「自由に過ごせる時間が増えた」ことをあげている（図3）。

次に多い「親子で一緒に過ごす時間が増えた」は小学生に多く，「近くの人と一緒に遊んだりできるからよい」とする回答は小学2年生に多い。

保護者も，時間的なゆとり感や親子で過ごすひとときが学校週5日制のよさととらえていた。しかし，「子供の学習への負担が思ったほど感じなかったから」が9%あり，休日増による学習面へのしわよせが保護者の不安材料であることが分かった（図4）。

親子とも学習負担が増えることが心配

月2回の土曜休業日の実施を「よくない」とする児童生徒はごく少数で，図5が示す通りその理由も様々であった。中学生は，「休みになると友達に会えなくなる」の割合が比較的大きく，学校での友達との交流が子供の学校生活の中で大きな位置を占めていることがうかがえる。また「学校行事が少なくなる」など，学校生活が窮屈になることも心配している。

保護者は，「子供の学習負担が増えること」とほぼ同じ割合で「社会的に週休2日制が定着していないこと」や「休業土曜日の子供の面倒が見られないこと」を危惧している（図6）。

連休の過ごし方について，小・中学生ともほぼ半数は「特に計画を立てない」で過ごしていた。家族と相談して決めるのは小学生に多く，中学生は友達と相談して過ごす割合が高い（図7）。

さらに，「完全実施で心配な点」（図8）をみると，保護者は勉強が大変になり，学校生活が忙しくなるのではと懸念しており，子供の自由な時間がますます増加することに対して，「家庭の教育への取り組みの違いが大きくなる」「地域社会の受け入れが不十分である」など，学習面や「受け皿」への不安感が強く表れている。

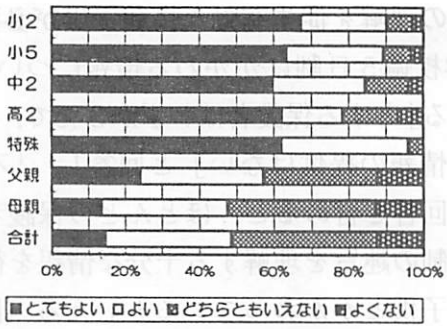


図１　学校週５日制月２回実施について

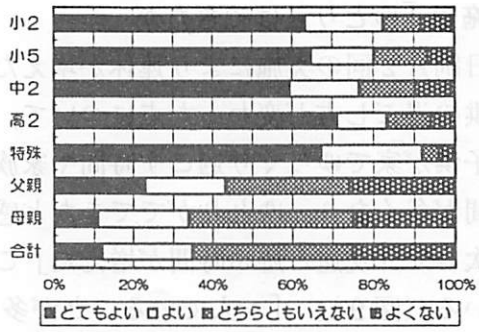


図２　学校週５日制完全実施について

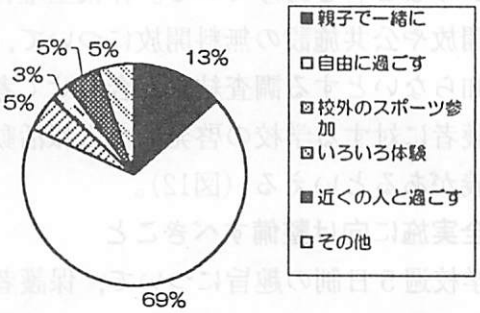


図３　児童生徒が「よかった」とする理由

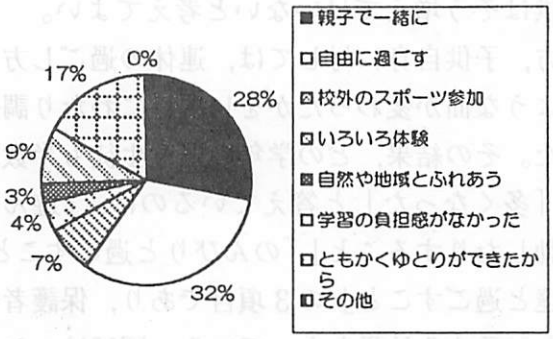


図４　保護者が「よかった」とする理由

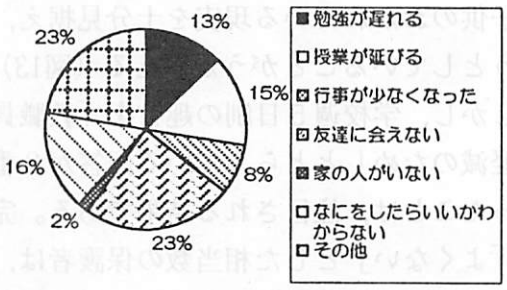


図５　児童生徒が「よくない」とする理由

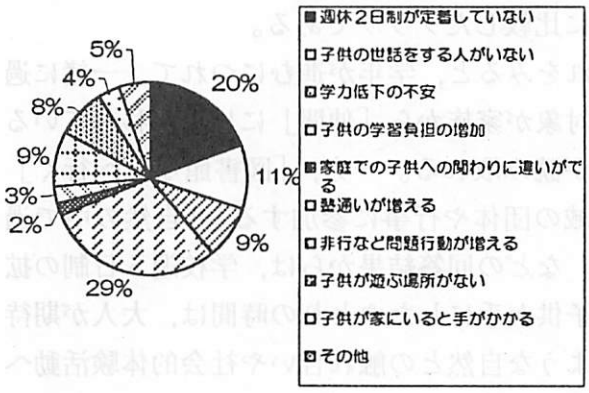


図６　保護者が「よくない」とする理由

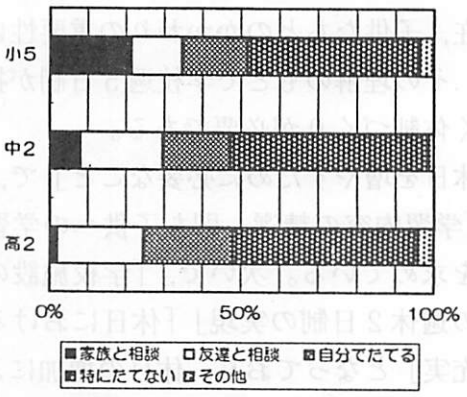


図７　休業日の計画のたて方

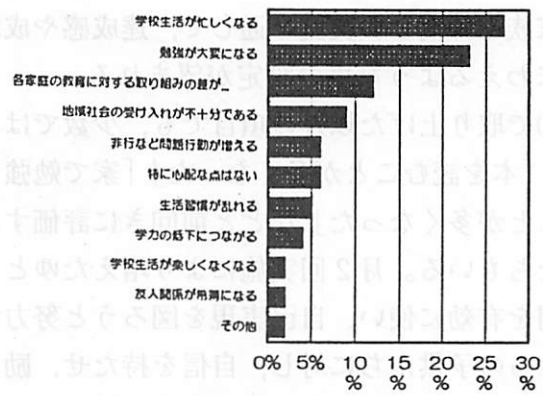


図８　完全実施で保護者が心配な点

月2回の実施で「ゆとり」はできたが

学校週5日制月2回の実施により連休が増えたことで，子供の過ごし方が変わった点について，保護者は，子供が家でゆっくり過ごす時間や家族と過ごす時間が多くなり，ゆとりがでてきたと感じている。次いで「友達と遊ぶ時間が増えた」ことをあげている（図9）。「一人でいることが多くなった」とみている保護者は，6％と少なく，子供が家で過ごすにしても，孤立した状態で過ごす子供はそう増えてはいないと考えてよい。

一方，子供自身に対しては，連休の過ごし方でどのような面が変わったかを14項目にわたり調査をした。その結果，どの学年の児童生徒も半数以上が「多くなった」と答えているのは，「遊んだり運動したりすること」「のんびりと過ごすこと」「友達と過ごすこと」の3項目であり，保護者の見方と一致する結果となっている。図10は，これらと他のいくつかの項目の調査結果を抽出し，校種別に比較したグラフである。

これをみると，学年が進むにつれて，一緒に過ごす対象が家族から「仲間」に比重が移っていることが読み取れる。一方，「図書館などへ行く」「地域の団体や行事に参加する」「自然の中で過ごす」などの回答結果からは，学校週5日制の拡大で子供が手にしたゆとりの時間は，大人が期待するような自然との触れ合いや社会的体験活動への活用には必ずしもつながってはいないことが分かる。子供の成長段階を踏まえながらも，個に応じた家族や仲間との交流を通して，達成感や成就感を味わえるような場の設定が望まれる。

図10で取り上げた以外の項目でも，少数ではあるが，「本を読むことが多くなった」「家で勉強をすることが多くなった」などと前向きに評価する子供たちもいる。月2回実施により増えたゆとりの時間を有効に使い，自己実現を図ろうと努力するこれらの子供たちに対し，自信を持たせ，励ましていく周りの支援が是非必要であろう。

趣旨の理解を促す有効な情報提供が必要

学校週5日制にかかわる情報について，「十分である」とする保護者はわずか3％で，60％は「あまり情報の提供はない」と回答し，「不十分」とする回答を含めると，ほとんどの保護者は学校週5日制の趣旨を理解する十分な情報を得ないままに，子供とかかわっているといえる（図11）。

情報を得る手段として，保護者の多くはマスコミをあげているが，30％の保護者は「学校からのたよりなど」をあげている。休業土曜日の体育館の開放や公共施設の無料開放について，ほぼ半数は知らないとする調査結果と合わせて考えると，保護者に対する学校の啓発的な広報活動は非常に意義があるといえる（図12）。

完全実施に向け整備すべきこと

学校週5日制の趣旨について，保護者は「個に応じた過ごし方ができるように」を最上位とし，「ゆとりの時間や家族と過ごす時間の確保」「自主的に時間を過ごさせる場面の設置」など，現在の子供のおかれている現実を十分見据え，理解しようとしていることがうかがえる（図13）。

しかし，学校週5日制の趣旨を「教職員の勤務の軽減のため」ととらえている回答が2番目に多かったことは，注目される結果である。完全実施を「よくない」とした相当数の保護者は，同時に「教職員の勤務の軽減のため」とその趣旨を理解していることが明らかとなっている（図14）。月2回の実施から完全実施への移行の準備を進めている現在，子供たちとのかかわりの重要性に視点をおき，その理解のもとで学校週5日制が推進されていく体制づくりが必要である。

「休日を増やすために必要なこと」で，保護者は，「学習内容の精選」即ち子供への学習の負担軽減を求めている。次いで，「学校施設の開放」「親の週休2日制の実現」「休日における地域活動の充実」となっており，休日の増加により確保できた自由な時間の有効な活用の機会や場，支援体制などを求めている（図15）。

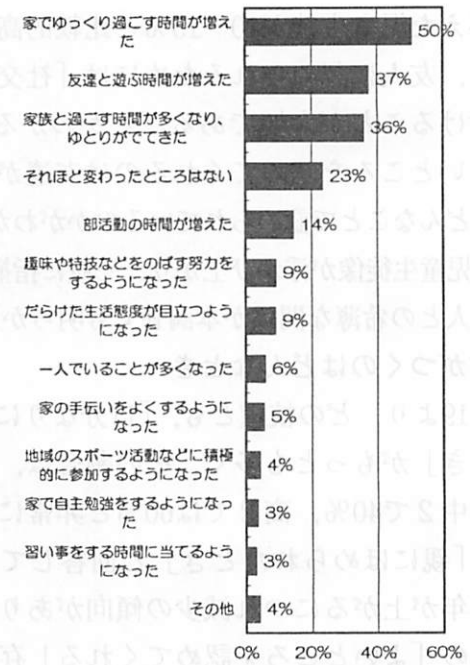


図９　保護者から見た子供の変わったところ

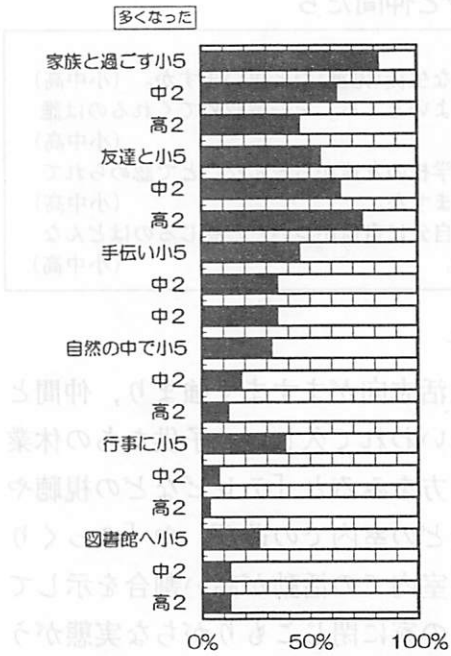


図10　月２回実施による生徒の変化

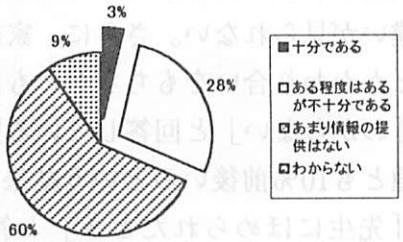


図11　学校週５日制に関する情報の提供

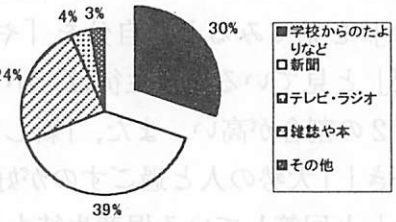


図12　情報の入手先

図13　学校週５日制の趣旨の理解

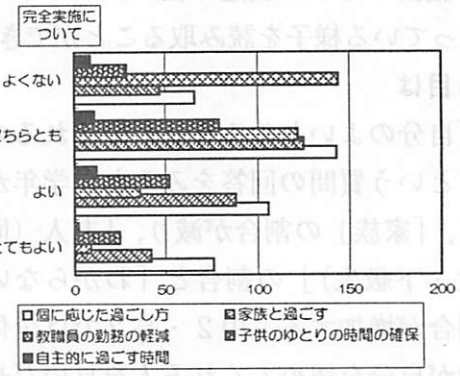


図14　完全実施についての意見と趣旨の理解について

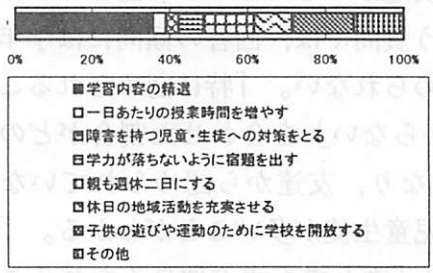


図15　休みを増やすために必要なこと

■2　子供自身と仲間たち

質問
20 自分をどんな生徒(児童)だと思いますか。（小中高）
21 あなたの「よいところ」を一番認めてくれるのは誰ですか。（小中高）
22 あなたは，学校の友達からどんなことで認められていると思いますか。（小中高）
23 あなたは，自分に自信がついたと感じるのはどんなときですか。（小中高）

自分はどんな子

子供の個人生活志向がますます強まり，仲間との交流が薄いといわれて久しい。子供たちの休業土曜日の過ごし方をみると「テレビなどの視聴やテレビゲームなどの室内での遊び」や「ゆっくり休養」といった室内での活動が高い割合を示している。子供たちの家に閉じこもりがちな実態がうかがえる（91頁　図21）。

一方，図16の「自分をどんな生徒（児童）だと思いますか」を見てみると，自分を「やさしい」「まじめだ」と見ている児童生徒は，小5・中2に比べて高2の割合が高い。また，「新しい友達と話すのが好き」「大勢の人と過ごすのが好き」「外遊びが好き」と回答している児童生徒もどの校種とも多く，機会があれば友達や他の人々とかかわりたいと思っている様子を読み取ることができる。

友達の見る目は

図17の「自分のよいところを認めてくれるのは誰ですか」という質問の回答をみると，学年が進むにつれて，「家族」の割合が減り，「友人（同級生・上級生・下級生）」の割合と「わからない」と答えた割合が増加する。中2・高2では全体の3分の1強が自分を認めてくれる人を見いだせないでいる。

図18の「友達からどんなことで認められていますか」という質問では，回答の傾向には学年による差異は認められない。「特に認められることはない」「わからない」を合わせた割合がどの学年も50％強となり，友達から認められていないと思っている児童生徒が多いことがわかる。「性格がよいこと」「誰とでもすぐ仲良くなれること」と答えた児童生徒が10～15％と比較的高い割合を示し，友人に認められるためには「社交性」を身に付けることが大切であることがわかる。

よいところを認めてくれるのは友達が一番多いが，どんなことで認められているのかがわからないという児童生徒像が浮かび上がり，一般に指摘されている友人との希薄な関係が本調査でも明らかになった。

自信がつくのはどんなとき

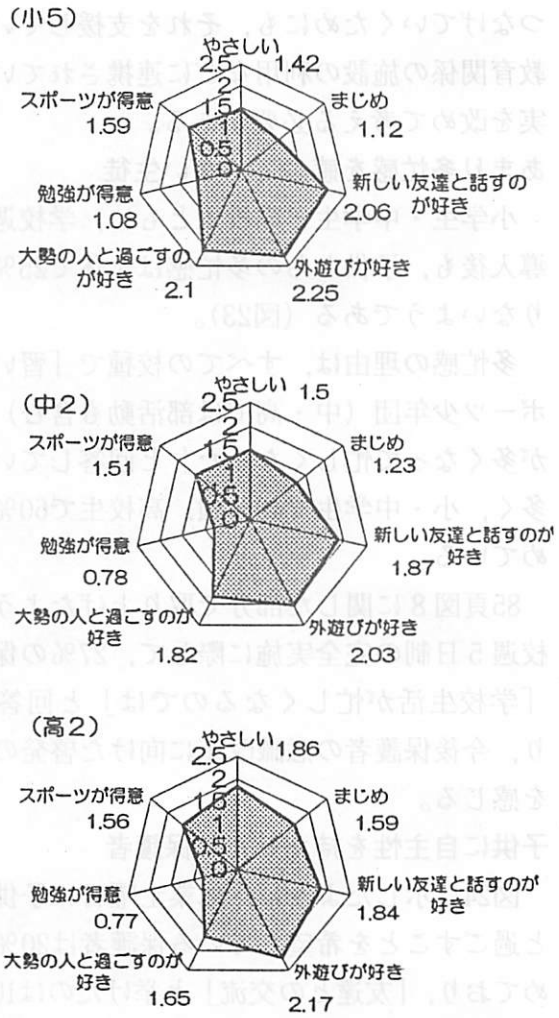
図19より，どの校種とも，「自分なりに満足できたとき」がもっとも多く，その割合は，小5で33％，中2で40％，高2では60％と非常に高い。また，「親にほめられたとき」と回答している割合は学年が上がるにつれ減少の傾向があり，前述図17での「よいところを認めてくれる」存在としての保護者の割合が減少している傾向と一致する。「友達から頼りにされた」の割合は，どの校種とも違いが見られない。さらに，家族や仲のよい友達とかかわり合いをもちながらも自信がつくときが「わからない」と回答している児童生徒はどの校種とも10％前後いるという結果である。

「先生にほめられたとき」と答えた児童生徒は，どの学年も低い割合にとどまっている。これは「よいところを認めてくれるのは誰ですか」の先生を選んだ割合と合致しており，児童生徒は教師にほめられているという実感をもてないでいる。

自信がもてずにいる子供たち

「自信がつくとき」と「休みに過ごす相手」とのクロス集計を行った図20をみると，「親にほめられた」以外は，どの項目も過ごす相手は偏りがないようである。しかし，子供たちは「自分なりに満足できたとき」も含めて，それぞれの集団を構成する人々とのかかわりの中で「認められる」経験が少なく，自己に対する自信をもてずにいる傾向がうかがえる。

95頁図36の「家でほめられること」の回答で，「家族にほめられることはほとんどない」の割合が中学生から急に増加していることも自信がもてずにいる子供たちに影響していると考えられる。



※各項目の得点は，肯定的な回答Aに3点，やや肯定的な回答Bに2点
やや否定的な回答Cに1点を与え，否定的な回答Dを0点とした。

$$得点=\frac{3\times A+2\times B+1\times C+0\times D}{A+B+C+D}$$

図16　自分をどんな生徒（児童）だと思いますか

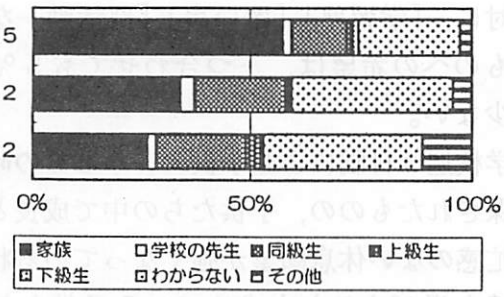


図17　自分のよいところを認めてくれる相手

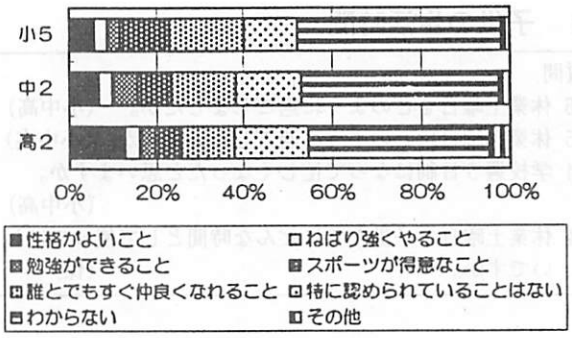


図18　友達から認められていること

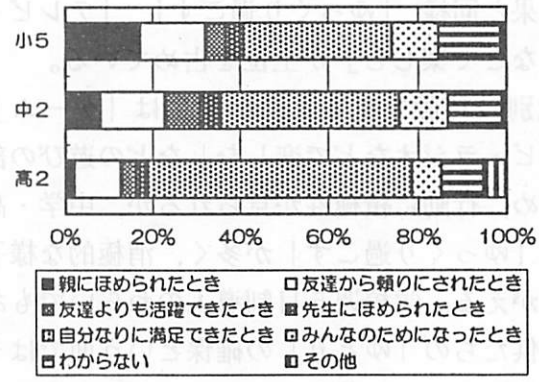


図19　自信がつくのはどんなとき

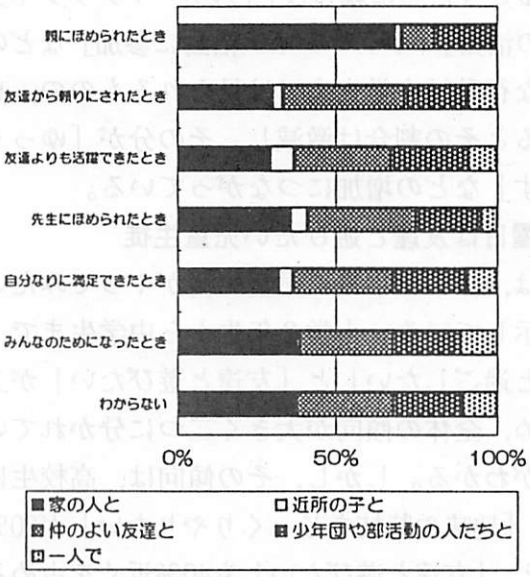


図20　自信がつくときと休みに過ごす相手との関連

■3　子供の生活時間

質問
26 休業土曜日をどのように過ごしましたか。（小中高）
25 休業土曜日はどのように過ごしたいですか。（小中高）
24 学校週5日制になって忙しくなったと思いますか。（小中高）
34 休業土曜日を子供たちにどんな時間として使ってほしいですか。（保）

休業土曜日は休養が増加

図21には，校種別に休業土曜日の過ごし方の実態を示した。全体的にいえることは，これまでの調査結果と同様，「ゆっくり過ごす」，「テレビ・ラジオなどで楽しむ」が上位を占めている。

校種別の特徴を見ると，小学生は「ゲーム」「テレビ・ラジオなどで楽しむ」などの遊びの部分も含め，行動に積極性が見られるが，中学・高校では「ゆっくり過ごす」が多く，消極的な様子がうかがえる。学校週5日制導入のねらいでもある，子供たちの「ゆとり」の確保という面ではうまく機能していると考えられる。しかし，導入のもう一つの側面である豊かな生活体験や自然体験を通して子供の「生きる力」をはぐくむという点からみると「自然に親しむ」「スポーツクラブや少年団での活動」「ボランティア活動に参加」などの体験的な行動は中学生までは見られるものの，高校になるとその割合は激減し，その分が「ゆっくり過ごす」などの増加につながっている。

休業土曜日は友達と遊びたい児童生徒

図22は，休業土曜日に児童生徒がやってみたいことを示している。小学2年生から中学生まで，「家族と過ごしたい」と「友達と遊びたい」が上位を占め，全体の傾向が大きく二つに分かれていることがわかる。しかし，その傾向は，高校生になると，「趣味や特技をじっくりやりたい」が20%強に増え，「友達と遊びたい」も40%近くを占めるようになり，個に応じた過ごし方を求める姿が見られる。こうした子供たちの意識の変化を，友達との遊びに時間を費やすだけでなく，仲間とともにもっと広く社会に目を向けていくような活動につなげていくためにも，それを支援していく社会教育関係の施設の利用などに連携されていない現実を改めて考える必要がある。

あまり多忙感を感じていない生徒

小学生・中学生・高校生ともに，学校週5日制導入後も，子供たちの多忙感は全体で25%とあまりないようである（図23）。

多忙感の理由は，すべての校種で「習い事やスポーツ少年団（中・高では部活動も含む）の活動が多くなって忙しくなった」と回答しているのが多く，小・中学生で40%強，高校生で60%強を占めている。

85頁図8に関した部分で取り上げたように，学校週5日制の完全実施に際して，27%の保護者が「学校生活が忙しくなるのでは」と回答しており，今後保護者の意識改革に向けた啓発の必要性を感じる。

子供に自主性を持たせたい保護者

図24に示したように，休業土曜日に子供が家族と過ごすことを希望している保護者は20%強を占めており，「友達との交流」と挙げたのは10%強しかなく，図22で児童生徒が回答した割合と食い違いを見せている。また，「自分でやりたい学習」「読書や主体的な学習をする時間」「スポーツをする時間」など自主性を重んじた学習の希望は全体の4分の1を占めている。子供に主体性を持たせたいと思う保護者の意向がうかがえる。反対に，「学習塾」「習い事」「部活動」など既存のものへの希望は，三つ合わせても5%と極めて少ない。

学校週5日制により子供の「ゆとりの時間」は確保されたものの，子供たちの中で成長とともに多忙感のない休息願望が強くなっている状況や，友達と過ごすことを求めている子供たちの実態と，家族と過ごすことや子供自身の自主的な活動を望んでいる保護者の願いの食い違いを考慮に入れた対応が求められている。

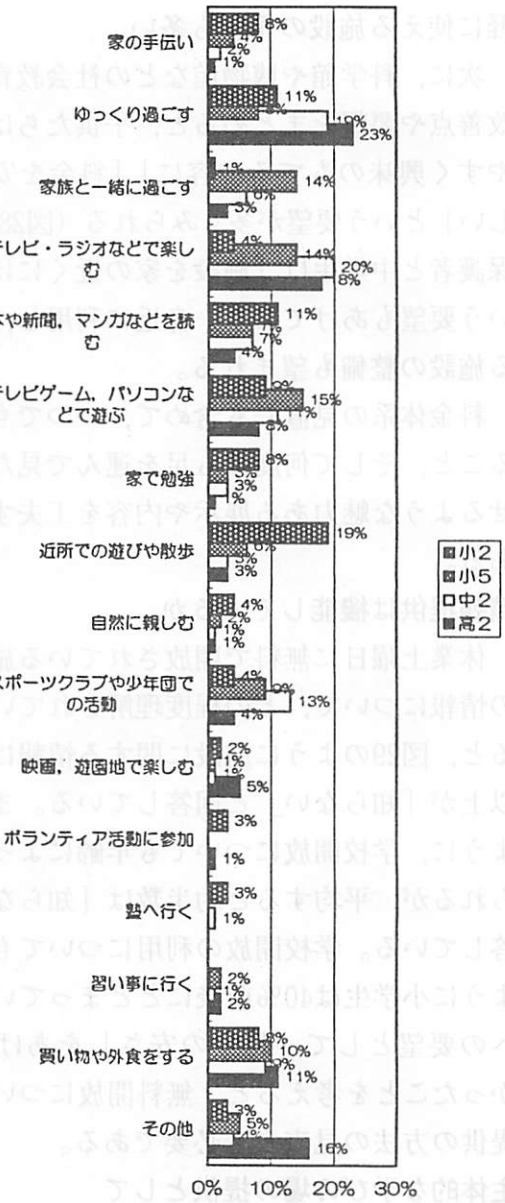


図21　休業土曜日の過ごし方

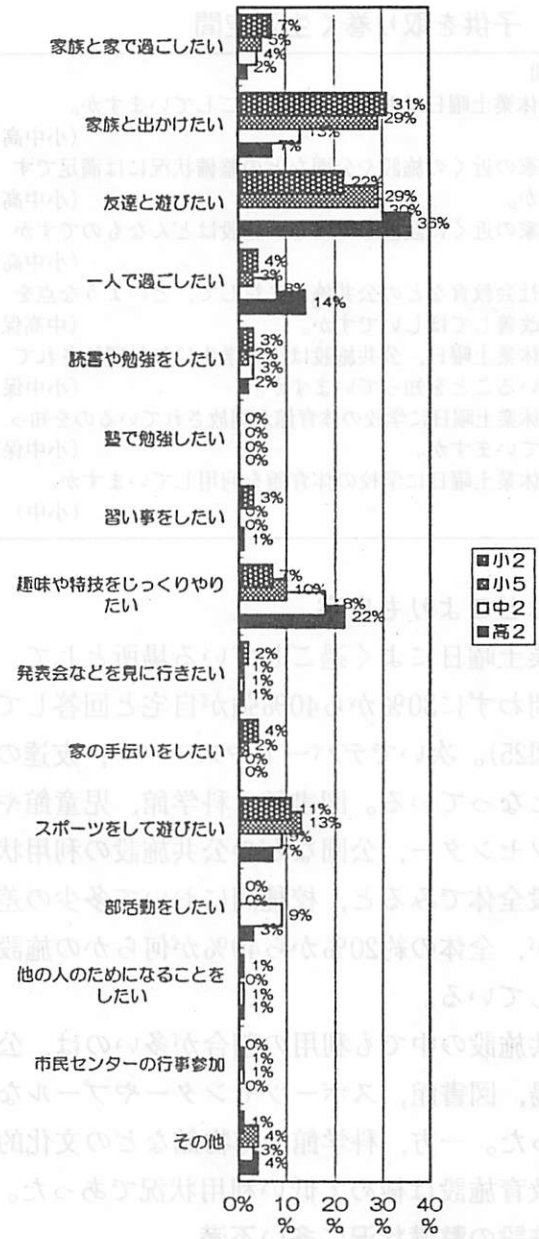
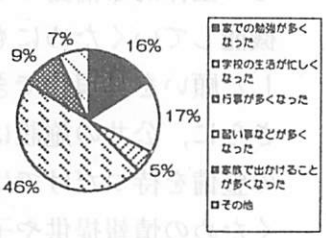


図22　休業土曜日にやってみたいこと

図23　子供の多忙感



多忙感を感じる理由

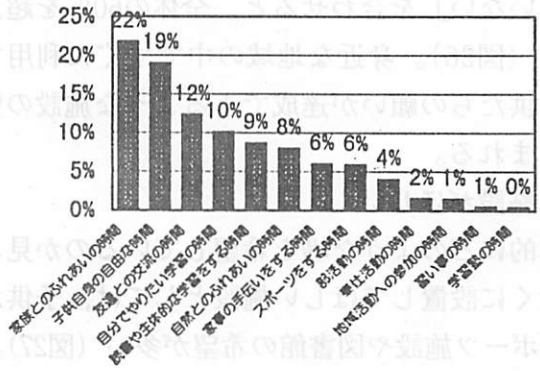


図24　保護者は休業土曜日をどう使ってほしいか

■4　子供を取り巻く生活空間

質問
27 休業土曜日はおもにどこで過ごしていますか。（小中高）
30 家の近くの施設や公園などの整備状況には満足ですか。（小中高）
29 家の近くに設置してほしい施設はどんなものですか（小中高保）
28 社会教育などの公共施設に対して，どのような点を改善してほしいですか。（中高保）
17 休業土曜日，公共施設は小中学生に無料開放されていることを知っていますか。（小中保）
15 休業土曜日に学校の体育館が開放されているのを知っていますか。（小中保）
16 休業土曜日に学校の体育館を利用していますか。（小中）

休みはどこよりも自宅

休業土曜日によく過ごしている場所として，校種を問わずに30％から40％強が自宅と回答している（図25）。次いでデパートやスーパー，友達の家の順となっている。図書館，科学館，児童館やスポーツセンター，公園などの公共施設の利用状況を施設全体でみると，校種間において多少の差はあるが，全体の約20％から40％が何らかの施設を利用している。

公共施設の中でも利用の割合が多いのは，公園や広場，図書館，スポーツセンターやプールなどであった。一方，科学館や博物館などの文化的な社会教育施設は極めて低い利用状況であった。

公共施設の整備状況に多い不満

家の近くで利用できる施設や公園の整備状況については，「あまり満足していない」と「全然満足していない」を合わせると，全体の60％を超えている（図26）。身近な地域の中ですぐに利用でき，子供たちの願いが達成できるような施設の整備が望まれる。

こんな施設がほしい

具体的にどのような場を希望しているのか見ると，近くに設置してほしい施設としては，子供たちはスポーツ施設や図書館の希望が多い（図27）。保護者も子供たちと同様に，スポーツ施設や図書館の希望が半数を占めるが，種類を特定せずに気軽に使える施設の希望も多い。

次に，科学館や博物館などの社会教育施設への改善点や要望をまとめると，子供たちは「わかりやすく興味のもてる内容に」「料金を安くしてほしい」という要望が多くみられる（図28）。また，保護者と中学生は「施設を家の近くにほしい」という要望もあげており，身近に利用し，活用できる施設の整備も望まれる。

料金体系の見直しも含めて，いつでも利用できること，そして何度でも足を運んで見たいと思わせるような魅力ある展示や内容を工夫する必要がある。

情報提供は機能しているか

休業土曜日に無料で開放されている施設や学校の情報について，どの程度理解されているかをみると，図29のように施設に関する情報は，約半数以上が「知らない」と回答している。また図30のように，学校開放についても年齢によって差は見られるが，平均すると約半数は「知らない」と回答している。学校開放の利用についても，図31のように小学生は40％前後にとどまっている。施設への要望として「料金の安さ」をあげた率が高かったことを考えると，無料開放についての情報提供の方法の見直しも必要である。

主体的な学びの場の提供として

休業土曜日を，保護者は子供にどのように活用してほしいのかをみると，91頁図24にみられるように「読書や主体的な学習をする時間」や「自分でやりたい学習の時間」として活用することを願っている。子供たちを取りまく空間が，子供たちの主体的な活動の場や自主的な学びの場として機能していくためにも，保護者や子供たちのそうした願いを具現化できる施設の整備が望まれる。さらに，公共の施設は単なる建物としてハード面の整備を待つだけではなく，活動が活性化していくための情報提供や子供たちの興味・関心を引き出し，引き付ける場としてのソフトウェアの面の充実も同時に期待されている。

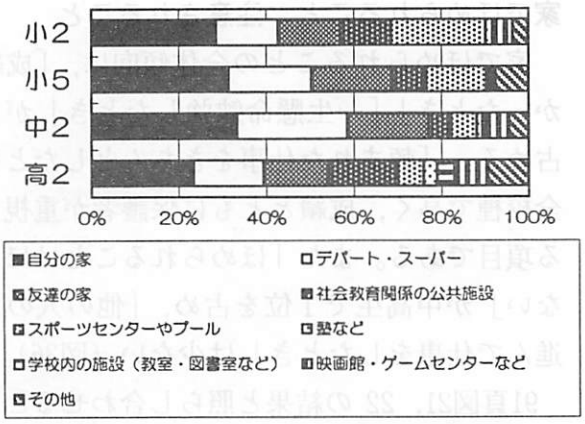


図25　休業土曜日に過ごしている場所

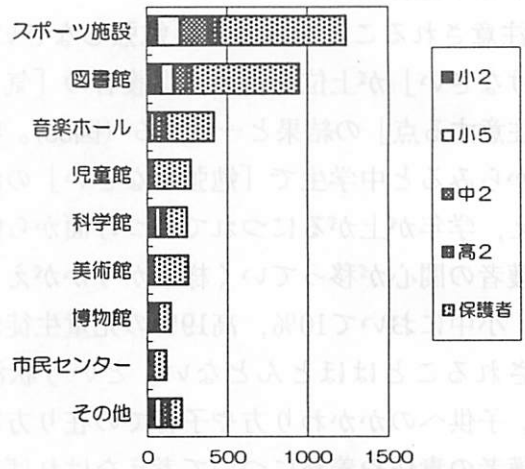


図27　施設設置の希望

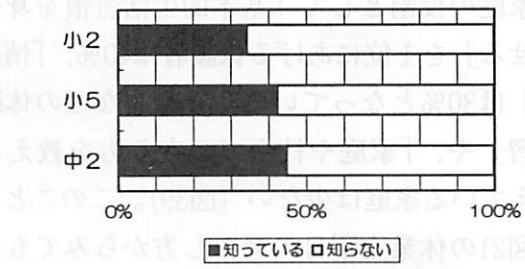


図29　公共施設の無料開放についての理解度

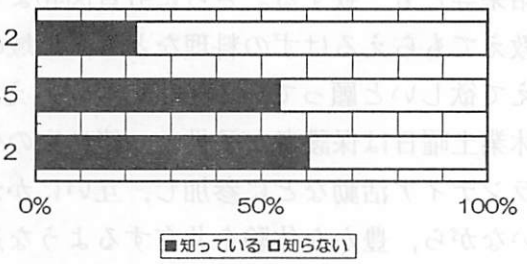


図30　学校開放についての理解度

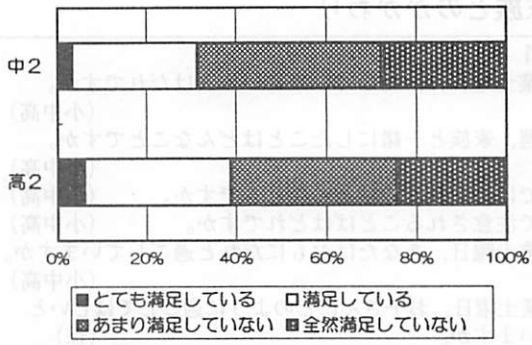


図26　施設の設置状況について

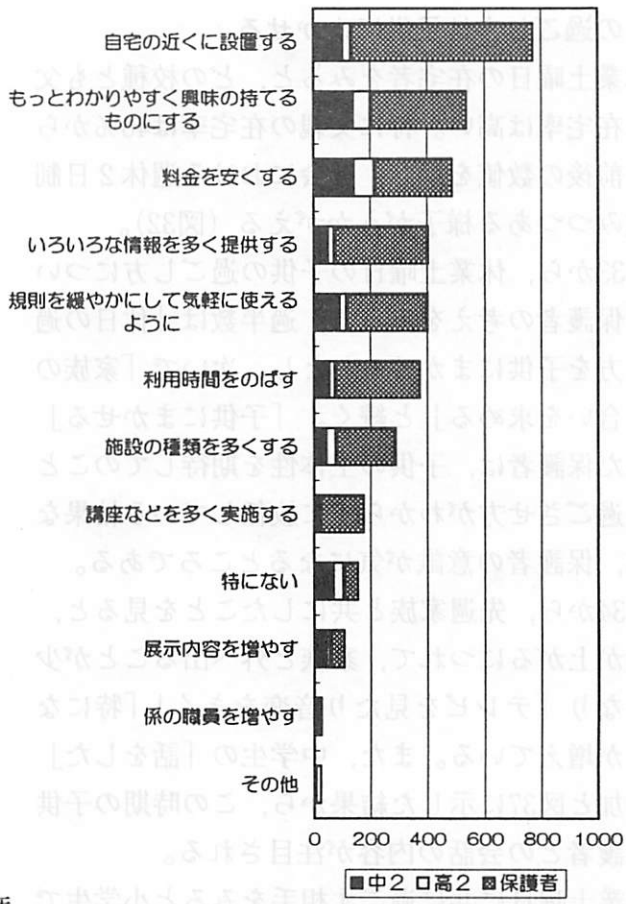


図28　施設への希望

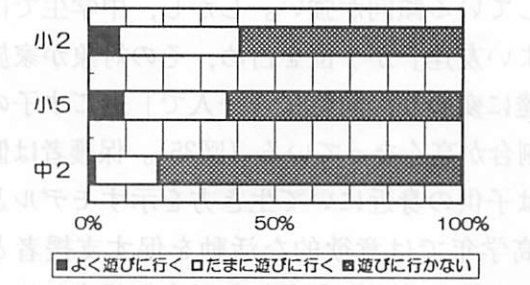


図31　学校開放の利用度

■5 家族とのかかわり

質問
3 休業土曜日に，たいてい家にいる人はだれですか。（小中高）
4 先週，家族と一緒にしたことはどんなことですか。（小中高）
5 家でほめられるのはどんなときですか。（小中高）
6 家で注意されることばはどれですか。（小中高）
7 休業土曜日，あなたはおもにだれと過ごしていますか。（小中高）
40 休業土曜日，お子さんにどのように過ごしてほしいと思いますか。（保）
8 子供の日常生活で気になって声がけをしていることは何ですか。（保）
9 子供を育てるうえで家庭に必要な役割は何だと思いますか。（保）

休日の過ごし方は子供にまかせる

休業土曜日の在宅者をみると，どの校種とも父母の在宅率は高い。特に父親の在宅率は40%から50%前後の数値を示し，社会における週休2日制が進みつつある様子がうかがえる（図32）。

図33から，休業土曜日の子供の過ごし方についての保護者の考えをみると，過半数は「休日の過ごし方を子供にまかせる」とし，次いで「家族のふれ合いを求める」と続く。「子供にまかせる」とした保護者は，子供の主体性を期待してのことか，過ごさせ方がわからずに放任している結果なのか，保護者の意識が気になるところである。

図34から，先週家族と共にしたことを見ると，年齢が上がるにつれて，家族と外へ出ることが少なくなり「テレビを見たり音楽をきく」「特にない」が増えている。また，中学生の「話をした」の増加と図37に示した結果から，この時期の子供と保護者との会話の内容が注目される。

休業土曜日に共に過ごす相手をみると小学生では，同年齢の集団の中でかかわり合うより，家族と過ごしている傾向が強い。しかし，中学生では「仲のよい友達」が1位を占め，その対象が家族から友達に変わり，同時に「一人で」過ごす子の占める割合が高くなっている（図35）。保護者は低学年では子供の身近にいて生き方を示すモデルとなり，高学年では意欲的な活動を促す支援者となって，子供の発達を考慮した対応が望まれる。

家でほめられること．注意されること

家でほめられることの全体傾向は，「成績がよかったとき」「一生懸命勉強したとき」が上位を占める。「頼まれた仕事をきちんとしたとき」も全校種で高く，成績とともに保護者が重視している項目である。また「ほめられることはほとんどない」が中高生で1位を占め，「他の人のために進んで仕事をしたとき」は少ない（図36）。

91頁図21，22の結果と照らし合わせると子供が関心をもつ内容について，保護者の価値観が子供に与える影響が大きいといえる。

注意されることをみると「勉強しなさい」「片付けなさい」が上位を占め，保護者の「気になって注意する点」の結果と一致する（図38）。特に図37からみると中学生で「勉強しなさい」の注意が増え，学年が上がるにつれてしつけ面から勉強に保護者の関心が移っていく様子がうかがえる。また，小中において10%，高19%の児童生徒が「注意されることはほとんどない」という状況がある。子供へのかかわり方や子育ての在り方など，保護者の責任や義務について考えなければならない調査結果となっている。

子供を育てるうえでの家庭の役割

家庭の役割として「基本的生活習慣を身に付けさせる」を1位にあげる保護者は40%，「情緒の安定」は30%となっている。「家事などの体験的な学習」や，「家庭や社会での在り方を教える」と考えている家庭は少ない（図39）。このことは，91頁図21の休業土曜日の過ごし方からみてもボランティア活動への参加実態はどの校種とも低く，「家の手伝い」は学年が上がるにつれて減るという結果等とも一致する。さらに97頁図46より家庭で教えてもらえるはずの料理なども，地域の人に教えて欲しいと願っている子供の姿がみえる。

休業土曜日は保護者が子供と一緒に家の仕事やボランティア活動などに参加し，互いにかかわり合いながら，豊かな体験を共有するような過ごし方が望まれてもいいのではないか。

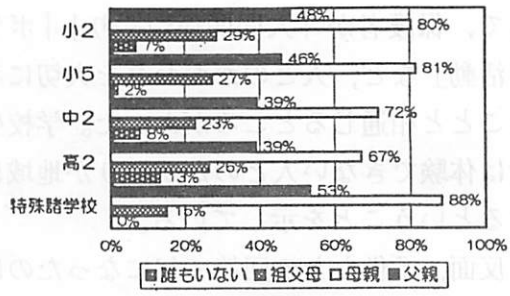


図32　休業土曜日の在宅者

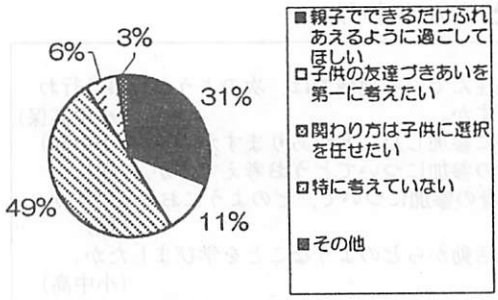


図33　休業土曜日の過ごし方についての保護者の考え

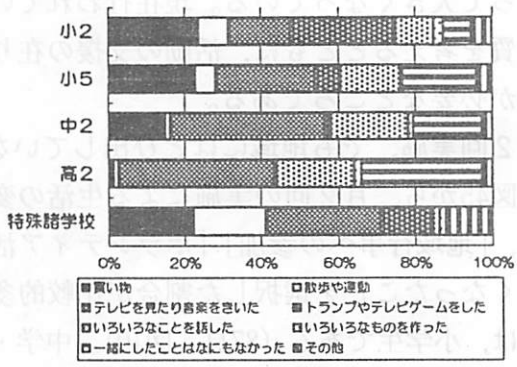


図34　先週家族としたこと

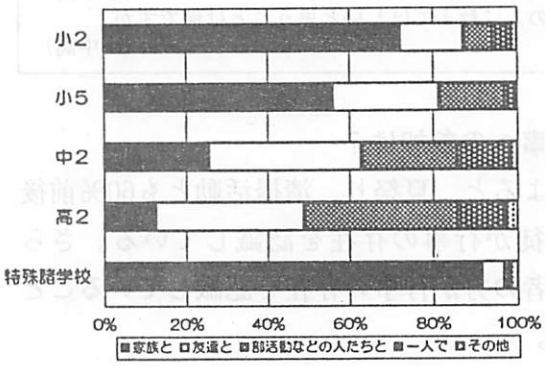


図35　休業土曜日を一緒に過ごす相手

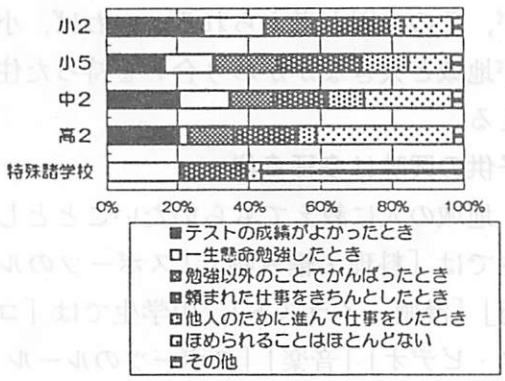


図36　家でほめられること

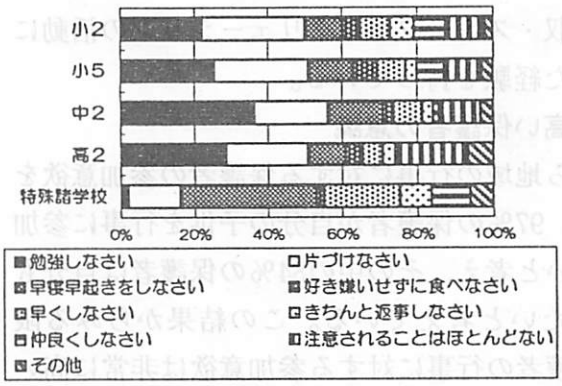


図37　家で注意されること

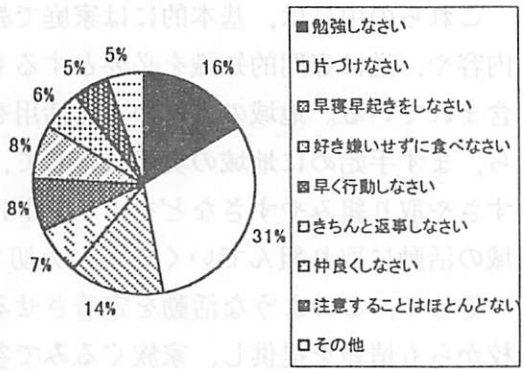


図38　気になって注意すること

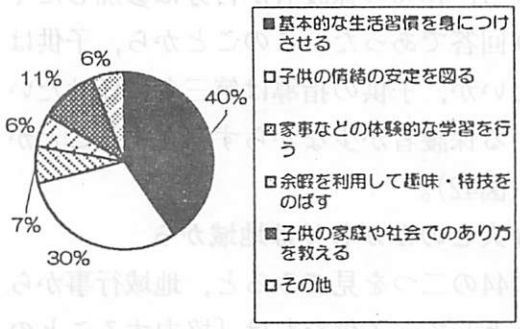


図39　家庭の役割

■6　地域とのかかわり

質問
10 あなたの住んでいる地域では，次のような行事は行われていますか。（小中高保）
11 次の活動に参加したことがありますか。（小中高）
13 お子さんの参加についてどうお考えですか。（保）
14 あなた自身の参加について，どのようにお考えですか。（保）
12 参加した活動からどのようなことを学びましたか。（小中高）
19 学校週5日制を考えた時，地域で実施して欲しいことはどんなことですか。（保）
33 第2，4土曜日が休みになって，自分の生活がどのように変わったと思いますか。（小中高）
18 地域の人に教えてほしいと思うことは何ですか。（小中高）

地域の行事への参加は？

図40によると，夏祭り，清掃活動とも60％前後の児童生徒が行事の存在を認識している。さらに，保護者の方が行事の存在を認識していることが分かる。

活動への参加の度合いは図41より，ボランティア活動を除くと，半数以上が夏祭り・清掃活動・資源回収・スポーツやレクリエーションの活動に参加した経験を持っている。

意外に高い保護者の意識

これら地域の行事に対する保護者の参加意欲をみると，97％の保護者が自分の子供を行事に参加させたいと考え，その中の84％の保護者は自分も参加したいと考えている。この結果からみる限り，保護者の行事に対する参加意欲は非常に高いといえる。

反面，自分の子供を参加させたいと考えている保護者のうち，15％の保護者が自分は参加したくないという回答であった。このことから，子供は参加させたいが，子供の指導は第三者に任せたいと考えている保護者が少なからず存在することがわかった（図42）。

いろいろな人とのかかわりは地域から

図43と図44の二つを見てみると，地域行事から学んだこととして，子供たちは「協力することの大切さ」「いろいろな人と接することの大切さ」を上位にあげている。この結果は，地域の役割として，保護者が「人間関係づくり」「ボランティア活動」など，人とのかかわりを大切に考えていることと相通じるところがあった。学校生活だけでは体験できない人とのかかわりが地域には存在するということを示している。

反面，子供たちの回答で気になったのは，地域行事から「学ぶことはなかった」を選択した者が多かったことである。この傾向は年齢が上がるに従って大きくなっている。現在行われている行事の質を考えるとともに，活動の支援の在り方の工夫が必要なところである。

月2回実施，でも地域にはとび出していない

図45から，月2回の実施による生活の変化として，「地域行事への参加」「ボランティア活動」が多くなったことを選択した割合が比較的多かったのは，小学生である（87頁　図10）。中学・高校生に比べて，小学生には子供会行事があること，児童館などの催し物への参加がみられることなどが，その一因と考えられる。いわば，小学生こそが地域と大きなかかわり合いを持った住人ともいえる。

子供の興味は多種多様

地域の人に教えてもらいたいこととして，小学生では「料理・編み物」「スポーツのルール・技術」「漫画・イラスト」，中学生では「コンピュータ・ビデオ」「音楽」「スポーツのルール・技術」，高校生では「音楽」「スポーツのルール・技術」「料理・編み物」など多岐にわたっている（図46）。

これらの中には，基本的には家庭で教えるべき内容や，逆に専門的知識を必要とするものなどが含まれている。地域の人々の人材活用を図りながら，まず手始めに地域の実情に応じて，親しみやすさや取り組みやすさなどをポイントにして，地域の活動に取り組んでいくことが大切である。

そして，このような活動を定着させるには，学校からも情報を提供し，家族ぐるみで参加するなどそれぞれが連携しながら支えていく必要がある。

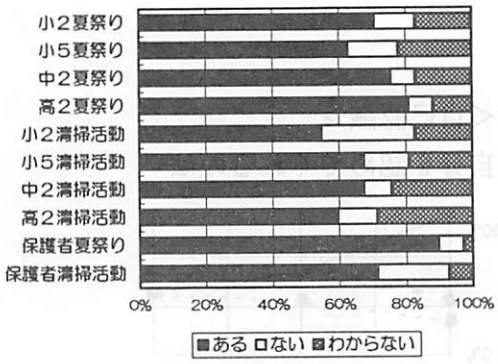


図40　地域行事についての理解度

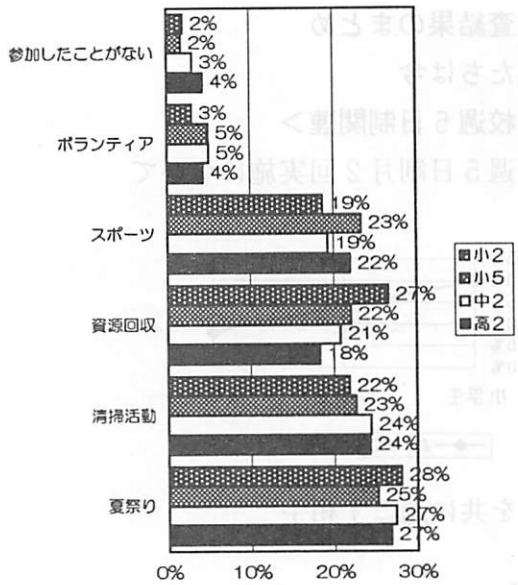


図41　地域行事への参加度

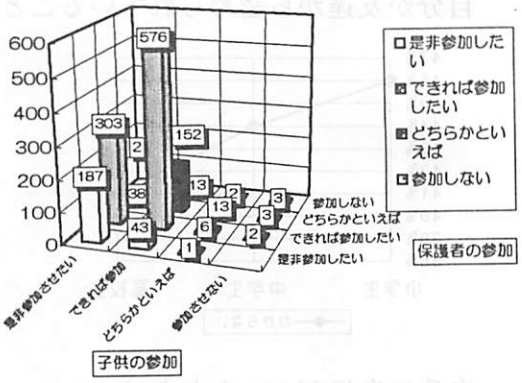


図42　子供の行事参加と保護者の行事参加

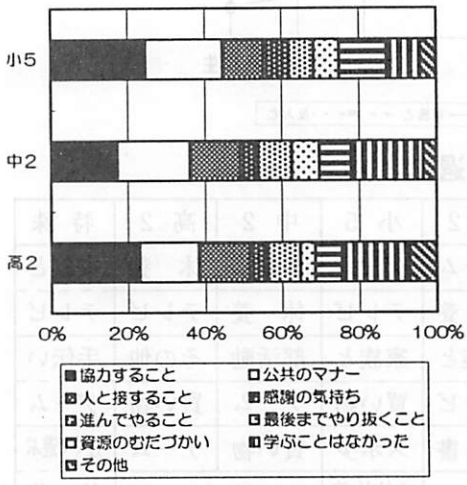


図43　地域行事から学んだこと

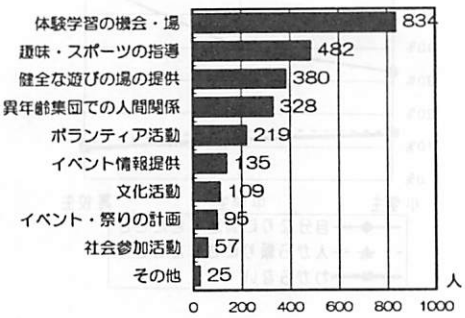


図44　地域の役割

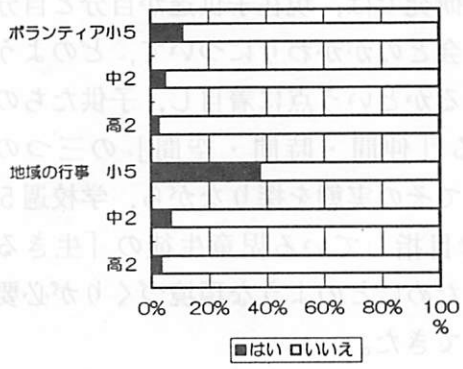


図45　月２回実施による生活の変化

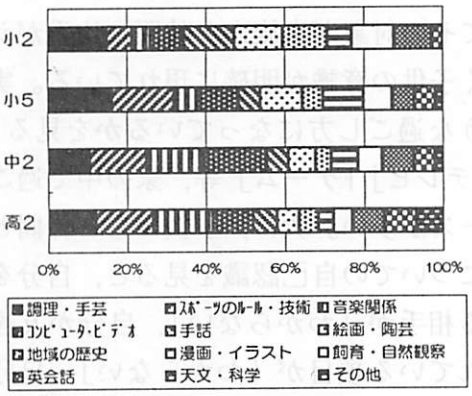


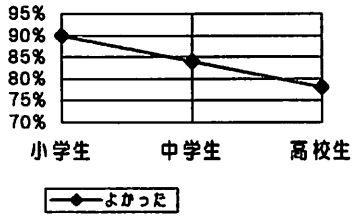
図46　地域の人に教えてもらいたいこと

■7　調査結果のまとめ

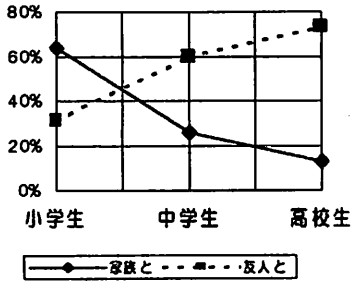
(1) 子供たちは今

＜学校週5日制関連＞

学校週5日制月2回実施について



休みを共に過ごす相手

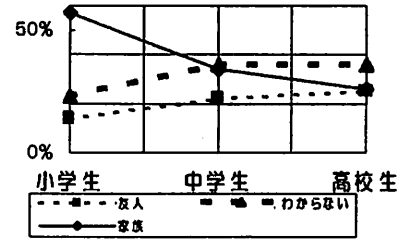


＜実際の過ごし方＞

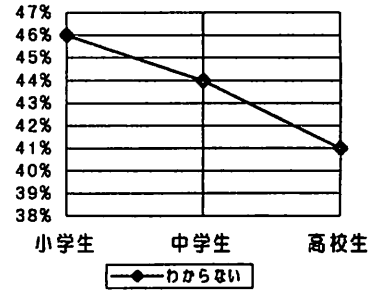
	小 2	小 5	中 2	高 2	特 殊
1 位	ゲーム	ゲーム	テレビ	休 養	家族と
2 位	休 養	テレビ	休 養	テレビ	テレビ
3 位	家族と	家族と	部活動	その他	手伝い
4 位	テレビ	買い物	ゲーム	買い物	ゲーム
5 位	読 書	スポ少	買い物	ゲーム	近くで遊ぶ
		6位休養			休 養

＜自己認識＞

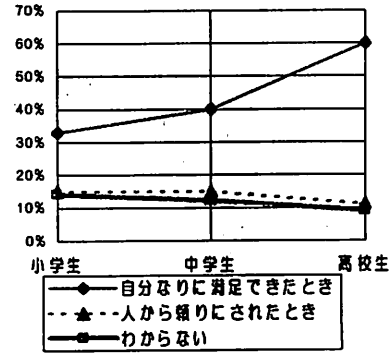
自分を認めてくれるのは



自分が友達から認められていることは



自分に自信がついたときは



今回の調査研究では，現在子供達が自分と自分を取り巻く社会とのかかわりについて，どのように認識しているかという点に着目し，子供たちの世界における「仲間・時間・空間」の三つの「間」についてその実態を探りながら，学校週5日制の導入で目指している児童生徒の「生きる力」の育成のためにどのような環境づくりが必要なのか考察してきた。

子供たちは，学校週5日制に関しては，約80%の児童生徒が「とてもよかった」「よかった」と賛意を表している。そして，その理由を「親とともに過ごせた」「自由な時間ができた」としている。校種の違いに目を向けると，学年が進むにつれてその対象が家族から仲間に比重がシフトしていく子供の意識が明確に現れている。実際にどのような過ごし方になっているかを見ると，「休養」「テレビ」「ゲーム」等，家の中で過ごしているケースが多い。次に，子供たちと仲間とのかかわりについての自己認識を見ると，自分を認めてくれる相手が「わからない」，自分が友達から認められている項目が「わからない」，自分に自信がついたのがどんな場面だったかが「わからな

い」など，それぞれがもっている「よさ」に気づいていない子供像が浮かび上がってくる。現在子供たちが過ごしている環境の中に，達成感や成就感を体験できるような場面が不足していることが考えられる。

(2) 子供の多様な願いに応えて

① 家庭

保護者の対応は大きく二つに分けられる。学校週5日制で確保された時間を「子供の自由な時間としたい」とするものと，「親子で一緒に過ごす時間にしたい」とする考えである。保護者の子供へのかかわり方については，校種により異なるが，個に応じた成就感や達成感をもたせ，それぞれの自己実現に向け，本人の自信を醸成する場を確保していく必要がある。特に小学校期に親子で地区活動にかかわることや子供たちが関心を示しているボランティア活動などに参加させ，自分で仕事をやりとげる体験をもたせるなど，子供たちの取り組みを認めてやる場を準備することが大切である。

また，保護者の家庭の役割についての回答では，その多くが「基本的な生活習慣の確立」を挙げており，体験活動の場を地域社会に求めている。さらに地域に体験活動の場を求めている保護者は，自ら活動に参加したいとする割合も高く，今後，保護者を含めた地域社会の大人が連携して，子供たちに多様な実体験をさせる場をつくり上げていく素地は十分にあるといえる。

② 地域社会

児童生徒及び保護者の地域の行事に対する理解度や行事への参加度及び子供の参加についての保護者の意識などから，保護者のより積極的かつ支援者的な立場での地域行事への参加が期待されるところである。

注目すべき点は，中・高校生が地域の行事への参加から学んだことの選択肢の中で「学ぶことがなかった」と回答している割合が高いことである。行事の計画段階に子供が参画するなど見直しが必要な点と考えられる。特に小学生は，地域の行事への参加度が高く，運営する側の意識の変革が求められよう。

地域の人に教えてもらいたいことの希望は多岐にわたっていて，地域への期待は予想以上に高い。身近な地域での手作りで参加しやすいふれあいの場や学びの場の設定，地域の人材の活用，学校・地域の施設などの活用について，早急な取り組みが必要である。

③ 各種施設

学校週5日制導入時には，休業土曜日の子供たちの活動の場として準備された公共施設の無料開放や学校の休日開放などの利用は，ある程度定着している状況と考えられる。しかし，保護者及び児童生徒への情報が十分に提供されているとはいまだ言い難い。また，施設の設置状況に地域の格差が見られるなどの課題もある。調査結果から，児童生徒が施設を利用したいという意識はうかがえるものの，利用しやすさ，展示内容への不満などで足が遠のいている感がある。子供の多様なニーズに対応するには，おのずと限界はあるが，子供一人一人がもっている興味・関心をかき立て，継続利用していける施設の在り方が求められている。

(3) まとめ

これからの学校教育を方向付けるものとして，児童生徒の「生きる力」とそれを生み出す「ゆとり」の確保を具現化するために，現在行われている学校週5日制の取り組みについて，市内27校の児童生徒及びその保護者に対してアンケート調査を行った。その中で，学校週5日制の趣旨に関するものとして，「ゆとりの時間の確保」「家族と過ごす時間の確保」については，おおむね実効があがっていると受け止められている。しかし，もう一つの側面である子供一人一人の個の充実という点について，「個に応じた過ごし方の体験・実践」「自主的な過ごし方体験」「体験活動等の経験の機会の確保」に関しては，なお不十分な様子がう

かがえた。特に，今回取り上げた児童生徒の自己認識からとらえた児童生徒像では，自信のもてない子，他から認められている内容がわからない子，よさを認めてくれる人がわからない子など，自己に対する自信がもてず，自分のよさに気づいていない子の多さが目に付いた。学校週5日制で子供も保護者も感じ取っているゆとり感は，子供たちがこれまで以上に，立ち止まったり，振り返ったり，考え直したりしながら自己実現を図るための「ゆとり」として確保されるべきである。

全ての子が，それぞれのよさを感じ取り，多様な方向にその芽を伸ばしていけるような環境づくりのために，まず学校・家庭・地域社会が取り組むべき視点を明確にしていく必要がある。そのために

① 生涯学習体系に移行する中で，子供たちの人間形成を図る観点に立って学校週5日制の意義について見直し，啓発活動を活発化すること

② 家庭が本来担うべき役割を十分果たせるように実践力を発揮し，家庭の中での子供の自己実現の場を工夫すること

③ 地域や教育施設は，家庭とともに個々が持つ教育機能を補完し働きかけること

などにより，子供を取り巻く環境の整備・充実に一層の工夫を凝らし，子供自身が自ら育つ契機をより豊かに用意していくことが課題となっているといえよう。

Ⅵ おわりに

■1 一年次を終えて

本調査研究は，二年間の継続研究のうちの初年度である。

今回は，学校週5日制を考えていくベースとなる家庭を対象として調査を行ったことで，現在直面している保護者の意識と児童生徒の意識のずれなどの課題が浮き彫りにされた。特に，児童生徒の自己認識に関する調査から，子供たちがそれぞれのもっている「よさ」に気づかないままでいる実態が明らかになった。

■2 二年次に向けて

二年次は，本調査研究のまとめとして，今回の結果についてさらに項目間の関連性についても検討し，多面的な視点からの分析を行いたい。また，今回の家庭に対する調査から浮かび上がった学校週5日制月2回実施での課題を解決するための具体的な方策について明らかにするとともに，今後学校週5日制の完全実施に向けて，保護者や地域社会に受け入れられるには，学校としてどのような環境づくりへの取り組みが必要なのかを模索するために，子供たちが日常過ごしている学校における実状を調査し，具体的な提言につなげたい。

●参考文献

○「研究紀要」宮城県教育研修センター　1986
○「研究紀要」松戸市教育研究所　1996
○「研究紀要」埼玉県立南教育センター　1997
○指定都市教育研究所連盟編『子供の社会認識を探る』　1997

●委嘱研究員

宮城教育大学教授　雪江　美久
仙台市立秋保中学校教諭　山崎　幸義
仙台市立吉成小学校教諭　板橋　高広
仙台市立鶴谷小学校教諭　曽根由美子
仙台市立南小泉中学校教諭　村上　武夫
仙台市立広瀬中学校教諭　齋藤まり子
仙台高等学校教諭　神成　浩志

●担当

仙台市教育センター
指導主事(主担当)　永野　幸一
主任指導主事　鈴木　隆司
主任指導主事　西　重明
指導主事　齊藤　玲子

抄　録

道　　徳

豊かな心をもち，たくましく生きる子供を育てる道徳の授業の在り方

——心をゆさぶる資料の選択と指導過程及び学習活動の工夫を通して——

キーワード　豊かな心，心をゆさぶる，資料の選択，資料の活用，授業の工夫，発達段階

この研究は，今求められている道徳の授業の在り方について，その手がかりを探ろうとしたものである。まず，課題を解決するために，教師と子供たちの意識調査を行い，その結果を踏まえて，授業実践を積み重ねて行った。

その結果，発達段階に応じた適切，かつ様々な形態の資料の選択と，それらを生かす多様な学習形態の工夫により，子供たちの豊かな心をはぐくむ道徳の授業が展開できるという確信を得ることができた。

仙台市教育センター教育研究紀要第５号　平成10年３月

進路指導

自らの生き方を見つめさせ，主体的進路選択能力を育成する学級活動における進路指導計画はどうあればよいか

——仙台市立中学校の進路指導実態調査を通して——

キーワード　進路指導計画，進路選択能力，学級活動，自己理解，職業観，情報理解

この研究は，主体的進路選択能力の育成を目指し，学級活動における進路指導指導計画の在り方を探るために，仙台市立中学校の進路指導に対する教師の意識と指導の実態を質問紙法により調査を行ったものである。

その結果，進路指導の計画と実践上の課題が明らかになり，「自己理解」「職業観・進路計画」「情報理解」に重点を置いた進路指導題材系統図，進路学習計画，進路指導計画案を提言することができた。

仙台市教育センター教育研究紀要第５号　平成10年３月

校内研修

学校教育目標の具現化を目指す校内研修の在り方の探究（第二年次）

――校内研修の推進リーダーに対する意識調査と実践事例を通して――

キーワード　校内研究，学校リーダー，研究の自分化，研究の自校化，教員モラール，複線型研究，

この研究は，２年間の継続研究として行われたものである。第一年次には仙台市立小・中学校教員の校内研修に関する意識及び校内研修の実施状況を調査した。

第二年次は，指導的な立場にある仙台市立小・中学校の校長・教頭・教務主任・研究主任・研究推進委員を対象に調査した。

研究の自分化・自校化（主体化）という観点から校内研修の問題と課題を明らかにし，充実した校内研修を推進するための方策と提言をまとめた。

仙台市教育センター教育研究紀要第５号　平成10年３月

学校週５日制

豊かな学校週５日制の実現のために（第一年次）

――仙台市の子供と保護者への調査を通して――

キーワード　学校週５日制，子供の自己認識，仲間・時間・空間

本研究は，豊かな学校週５日制の実現のために仙台市内に住む小・中・高校生及びその保護者に対して，生活の実態や意識を「仲間・時間・空間」を視点として調査し，子供や保護者の考えや願いを探り，子供たちにとって学校・家庭・地域社会のバランスある取り組みをよりよいものとするための資料を提供するものである。

調査の結果，自己認識を含む子供と保護者の生活の実態や意識，家庭や地域の役割や課題などが明らかになった。

仙台市教育センター教育研究紀要第５号　平成10年３月

教育研究紀要

『教育は　いま』　第５号

発 行 日　平成10年２月27日
編集･発行　仙台市教育センター
所長　庄　司　嘉　明
所 在 地　〒983-0825 仙台市宮城野区鶴ケ谷北1-19-1
TEL　(022) 251－7441～3
FAX　(022) 251－7486